

2021年度

築造方法から見た横穴式古墳の研究
(畿内地域を中心に)

指導教授：土生田純之

研究科：文学研究科

専攻：歴史学専攻

氏名：李東奎

目次

第 1 章：序論	1
第 1 節：研究目的と方法および本稿の構成	5
第 2 節：本稿の前提	9
第 2 章：畿内地域の初期横穴式石室墓の系譜の検討	
第 1 節：研究史および研究目的	11
第 2 節：各地域の横穴式石室墓の様相（遼東地域-楽浪地域-百濟漢城 期中央地域-畿内地域）	23
第 3 節：各地域横穴式石室墓の出現、展開、伝播問題の検討	40
第 4 節：小結	63
第 3 章：古墳築造の変遷過程をめぐる各観点とその意味	
第 1 節：研究史および研究目的	65
第 2 節：時期別古墳の基礎的検討	72
第 3 節：各観点から見た横穴式石室と墳丘の相関関係	96
第 4 節：小結	133
第 4 章：横穴式石室の壁体構造の築造方法と石材の形態変遷について （表面と裏面の様相を中心に）	
第 1 節：研究史および研究目的	135
第 2 節：板橋型石室と初期横穴式石室の壁体構造と築造方法の検討	142
第 3 節：畿内型石室の壁体構造と積石方法の展開（表・裏面を中心に）	156
第 4 節：石材と壁体構造の相関関係	187

第 5 節：小結	200
第 5 章：磚積式古墳の再検討（既存の研究成果を中心に）	
第 1 節：研究史および研究目的	202
第 2 節：磚積式古墳の紹介および現況	207
第 3 節：磚積式古墳の再検討（用語・石材・類型設定）	219
第 4 節：小結	260
第 6 章：古墳の新たな盛土法、墳丘版築古墳の築造と意味（百濟・泗泚期と 古墳時代の終末期を中心に）	
第 1 節：研究目的および版築概念整理	262
第 2 節：墳丘版築古墳の出現時期	268
第 3 節：墳丘版築古墳の出現背景	285
第 4 節：墳丘版築古墳の築造意味	302
第 5 節：小結	315
第 7 章：結論	317

図版目次

図 1：遼東地域の横穴式石室墓	25
図 2：楽浪・帯方地域の横穴式石室墓	27
図 3：百濟漢城期の板橋型石室墓	29
図 4：畿内地域の初期横穴式石室墓	36～39
図 5：可楽洞型と板橋型石室墓	50
図 6：畿内地域初期横穴式石室分布図	52
図 7：高井田山古墳と一須賀古墳群 I-4・I-8 号墳の棺釘の頭部形態	55
図 8：横穴式石室墓の出現・伝播時期・経路（遼東地域-楽浪地域-百濟漢城期中央地域-畿内地域）	63
図 9：検討対象古墳の位置図	73
図 10：高井田山古墳平面・断面測量図	75
図 11：五ヶ庄二子塚古墳平面測量図と石室基盤補強工法実測図	76
図 12：今城塚古墳推定模式図と石室基盤補強工法写真	77
図 13：市尾墓山古墳平面・立面測量図と石室基盤補強工法写真	78
図 14：東乗鞍古墳平面測量図と石室入口写真	80
図 15：物集女車塚古墳平面・立面測量図	81
図 16：市尾宮塚古墳測量図	82
図 17：平林古墳平面・立面測量図	83
図 18：五条野丸山古墳平面・立面測量図	85
図 19：赤坂天王山古墳平面・立面測量図	86
図 20：牧野古墳平面・立面測量図	88
図 21：石舞台古墳平面・立面測量図	89
図 22：塚穴山古墳平面・立面測量図	90

図 23：峯塚古墳平面・立面測量図	91
図 24：西宮古墳平面・立面測量図	92
図 25：菖蒲池古墳平面・立面測量図	93
図 26：西谷 3 号墓及び第 4 主体と土器出土状態	96
図 27：楯築墳丘墓の復元図・主体部・特殊器台・特殊壺	97
図 28：古墳時代中期まで確認される様々な形態と内容の儀礼行為	99
図 29：今城塚古墳の内堤埴輪祭祀場配置図と構成内容	105
図 30：三国時代の高句麗・百済の積石塚と横穴式墓制、真波里古墳群と定陵寺、 陵山里古墳群と陵寺	116～117
図 31：中心の位置による荷重圧力と支持力の状態	124
図 32：6 世紀前半の石室崩壊原因	125
図 33：6 世紀中葉～後半、垂直・水平荷重による石室の位置と規模	126
図 34：五条野丸山古墳の付加羨道の目地痕	129
図 35：百済（漢城期・熊津期）の横穴式石室壁体構造（表・裏面）の様相と魏晉南北朝 ・熊津期の埴室墳の壁体裏面の構造	145～147
図 36：高井田山古墳の壁体構造と積石様相（表・裏面）	149
図 37：一須賀古墳群（I 支群 18～21 号墳）の壁体構造と積石様相（表・裏面）	151～152
図 38：宮山塚古墳の壁体構造と積石様相	154
図 39：市尾墓山古墳の表面における壁体構造と積石様相	157
図 40：市尾宮塚古墳と物集女車塚古墳の表面における壁体構造と積石様相	159
図 41：平林古墳の表面における壁体構造と積石様相	161
図 42：牧野古墳と天王山古墳（1 号墳）の表面における壁体構造と積石様相	163
図 43：石舞台古墳の表面における壁体構造と積石様相	165

図 44：岩屋山古墳の表面における壁体構造と積石様相	166
図 45：柿塚古墳の実測図と石室内部より見える裏面における壁体構造と積石様相	170
図 46：ウワナリ塚古墳の実測図と石室内部より見える裏面における壁体構造と積石様相	173
図 47：蛇塚古墳の実測図と裏面における壁体構造と積石様相	175
図 48：塚本古墳の実測図と玄室奥壁（2段）の壁体構造と積石様相	177
図 49：塚穴山古墳の実測図と裏面における壁体構造と積石様相	179
図 50：石舞台古墳の石室実測図（平面図・横断面図・上面図）と玄室縦断面図	181
図 51：岩屋山古墳の実測図と裏面における壁体構造と積石様相	183
図 52：峯塚古墳の実測図と裏面における壁体構造と積石様相	185
図 53：6世紀前半石室（市尾墓山古墳）縦断面の模式図	187
図 54：6世紀中葉石室縦断面の模式図	188
図 55：6世紀後半石室（平林古墳）縦断面の模式図	191
図 56：6世紀末～7世紀初頭・7世紀前半石室縦断面と奥壁断面の模式図	194
図 57：7世紀中葉石室（岩屋山式古墳）縦断面と玄室左側部1段上面概念図	198
図 58：磚（埴）槨式石室または磚（埴）積石室の分布図	207
図 59：宇陀地域一帯の岩種分布図	229
図 60：近畿とその周辺の地質図	230
図 61：磚積式古墳の築造に使用された石材の様子	235～239
図 62：磚積式石槨の類型 I A1 と I B2	252
図 63：磚積式石室の類型 II A1、II A2、II A3、II B2、II C	253
図 64：版築道具と版築工法概念図	265
図 65：礼山石谷里2号墳	269

図 66 : 陵山里西古墳群 2 号墳	270
図 67 : 益山双陵	272
図 68 : 菖蒲池古墳	274
図 69 : 牽牛子塚古墳	275
図 70 : 高松塚古墳	277
図 71 : 中尾山古墳	278
図 72 : 陵山里古墳群と双陵の立地	286
図 73 : 双陵の築造構造および工程の順序	287
図 74 : 弥勒寺址基壇部の土層図	292
図 75 : 双陵と弥勒寺址西石塔の尺斤法	294
図 76 : 韓中日木塔址の心礎と舍利安置形態および施設位置	296
図 77 : 弥勒寺址基壇部の十字通路と心礎石と論山六谷里 2 号墳の断面形態	297
図 78 : 日本の墳丘版築古墳の築造様相	306
図 79 : 段ノ塚古墳の墳形復元図	310
図 80 : 牽牛子塚古墳の墳形復元図	311
図 81 : 野口王墓の墳形復元図	312
図 82 : 中尾山古墳の墳形復元図	313

表目次

表 1： 楽浪地域における横穴式石室墓の起源に関する研究	18
表 2： 百済漢城期中央地域の横穴式石室墓の起源に関する研究（楽浪・帯方地域起源説中心）	19
表 3： 畿内地域横穴式石室墓の起源に関する研究	22
表 4： 一須賀古墳群 I 支群の属性表	57
表 5： 墳丘と石室の相関関係に触れた研究	69
表 6： 時期別の検討対象古墳目録	72
表 7： 時期別墳丘と石室の位置関係および変化様相	95
表 8： 埴輪様式の変遷と設置場所	103
表 9： 機種別埴輪年表	104
表 10： 各観点から見た古墳の変化の様相	133
表 11： 横穴式石室の構造相関関係に触れた研究	137
表 12： 磚槨式古墳の研究史	205
表 13： 磚積式古墳の分類	225
表 14： 磚積式古墳の築造に使われた石種と漆喰の有無	233
表 15： 磚積式石槨と磚積式石室の属性表	247
表 16： 磚積式古墳の類型分類	252

第1章：序論

日本考古学における時代区分は、時代別に確認できる遺跡・遺構・遺物のうち、最も標示的でその時代を代表するものによって時代を区分している。その中に古墳時代がある。古墳時代は古代国家が出現した奈良時代以前の時代で、古墳・寺院・城・宮殿・製鉄・牧場（馬）・住居地（居館）・窯など、古代国家へ発展するために必須であり、重要な機能を担った様々な遺跡が多く発見されている。時代区分からも分かるように、当時最も多く築造された遺跡の一つであり、現在も最も多く残っているのが前方後円墳を頂点とする古墳である。そのため、3世紀中葉頃～8世紀初頭を研究する上で最も基本となる資料は「古墳」であり、古墳時代とよばれている。「古墳は死者が埋葬された場所であると同時に、その社会が死を表現したことを象徴的に示している」（マイクパーカーピアソン1999）。政治・社会的権力や階級関係が明らかな時代における古墳は、被葬者の政治的・社会的・経済的位置を表し、当時の埋葬観念や宗教・時代像も反映し、被葬者の階層を象徴的に示すため、巨大で華麗に築造された（権五栄2009）。

古墳時代を前期・中期・後期・終末期に分けると、前期と中期は竪穴式古墳、後期と終末期は横穴式古墳が主な墓制であった。横穴式古墳は中国の前漢代に出現した墓制であり、東アジア各国の政治的・経済的に主導権を持つ支配層の主要な墓制として広く採用された。中国を中心とする東アジアでは時期によって異なるが、中国では横穴式古墳が出現すると、その影響を受け、竪穴式から横穴式の墓制へと変化していく。竪穴式から横穴式への変化は、単に葬法や築造構造の変化だけではなく、社

会を構成する時代像全般と死生観など、観念の変化に密接な関連があったと考えられている。そのため、横穴式古墳の採用に関連して、当時の東アジア各国で導入時期や目的、葬法の理解、具現水準が完全に一致するわけではないが、少なくとも社会・政治・宗教・文化・芸術・埋葬概念などが東アジア的秩序の下で一定程度、共有・通用していたことが分かる。

このような横穴式古墳における埋葬主体施設は、東アジア各国で木・埴・石など様々な材質により築造された。その中でも韓国と日本では主に石を利用して埋葬主体施設を築造した。韓国の場合、埴室墳も確認されているが、樂浪郡と百濟・熊津期の中国南朝の影響を受けて作られたものがほとんどであり、このような中国的な要素を直接的に受け入れた一部の埴室墳以外は、概ね石で築造したと見てよい。日本の場合は系統の異なる北部九州地域と畿内地域に分けられるが、本稿のテーマである畿内地域を基準に横穴式古墳が導入される5世紀中後半から古墳が消滅する8世紀初頭までの支配層の埋葬主体施設はほとんど石積みであるため、埋葬主体施設の側面から横穴式古墳=横穴式石室と考えても問題はない。現在、日本では畿内地域における横穴式石室の伝播について様々な議論が行われているが、主に韓半島を通じて伝播され、初期横穴式石室は外形と副葬品において百濟漢城期の中央地域の石室とほとんど変わらないほど類似しており、百濟の影響を大きく受けたものであるという意見でまとまっている。とくに埋葬主体施設の築造方法と関連し、初期横穴式石室から日本の独自形態である畿内型石室、そして横口式石槨に至るまで（棺-槨-室の論争はあるが、形態上、横口式石槨も広い範囲で

横穴式石室と見ることができる）、直接・間接的に百済からの影響があり、それが一部または全体的に、横穴式古墳に反映されたという見解は以前から言及されてきた。無論、日本学界の主流の見解は、畿内型石室が畿内地域の支配層の主流となって以降の構造変遷に関連して（畿内型石室に限定）、石室の多様な要素が検討され、一つの系統として理解する立場と、多様性に基づく多系統と理解する立場に分かれていた。現在、両者は相反する見解ではなく、共通性と多様性が共存するものと認識している。また、具体的には触れなかったものの、従来の初期横穴式石室からの影響または外部からの影響が続くというよりは、主に畿内地域の内部的な発展により、畿内型石室の築造方法の変化が見られるということとを前提に、前述の石室の構造変遷の見方が主流となっている。

一方、古墳は埋葬主体施設のみを意味しない。古墳の構成要素としては、埋葬主体施設および葬法、墳丘および墓域施設、副葬品などで構成されるため、棺・槨・室をはじめとする埋葬主体施設は古墳の一部といえる。横穴式石室ではなく、横穴式古墳の築造方法について述べる際、平面と立面の構造変化、積石方法、構築材料など埋葬主体施設と直接関連する部分のほか、墳丘の盛土方法、石室と墳丘の位置、墓域施設なども横穴式古墳の築造方法に含めることができる。とくに、日本は韓国と中国に比べ伝統的に墳形と大きさに重要な意味を与えている。従来の竪穴式埋葬主体施設に最適な墳丘、そして墳形と大きさの重要性が依然として残存した上に、横穴式埋葬主体施設が導入されたため、横穴式埋葬主体施設（石室・石槨）の築造方法のみの検討では、横穴式石室の全体像を把握することはできないと考えられる。また、古墳の各要素を総合的

に検討するのではなく、要素ごとの検討だけでは、正しい検討結果が得られない可能性があり、その結果をそのまま認めることはできないという問題も発生する。そこで前述の問題意識の上で、本稿の題名を横穴式石室ではなく横穴式古墳とし、本稿ではこのような背景と観点から古墳の各要素を検討した。

第1節：研究目的と方法および本稿の構成

ここでは5世紀後半～8世紀初頭にかけて、畿内地域における横穴式古墳の築造方法を中心に検討するため、研究の目的と方法を提示し、各章の具体的な検討内容をまとめる。

これまでの研究にみられるように、築造方法を研究テーマとする場合、古墳の様々な要素(墳丘・石室・墓域施設など)の中の一つを定め、研究されてきた。この場合のメリットは、一つの要素を深く検討することで、非常に細かい部分まで綿密に分析できるということである。しかし、過度に細分化された場合、分析された結果の意味を探するための分析ではなく、分類のための分析にもなってしまふ。例えば、6世紀前後～7世紀中葉に主に築造された畿内型石室の様々な分類案が代表的であるが、約150年と比較的短い期間であるにもかかわらず、分類基準によって9期または10期に細分化されすぎている(これが意味のない分類案という意味ではない)。古墳は以前から人気のある研究テーマであったため、各要素別に多くの研究が行われてきたが、研究の進展に差もみられる。特定の一要素だけを選んで重点的に検討することも必要であるが、古墳を正しく理解するためには、様々な要素を融合して研究を進める必要性がますます大きくなってきている。研究の多様性を維持し、正しい解析を行うのために、方向性の点検と転換が求められる。これらを基に、各章の具体的な検討内容をまとめると以下のとおりである。

第2章では、畿内地域に初期横穴式石室が導入されるまでの過程をまとめる。最近、畿内地域の横穴式石室は百濟漢城期の中央地域と深い関係があると整理されている。そして百濟漢城期の中央地域の横穴式石室

は楽浪郡の移住民集団によるものであり、楽浪郡の横穴式石室は中国東北地域を起源としていることが、各時期別研究により次第に明らかになっている。しかし、系譜研究についてはまだ通時的に行われたことがなく、主に該当地域を中心に前後関係を見るため、地域別・時期別に分けて研究されており、全体的な様相を見るには限界がある。また、中国から韓国を経て日本へとつながる全体的な流れをまとめた研究も確認されていない。

横穴式古墳で最も中心施設ともいえる埋葬主体施設である横穴式石室の起源と系統を正しく検討しなければ、単なる現象研究に偏るおそれがある。視野を広げるためにも東アジアの横穴式石室研究は、起源・系統だけでなく様々な観点から検討する必要がある。ここでは起源と系統を通時的に整理しながら、導入・伝播に関連して時期問題を中心に検討する。

第3章では、横穴式古墳の要素のうち、墳丘と石室を中心に提起して、巨大な墳丘において石室がどこに位置しているのか分析し、それがどのような意味を持つのか、3つの観点を導出して検討を行う。横穴式石室は日本に導入され支配層の墓制となったが、その過程で韓国や中国とは異なる大きな違いが確認できる。韓国や中国では石室が地下または地上（地表面に位置）であるのに対し、日本では特に巨大な墳丘の頂上に築造され、墳丘と石室の大きさと位置が時期的に変化する。このような変化と関連して様々な解釈が提示され、それなりの成果も収めている。また、墳丘と石室の位置に関する検討は横穴式古墳の複数の要素を融合させて研究を進めることが可能であるため、横穴式古墳の研究という本

稿の目的にも合致する。従来は一つの観点から行われていたため、ここでは検討できる様々な観点の中で、今回研究が可能であった死生観・心性面・築造技術を中心に進めていきたい。ますます発掘技術と方法論が発展しており、多様な観点から融合研究を行うことによって、より多様な分析結果を期待することができる。

第4章では畿内型石室の築造方法のうち、奥壁と側壁の表面と裏面を中心に石材の大きさと積石形態の時期別の変遷過程に注目した。全ての建築物の構造を正しく把握するためには、表面より裏面の様相が重要である。また、裏面の様相はいまだ本格的に検討されたことがないため、従来、表面の様相から検討されていた部分が裏面の様相とどのような共通点と相違点をもつのかについて再検討を行う。また、表面で確認できる築造角度が裏面にも影響を及ぼしているのかについても検討が必要である。一方、初期横穴式石室と畿内型石室の壁石の表面・裏面を中心に築造方法を比較検討し、両者の関連性を明らかにする研究も必要である。このような作業を通じて、畿内地域の横穴式石室の構造と築造方法を再び新たな観点からとらえ直し、相違点と共通点、そして新しい要素を抽出し、横穴式石室の研究に新しい転換を提起する。

第5章では横穴式古墳のうち、特別な石材を使用しているといわれる磚積式古墳について検討を進める。磚積式古墳は7世紀中葉を中心に、奈良盆地の東南側に集中的に造営された。石槨と石室の両方が存在し、現在まで20基ほどが確認・調査された。榛原石という石材を磚の形状に加工して築造したことが最大の共通点と特徴である。磚積式古墳は確認された基数に比べ、様々な観点から研究が行われてきた。しかし、発見

初期から最近に至るまで、埴状という点を除けば、分類の基準となる構造・用語・類型・石材などに共通点が確認できない。前述の点から類推すると、これまで確認された磚積式古墳について、上記の問題意識にもとづく全般的な見直しが必要であると考え。ここでは解釈上の誤謬がないように注意しながら、直接観察によって検討が可能な用語・類型・石材を中心に磚積式古墳を分析し、改めて再検討・定義する。

第6章では韓国は7世紀前半後期、日本は7世紀中葉後期から本格的に確認される横穴式古墳に新たに出現した墳丘築造技法である版築について、韓日間の比較とその使用意味について検討を進める。版築自体は上述した時期より少し早い段階の古墳からも確認されるが、版築が主要墳丘盛土方法になるのはこの時期からであり、これと連動して、韓国と日本ではそれぞれ埋葬主体施設（石室・石槨）の規模と築造位置、石材加工技術、墳形、墳丘の規模などから画期と呼ばれるほどの変化が確認される。このような変化は、竪穴式から横穴式の墓制へと交代したことによる政治・社会・宗教・死生観の変化にも関連している。とくに最上位階層にのみ確認されているという点を考慮して、墳丘版築古墳の築造が当時の社会とどのように関連しており、築造がどのような意味を持つのか検討する。

第2節：本稿の前提

次に、論旨の展開に先立ち、研究の対象となる横穴式古墳の時間的・空間的範囲を設定する。時間的範囲は、横穴式古墳のうち、最初に出現する初期横穴式石室の出現時期である5世紀後半から横口式石槨の築造が終了する8世紀初頭までと設定した。空間的範囲は畿内地域に造営された横穴式古墳が対象であり、この地域を中心に研究を進める最も大きな理由は、ここが大和政権の中心地であり、日本で最も強い勢力を持ち、ここを中心に古代国家が出発したため、竪穴式古墳が築造された時期から古墳の密集度と分布、墳形、規模、出土遺物の様相が他地域より優勢であるというところにある。また、周辺の様々な性格を持つ遺跡も、他の地域で確認できる同じ類型の遺跡より優れた位置を占めるなど、中心地としての役割を持っている。また、横穴式古墳の出現から終了までの変遷過程を把握する上でも、中心地の資料が最も有効であり、横穴式古墳の特徴をより明確に設定することができ、畿内地域における横穴式古墳が代表的で象徴的であるという点も空間的範囲を畿内地域に設定した理由の一つである。ただし、ここで指摘しておくべき問題は「畿内」という概念である。「畿内」という用語が成立した時期については、文献史学で諸説あるが、確実視されているのは7世紀後半である。したがって、本稿の分析対象である横穴式古墳が造営された時期には、「畿内」という概念はまだ成立していなかった。しかし、すでにこの地域で確認される古墳を「畿内型古墳」と命名し、研究史でも「畿内地域」として長い間使用してきたため、ここでも畿内という用語をそのまま使用することにする。そして畿内の範囲については、後の5畿内（山城・大和・

河内・和泉・摂津)に該当する地域概念として「畿内」という用語を使用する(太田宏明1999)。

横穴式古墳の編年基準は、古墳の内部から確認できる家形石棺と須恵器が主に使用されているが、本稿ではおおむね15～30年程度で設定可能な須恵器の型式変化を中心に編年を行った。分期の設定については、石室または墳丘を基準に1～9期または1～10期に細分されることもあるが、本稿では他の資料との比較を容易にするため、須恵器に付与された絶対年代を使用することとする。

第2章：畿内地域の初期横穴式石室墓の系譜の検討

第1節：研究史および研究目的

1. 研究目的

日本列島の横穴式石室墓は4世紀末に九州地域で北九州型横穴式石室墓が出現し、その後、これらは5世紀の肥後型横穴式石室墓につながる。一方、畿内地域でも5世紀後半に畿内型石室墓の原型となる初期横穴式石室墓が出現する。

初期横穴式石室墓は現在までの資料から見て、大きな範疇では九州系横穴式石室墓と関係なく畿内地域に突然出現したものと理解できる。なぜなら、従来の研究により明らかになった九州地域における横穴式石室墓は地域別に様々な形態で造営され、横穴式石室墓の構造的変化が累代にわたって持続しているため、その地域において成長を続けた集団が築造したものと判断されるからである。それに対して、畿内地域における初期横穴式石室墓は、立地、玄室の位置、平面形態、羨道位置、石材、壁石と天井の構造と形態などがほぼ統一された様相を示しており、古墳の築造方法がすでに完成した形態で畿内に導入されたと考えられる。以上のことから、初期横穴式石室墓を築造した集団は、畿内で長期間発展してきた集団と見るよりは、外部から移住・定着した集団であり、その後、周辺に急速に広がったと考えられる。

現在、畿内地域の初期横穴式石室墓の起源に対して百済の影響があったことは周知の事実である。しかし、細部的に百済のどの地域からの影響を受けていたかについては、研究者ごとに意見の相違がある。近年、

百濟漢城期の首都であった風納土城と夢村土城を中心に、周辺の城南板橋洞古墳群・ソウル牛眠洞古墳群・河南広岩洞古墳群・河南甘一洞古墳群・河南金岩山古墳群など、多数の横穴式石室墓が発掘調査された。特に河南甘一洞古墳群では、単一遺跡として50基以上の横穴式石室墓が発見されており、周辺の古墳群の数を合わせると、地方で確認された横穴式石室墓と比べ圧倒的に多い。上述の遺跡から確認できる横穴式石室墓は、その形態と構造において他地域の漢城期横穴式石室墓とは明確に異なる。現在、韓国で一般的な漢城期横穴式石室墓の分類案によると、中央地域の横穴式石室墓は可楽洞型と板橋型石室墓に分類されており、百濟中央地域の支配勢力の性格を示す石室類型として注目されている。

興味深いのは板橋型石室墓と畿内地域の初期横穴式石室墓の関係である。両地域は互いに遠く離れているにもかかわらず、石室構造において類似性を確認することができる。特に大阪府柏原市高井田山古墳や大阪府南河内郡一須賀古墳群I支群、奈良県桜井市桜井公園2号墳などは規模や副葬品の構成様相を除けば違いが見出せないほど類似している。また、両地域の石室墓の分布範囲はすべて当時の中央地域に集中しているため、中央支配勢力間の直接交流を示す証拠（金奎運2014）となっている。このような点から、従来は熊津期の宋山里型石室墓や漢城期の他地域に起源を求める意見もあったが、現在、韓国では板橋型石室墓が畿内地域における初期の横穴式石室墓の起源と理解されている。

ところが、畿内地域初期の横穴式石室墓と同様、板橋型石室墓の出現と関連し、板橋型石室墓の出現地域と非出現地域との間で異なる様相が確認できる。漢城期において他の類型の横穴式石室墓が出現する地域で

は、前時期から漸進的に墓制の変遷過程が確認できる。しかし、板橋型石室墓の出現する地域の周辺には前時期の先行遺跡は確認されず、突然、横穴式石室墓が出現しているため、築造した集団は何世代にもわたって成長してきたと見るよりは、ある時点において、移住・定着した集団である可能性が高い。さらに、はじめから横穴式石室墓の構造と形態の定型性を備えており、完成度が高い形態であるなど、様々な理由に基づき、韓国では板橋型石室墓の築造集団の起源を内部ではなく外部に求めている。

以前から百濟漢城期横穴式石室墓の起源地候補の一つに比定されているのは、現在の平壤と黄海北道鳳山一帯で、平壤の楽浪土城と鳳山の智塔里土城は、それぞれ楽浪郡と帯方郡の郡治として知られている。この周辺には多種多様な形態の墓制が存在しており、その中には横穴式石室墓¹⁾も含まれている。楽浪古墳の変遷を段階に分けると、概ね2世紀後半から3世紀中頃までは埴室墓の復興期、3世紀中頃以降は埴室墓の衰退期と呼ばれる。衰退期の埴室墓の様相を見ると、規模は小さくなり、平面形態は方形から長方形へと変化する。胴張技法は四壁全体から両長壁のみ確認できる。羨道は両袖式から右袖式²⁾、天井は穹窿形から変形穹窿形への変化が見られる。上記の変化に応じ、単室墓は「埴+石魂築墓」と「横穴式石室墓」も同様の形態で築造され始める。このような石室墓の構造的変化は、後に出現する板橋型石室墓の構造と次第に類似し

1) 埴室墓との用語のバランスのため、以下第2章に限り、横穴式石室墓と石室墓という用語を使用する。

2) 本稿では被葬者を基準に入口を見る際の方向を基準とする。

てきている。構造的な完成度は低いが、この時期から板橋型石室墓が出現したのではないかと推測される。楽浪・帯方地域では板橋型石室墓と同じ形態の横穴式石室墓が確認されていないが、両郡が滅亡する4世紀初頭以前に造営された石室墓はすべてが単室である。完全な板橋型石室墓ではなく不完全な点（洪潜植2009）から具体的な時期は研究者によって異なるが、概ね楽浪・帯方郡の滅亡後から板橋型石室のような定型化された構造の石室が築造され始めたと思われる。

楽浪・帯方地域の横穴式石室墓を検討した結果、3世紀中頃以降または後半から板橋型石室墓のおおよその形態が確立したと考えられる。一方、楽浪・帯方地域における横穴式石室墓の初現については研究者間で異なる見解を示しているが、概ね3世紀中頃には確実に存在していたと考えられている。つまり、板橋型石室墓の出現以前に横穴式石室墓がこの地域に受容されていたため、系譜を理解するためには楽浪・帯方地域の横穴式石室墓の起源がどこであるのかについて検討する必要がある。

起源地を中国に比定することに疑問を示す研究者はいない。横穴系墓制は前漢中期に始まり、後漢代になると中国各地で造営される。既存の研究史によると、地域ごとに若干の時期差はあるものの、概ね後漢末期～魏晋の時期になると、磚と石を併用して築造する地域と磚室墓と石室墓が個別に併存する地域が中国各地で現れ始める。特に漢族と異民族との境界地域で主に確認され、遼寧地域を中心とした東北地域でも、後漢末期になると様々な遺跡で石室墓と磚室墓が併存し、魏晋時期になると石室墓が磚室墓より数的に優位を占めるようになる。その時期はおおよそ2世紀後半から3世紀半ばに当たる。

2世紀後半、中国の山東・遼東地域を支配し、3世紀初頭に楽浪郡への進出と帯方郡を新設した勢力は公孫氏であった。しかし、238年に魏が公孫氏勢力を滅ぼしたことにより公孫氏の支配地域をすべて支配するようになる。この時期は研究者によっては楽浪古墳の変遷段階から復興期に分類される時期である。また、前述のように、3世紀中頃から横穴式石室墓が本格的に楽浪郡地域に出現するという研究史があるが、公孫氏勢力に関する歴史的事実を総合的に判断すると、遼東地域の埴室墓と石室墓を築造した集団が楽浪郡と帯方郡に渡来してもたらしたものと推定できる。

以上の内容をまとめると次のようになる。中国各地では後漢末期～魏晋初期に石室墓が出現する。当時、遼東・山東・楽浪郡・帯方郡を支配していた公孫氏により、遼東地域の石室墓が楽浪郡と帯方郡に3世紀代に伝わった。3世紀後半になると、埴室墓の構造的変化とともに、石室墓の規模や構造が変化し、板橋型石室墓の構造と類似した形態へと変化する。4世紀初頭、楽浪・帯方郡の滅亡後からこの地域では多様な類型の石室墓が出現し、構造的にも完成度が高くなる。当時、高句麗に滅ぼされた楽浪・帯方郡の移民のうち、百濟漢城期の中央地域に定着した集団が板橋型石室墓を築造したと考えられる。板橋型石室墓の初現は、4世紀中葉または後半という見解が主流となっている。そして板橋型石室墓は構造的に完成した形態であったことから変化なく築造されている。一方、5世紀後半になると、畿内地域に板橋型石室墓と構造的に非常に類似した横穴式石室墓が築造され始める。これらは畿内型石室墓が出現する以前の初期横穴式石室墓と呼ばれる。

畿内地域の横穴式石室墓の起源と各地域（畿内地域 - 百済の漢城期中央地域 - 楽浪地域 - 遼東地域）の展開、伝播の過程を時期別に検討するのが第2章の研究目的である。そこで上記の各地域に所在する横穴式石室墓の構造および築造方法などを検討した後、各地域の横穴式石室墓との関連性と展開過程における構造の変化について説明を行うこととする。特に遼東地域と楽浪地域における石室墓の出現時期について筆者の見解を簡単に述べたい。最後に、畿内地域の初期横穴式石室墓の構造を分析した後、その出現と展開過程について段階別に時期区分を試み、時期別の様相についても簡単に検討する。

ここは既存の研究の批判や新しい見解を提示するための場ではなく、あくまでも畿内型石室墓が出現する直前までの全体の流れを把握することにその目的がある。畿内地域の初期の横穴式石室墓の起源に関する研究は、最近まで多くの研究者によって言及されてきた。しかし、日本に影響を与えた横穴式石室墓そのものの起源（九州系は本稿のテーマではないので、除外する。）や伝播経路についてまとめた研究は見当たらない。

2. 研究史

上述したように、最初に遼東地域で築造された石室墓は楽浪地域と百濟漢城期の中央地域を経て畿内地域にもたらされた。現在の遼東地域は他地域と比べると、発掘が活発化し資料の蓄積が始まったばかりで、研究も初歩的な段階であることから、言及できるほどの整理された見解はまだ確立されていない。そのため、ここでは遼東地域を除く楽浪地域、百濟漢城期中央地域、畿内地域に分けて研究史を整理した。

楽浪地域の古墳研究は木槨墓と埴室墓が主流である。この地域において石室墓が主墓制として造営されるのは楽浪・帯方郡が滅亡した後も存在するが、埴室墓を造営していた集団より下位の支配階層と認識されていたため関心が低かった。そのような中で、楽浪地域の石室墓に関する研究は埴室墓を扱う副次的に行われることが多く、発掘が行われても成果が報告書に忠実に反映されることはほとんどなかった。このような理由により、楽浪地域における石室墓研究は様々な面で埴室墓より不足している。それにもかかわらず、北朝鮮のリスンジン、日本の高久健二、韓国の洪漣植によって石室墓の出現、展開に関する研究が行われており、注目される（表1）。

表1 楽浪地域における横穴式石室墓の起源に関する研究（筆者作成）

研究者	発表年	論文名	内容
イ・スンジン	1990	「락랑구역일대의 고구려돌방무덤에 대하여」	1～3類型に分類した。1類型は長方形の羨道を持たない単室墓と平天井、2類型は長方形の片袖式羨道を持つ単室墓と平天井、3類型は羨道と玄室を備えた単室墓と平行三角持ち送り天井である。時期は1類型(2世紀前半)→2類型(2世紀後半)→3類型(3世紀前半～後半)の順に変化したものと理解した。そして埴天井埴室墓→石材天井埴室墓→横穴式石室墓という楽浪内部の独自変遷過程と理解された。
	1997	「평양일대의 락랑무덤에 대한 연구」	
高久健二	2009	「楽浪・帯方郡埴室墓の再検討-埴室墓の分類・編年および諸問題の考察」	<p>玄室の長幅比と羨道形態を基準に分類した。1形式は玄室の長幅が3:1に羨道がないもの、2形式は玄室の長幅が4:3～2:1に羨道がないもの、3形式は玄室の長幅が4:3～2:1に片袖式羨道、4形式は玄室の長幅が1:1～4:3に右片袖式羨道、5形式は玄室の長幅が1:1～4:3に両袖式羨道に分類した。年代については、埴室墓および副葬品との並行検討で、1形式(2形式より時期が少し早い程度)、2形式(2世紀末～3世紀前半)、3形式(3世紀中葉～4世紀中葉)、4形式(4世紀後半～5世紀初めまたは423年以前)</p> <p>横穴式石室墓は埴天井埴室墓と石材天井埴室墓および同時期に併存するため継承関係はなく、楽浪後期の横穴式石室墓は4世紀中葉以降に造営される大同江水系の横穴式石室墓とは継承関係がないと考えることから、当時の楽浪周辺の情勢と遼東地域からの外来的墓制の流入(穹窿式埴天井埴室墓)などを根拠に遼東地域から横穴式石室墓が流入したと推定した。</p>
洪潜植	2009	「전실묘에서 석실묘로의 이행-대동강·재령강 수계에 있어 중원문화의 동점과 쇠퇴-」	<p>墓室の数と羨道の位置を基準にⅠ～Ⅳ類に分類した。Ⅰ類は単室の両袖式羨道、床に砂利または扁平な石を敷いている。Ⅰ1(玄室長方形)Ⅰ2(玄室方形)に分かれる。さらにⅠ1は長方形の石室は羨道構造と壁面形態によってⅠ1A・Ⅰ1B・Ⅰ1Cに細分される。Ⅱ類は右片袖式羨道を持つ単室である。羨道構造と長さ・平面形態でⅡA・ⅡB・ⅡC・ⅡDに細分される。Ⅲ類は二室墓であり、壁龕の有無、前室の平面形態と規模によりⅢA・ⅢB・ⅢCに細分される。Ⅳ類は安岳3号墳の一期である。</p> <p>Ⅰ類、Ⅱ類は3世紀後半～末頃に造営が始まり、Ⅰ1類は4世紀末まで造営され、Ⅱ類は発展し続け、高句麗まで続く。(Ⅲ類とⅣ類は、楽浪・帯方郡の滅亡後の4世紀中葉から登場するのでここでは省略)</p> <p>3世紀前半から受け入れられていた遼東と山東地域の墓制や人々の影響により、徐々に石室墓に対する理解が高まる。ついに3世紀後半末まから横穴式石室墓が築造され始めたが、4世紀初めまで構造的な築造技術が低い理由として、横穴式石室墓の造営が始まったばかりであると考えられる。</p>

簡単にまとめると、リスンジンは横穴式石室墓が楽浪郡内部で出現し徐々に発展するという見解を示した。これに対し、高久健二と洪潜植は遼東地域の影響を受けて出現したとする見解を示した。ただし、高久健二は時間的断絶なしに横穴式石室墓が築造されたと理解しているのに対し、洪潜植は若干の断絶の後に築造が始まると理解している点に違いが見られる。横穴式石室墓の初現については、リスンジンは2世紀前半、高久健二は2世紀後半、洪潜植は3世紀後半～末と判断され、研究者間で大きな違いがある。

百濟漢城期の中央地域におけるいわゆる板橋型石室墓の起源に関する

研究は、韓国学界で多くの注目が集まっているテーマであり、研究が活発に行われている。さらに、近年漢城期の首都であった風納土城と夢村土城周辺、漢江流域の可楽洞・牛眠洞・広岩洞・甘一洞・板橋洞・陵谷洞で多数の横穴式石室墓の発掘調査が行われた。その結果、中央地域の貴族集団墓制として、板橋型石室墓の類型が主流であることが明らかになった。漢城期の横穴式石室墓には様々な類型が存在するだけに、起源の候補地も東晋、高句麗、楽浪郡、帯方郡など多様である。そのうち、板橋型石室墓は現在までの研究成果を見ると、楽浪・帯方地域の埴室墓と石

表2 百濟漢城期中央地域の横穴式石室墓の起源に関する研究（楽浪・帯方地域起源説中心）（筆者作成）

研究者	発表年	論文名	内容
小田富士雄	1980	「横穴式石室墳の導入と源流」	日本列島の初期の横穴式石室墓の起源は百濟の横穴式石室墓と関連しており、百濟の横穴式石室墓は楽浪と帯方の古墳に起源を持つべきであると考えられていた（冬利墓・南井里119号墳と可楽洞3号墳の構造的類似性の検討に基づく）。
曹永鉉	1990	「삼국시대 횡혈식석실분의 계보와 편년 연구」	百濟の横穴式石室墓を1～11類型に分類しているが、そのうち、鈴泉里古墳（鈴泉里古墳、可楽洞5號墳・22號墳）と南井里119号墳と関連があることを指摘している。
李南爽	1992	「백제 초기 횡혈식 석실분과 그 연원」	穹窿形天井の形式が一般化している楽浪の埴室混築墓からの起源を想定し、少なくとも4C後半には百濟に横穴式石室墓の構築方法が取り入れられていると考えられる。
成正鏞	2009	「중부지역에서 백제와 고구려 석실묘의 확산과 그 의미」	冬利墓・南井里119号墳と中部地域の石室墓から埴を模倣したような割石、壁体構築方法（埴積技法）、漆喰使用、穹窿形天井など、構造的類似性から見ると、系統的に繋がっていると考えられる。
金武重	2011	「百濟漢城期横穴式石室의 構造와 調査方法」	玄室の平面形態を基準に方形・長方形の石室は楽浪地域に存在し、楽浪地域の冬利墓・南井里119号墳と百濟漢城期の板橋洞・広岩洞古墳群の構造的類似性に基づき系統的に繋がっていると指摘した。
朴信映	2019	「백제 한성기 횡혈식석실묘의 도입과 확산과정」	冬利墓・南井里119号墳と板橋型石室墓を構造的類似性、時代的背景、出土遺物など、総合的に検討した結果、楽浪・大方地域の石室墓と板橋型石室墓は技術的に系譜関係が成立すると考えられる。

室墓の影響を受けたものと考えられる。そこでここでは板橋型石室墓の起源に関する研究成果を中心に紹介する（表2）。

楽浪・帯方地域を起源とする研究は、漢江流域において石室調査が行われてから見られるようになった。2000年代後半までは、主に佟利墓・南井里119号墳と可楽洞5号墳が比較されていたが、2000年半ばからは広岩洞と板橋洞古墳群の発掘調査を皮切りに、いわゆる板橋型石室墓の存在が明らかになった。2010年代半ばには河南甘一洞古墳群で50基を超える横穴式石室墓が発見され、漢城期横穴式石室墓のうち単一の類型が大多数を占めることから、編年、時代背景、築造方法、副葬品など様々な部分で研究が詳細に行われている。その結果、板橋型石室墓は既存の楽浪・帯方地域の埴室墓と石室墓の影響を受け、系譜的に繋がっているという見解が大勢を占めている。百濟漢城期の横穴式石室墓の出現時期については、概ね4世紀後半の見解が大半を占めているが、副葬品の編年から見て4世紀中葉と考えられる(ハンジソン2019)。

最後に畿内地域の初期横穴式石室墓の起源についても多くの研究者によって検討が行われた。特に研究成果が蓄積されるにつれ、韓半島という見解から百濟起源へと具体化されていった。伝播時期については熊津期と漢城期に分かれていたが、近年の漢江流域の発掘成果により漢城期の横穴式石室墓との類似性を指摘する見解が優勢である(表3)。

日本学界と韓国学界に分けてみると、前者では初期横穴式石室墳の起源に関して、以前は百濟との関連性に関心が集まっていたが、最近では百濟の影響と在地の伝統的様相を対等に認識しようとする傾向がある。後者では概ね初期横穴式石室墳の構造を把握し、百濟の横穴式石室墳のうち、類似する古墳と結びつける比較研究や被葬者像に関心を持って研究が進められた。最近では、畿内地域における横穴式石室墓の型式分類

を行い、漢城期の中央地域と畿内地域における横穴式石室墓との比較研究により、伝播の時期と地域を明らかにしたのもみられる。

表3 畿内地域横穴式石室墓の起源に関する研究

研究者	年度	論文名	内容
白石太一郎	1965	「日本における横穴式石室の系譜-横穴式石室の受容に関する考察」	九州地域と畿内地域における横穴式石室墓の系譜が異なることを初めて指摘した(九州地域:韓半島、畿内地域:南朝)。
	1995	「古代史のなかの藤ノ木古墳」	既存の見解では、畿内地域の横穴式石室墓の出現は、百済漢城期横穴式石室墓の影響により修正された。
森下浩行	1986	「日本における横穴式石室の出現とその系譜-畿内型と九州型」	畿内型石室墓は百済の影響を受けたと前提した後、玄室の平面と天井の形態を基準にA類(長方形、平天井)とB類(正方形、穹窿形天井)に細分した。そのうち、高井田山古墳はB類に分類し、漢城期から熊津期へと続く流れで築造されたものと理解している。
土生田純之	1994	「畿内型石室の成立と伝播」	初期の横穴式石室墓には渡来人(百済)が関連していると考えられ、畿内型石室墓の登場には渡来人以外にも在地勢力の影響力が重要であったと想定した。
太田宏明	1999	「畿内型石室の属性分析による社会組織の検討」	近畿地方の横穴式石室墓を導入期・発展期・終末期に分類した。導入期の石室は1~5群に細分したが、百済と類似したものと1群を想定した。
吉井秀夫	2008	「墓制からみた百済と倭」	近畿地方の初期横穴式石室墓と百済横穴式石室墓の木棺構造を比較検討した。両者は非常に類似しているが、初めから相違点も確認されており、近畿地方の初期横穴式石室墓には百済の影響が大きいが、在地勢力の影響は無視できないと考えた。
安村俊史	2008	「高井田山古墳の意義」	高井田山古墳は百済からの直接影響により成立した古墳と把握したが、初期の横穴式石室墓の右片袖式羨道、木棺、石室内土器埋納、ミニチュア炊事具などを根拠に提示した。
森本徹	2012	「儀礼からみた畿内横穴式石室の特質」	儀礼に注目し、副葬品の様相、木棺配置、石室内土器の埋納、石室構造など、儀礼の様相から高井田山古墳は百済漢城期の渡来人出身の可能性を指摘している。しかし、在地勢力の再構成による変化も感知されており、主体はあくまで大和政権を強調している。
洪漣植	1993	「백제 횡혈식석실묘의 형식분류와 대외 전파에 관한 연구」,	武寧王陵と高井田山古墳の副葬品(複斗)の類似性を根拠に熊津期に設定して武寧王陵以降に長方形化される松山里Ⅲ型が高井田山古墳と関連すると考えている。
朴天秀	2007	『새로 쓰는 고대 한일교섭사』	高井田山古墳と櫻井宮山古墳は百済の横穴式石室墓の影響を受けていると考えられている。そのうち、高井田山古墳の被葬者は、古墳の規模、韓半島系副葬品、周辺の渡来系生活遺跡などを根拠に渡来人集団を統率した百済王族級の人物と推定した調査者(安村俊史)意見に同意した。
	2012	『일본 속 고대 한국문화-近畿地方』	
金洛中	2012	「한반도 남부와 일본 열도에서 횡혈식석실묘의 수용 양상과 배경」	初期横穴式石室墓は百済の横穴式石室墓の影響を受け、年代は漢城期から熊津期に該当すると考えられていた。古墳の規模が小さいため、百済との交流を担当した畿内の首長系列や渡来人で被葬者を想定した。
金奎運	2016	「일본 기나이지역 초기 횡혈식석실묘의 출현과 도래인 문제」	畿内地域の初期横穴式石室墓の形態、規格、埋葬方式、遺物構成、周辺遺跡との関係を根拠に1~2類型に分類し、1類型石室墓のほぼすべての要素が百済と同一であるため直接伝播され、被葬者を渡来人と想定した。両者の分布位置がそれぞれ中央地域で主に確認されるため、中央間の交流関係の中から登場したものと考えられ、甘一洞古墳群の横穴式石室墓の被葬者像と関連があると想定した。
	2019	「일본 열도 횡혈식석실묘의 도입 과정」	

第2節：各地域の横穴式石室墓の様相（遼東地域－楽浪地域－百済漢城期中央地域－畿内地域）

韓国において畿内地域初期横穴式石室墓の出現と百済漢城期の中央地域（漢江流域）に分布する板橋型石室墓との関連性を否定する研究者はほとんどいない。これは板橋型石室墓の立地、規模、石室位置、平面形態、石室構造、副葬品の構成などが現在まで言及されてきた百済の他地域の横穴式石室墓より類似性が高いためである。

一方、畿内と漢城期中央地域の例のように、板橋型石室墓と類似した構造の横穴式石室墓は周辺では検出されていないため、板橋型石室墓への伝播経路については異見も存在する。しかし、東アジアの情勢、楽浪・帯方地域の墓制の変遷の様相、周辺地域（高句麗、東晋）との石室構造比較などにより、楽浪・帯方地域の石室墓と板橋型石室墓が最も類似しており、ほとんどの研究者が楽浪・帯方地域説を支持している。

楽浪・帯方地域における横穴式石室墓の初現については、前述のように研究者によって年代差が大きく、石室墓の出現に影響を及ぼした埴室墓の墓制の変遷にも異見が存在する。ただし、各研究を検討してみると、少なくとも遼東地域の横穴式石室墓の影響を受けたことは確かである。したがって、ここでは各地域の横穴式石室墓について構造を中心に説明する。

1. 遼東地域

遼東地域において横穴式石室墓が出現する時期は、後漢後半～魏晋であると考えられている。この時期の瓦房店市馬圈子漢魏晋墓地・遼寧鞍

山市調軍台墓地・羊草庄漢墓などの様々な古墳群で埴室墓・埴石混縮墓・石室墓をはじめ、土壙墓と石槨墓も共存が確認されており、石室墓も多様な構造が発見されている。洪濬植によると、3～4世紀代の楽浪・帯方地域における横穴式石室墓では壁体に胴張技法が確認されていないが、遼東地域では壁体が弧状をなす胴張技法が確認されるという点が注目を集めている。ここでは、最近発掘され、正式報告書が刊行された羊草庄漢墓で調査された石室墓を対象として検討を行う。

鞍山市立山区沙河鎮羊草庄村から北西に約500m離れたところに羊草庄墓地が位置する。南側約2kmには沙河、北側は循環道路に接している。古墳群はもともと農業用地であったため現在は平坦な地形である。古墳群は長方形を有しており、長さ200m、幅120mである。全78基のうち、埴室墓20基、埴槨墓7基、石室墓5基、石槨墓14基、土壙墓30基、甕棺墓2基により構成されている。古墳群の全体的な年代と石室墓の出現時期に関する調査者の見解は異論の余地があり、今後の再検討が求められるが³⁾、石室墓の構造を把握するには大きな問題はないと考えられる。

3) 調査者は羊草庄漢墓の石室墓の登場を後漢前期(1C中葉)に設定している。一方、従来の研究では地域ごとに異なるものの、遼東地域の石室墓の登場は概ね後漢中期(2C前期～中葉)と見ており、今後細密な再検討が必要である。

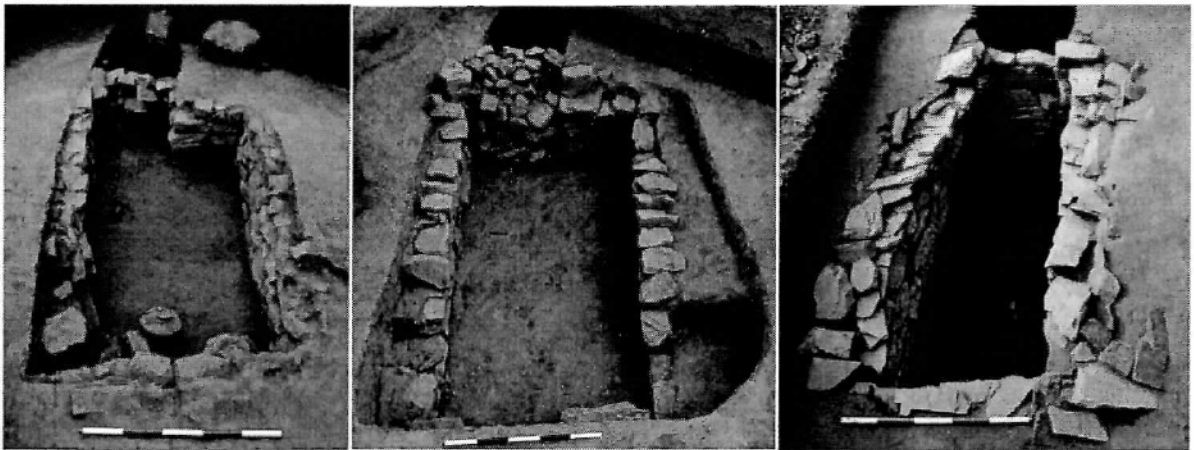


図1 遼東地域の横穴式石室墓（左から羊草庄漢墓M10号・M18号・M61号）

（『羊草庄漢墓』（上・下）2015から引用）

M10号：単室の横穴式石室墓であり、平面形態は長方形、右片袖式羨道を持ち、石材は加工された簡単な割石が用いられている。墓道は傾斜がついているが、長さ不明、幅80cmである。羨道は4段が残っており、残存高が50cm、長さと同幅が80cmである。墓門と閉塞石が残存する。玄室は長さ270cm、幅140～160cm、残存高60cmであり、5段まで残存する。四壁は埴積技法により積み上げられ、石材の隙間は黄土で埋められている。床は土で固めている。

M18号：単室の横穴式石室墓であり、平面形態は長方形、羨道は備わっていないが、前壁の右側に偏って入口が存在する。石材は粗雑に加工された割石を利用している。墓道は傾斜であり、長さは不明、幅84cmである。墓門は現存しており、高さ84cmである。閉塞石は5段で84cm残っている。玄室は長さ316cm、幅168cm、壁は6段まで残存する。四壁は埴積技法により積み上げられており、床は土で固めている。

M61号：単室の横穴式石室墓であり、平面形態は長方形、短い右片袖式羨道を持っている。石材は加工された割石を利用している。墓道は傾斜

があり、長さは不明、幅84cmである。墓の幅は103cm、10段が残存するが、2段（40cm）上に入口がある。閉塞石の残存高は128cmである。玄室は長さ300cm、幅114～128cm、四壁は埴積技法により積み上げられ、四壁と天井の石材の隙間は漆喰で埋められている。天井付近には少量の埴が使われている。床には副葬品を置く台が2ヶ所設置されている。床が敷かれている。

2. 楽浪・帯方地域

大同江が流れる平壤地域を中心に黄海道と平安南道にわたって分布し、築造時期は漢～西晋の時期である。主な古墳群の分布地域は、大同江南岸から約2.5km離れたところにある五峰山一帯を包括し、現在は楽浪区域と呼ばれている。長期間にわたり様々な墓制が共存しているが、遼東地域の石室墓と漢城期の板橋型石室墓の間を系譜的につなぐ横穴式石室墓としては、楽浪洞19・24・25・30・31・34・51・53・54号墳、南井里119号墳などを挙げることができ、このうち比較的詳しい説明がある楽浪洞19号墳、南井里119号墳について検討していく。

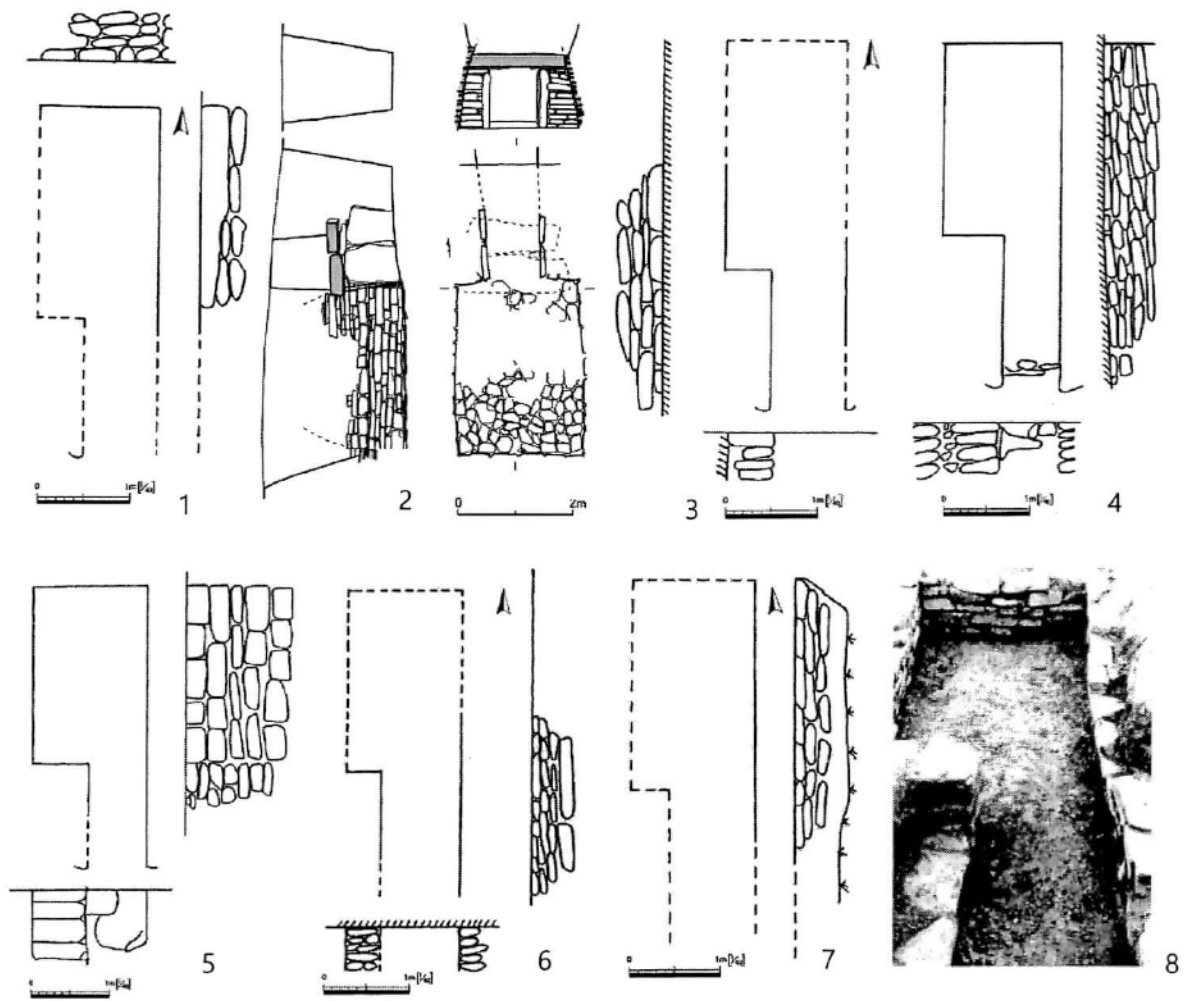


図2 楽浪・帯方地域の横穴式石室墓(1: 楽浪洞19号墳、2: 南井里119号墳、3: 楽浪洞24号墳、4: 楽浪洞31号墳、5: 楽浪洞34号墳、6: 楽浪洞51号墳、7: 楽浪洞53号墳、8: 楽浪洞54号墳)*縮尺不同

(1・3・4・5・6・7: 『高句麗の古墳文化 I - 韓半島 -』2013、2・8: 「楽浪・帯方郡埧室墓の再検討-埧室墓の分類・編年・および諸問題の考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第151集2009から引用)

楽浪洞19号墳: 玄室と右片袖式羨道からなる長方形の単室墓である。

石材は加工された板状の粘板岩割石(30~50cm×25cm)で、石材の隙間は漆喰で埋められている。羨道は長さ150cm、幅80cm、残存高50cm、玄室は長さ230cm、幅130cm、残存高50cmである。天井は平天井で、床は土で固めている。

南井里119号墳: 玄室と両袖式羨道により構成された長方形の単室墓である。石材は加工された板状の片麻岩の割石であり、石材の隙間と面は

漆喰で埋められている。盗掘によって玄室の天井部は破壊されていた。玄室は長さ290cm、幅220cm、残存高120～130cm、両壁は胴張技法で築造されている。天井は破壊されているが、四壁が直角に上がって一定の高さから徐々に内傾していることから穹窿形の天井と推定される。四壁は埴積技法に積み上げた。玄室の床面全面には大きさが不規則な板状の割石を敷いてある。羨道は長さ120cmで、両壁は2枚ずつの大型板石でできしており、隙間は小石で埋め尽くされている。羨道の入口には左右と床面に板石で門枠施設を設け、閉塞石は壁石と同じ板状の割石で塞いでいる。

3. 百濟漢城期中央地域

板橋型石室墓は漢城期の他類型の石室より圧倒的多数を占めており、百濟漢城期の中心地である漢江流域一帯を中心に河川と隣接した丘陵の頂上と斜面部に分布している。都城である風納土城と夢村土城を中心とする中央地域に集中して分布し、他類型の石室とは共存しない特徴を持つ。王陵群である石村洞・可楽洞古墳群における横穴式石室墓とは構造的な違いがあることから中央貴族の墓制と判断される。広岩洞古墳群（2基）、板橋洞古墳群（9基）、甘一洞古墳群（52基）、金岩山古墳群（5基）などが板橋型石室墓に該当する。板橋型石室墓の構造を見ると、玄室の平面形態は長方形、羨道は右片袖式、天井は変形穹窿形を呈する。両壁は胴張技法が確認されており、四壁の角は埴積技法で積み上げられている。壁石に漆喰が使われる例もある。本稿では、現在発掘報告書が発刊されている板橋洞古墳群を中心に検討する。

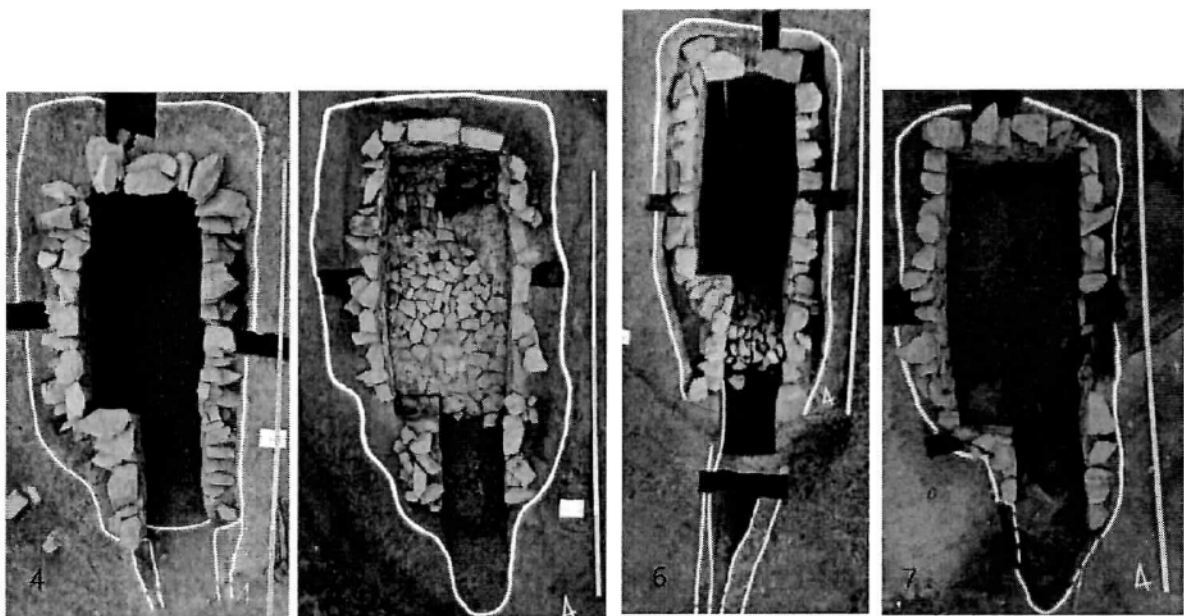
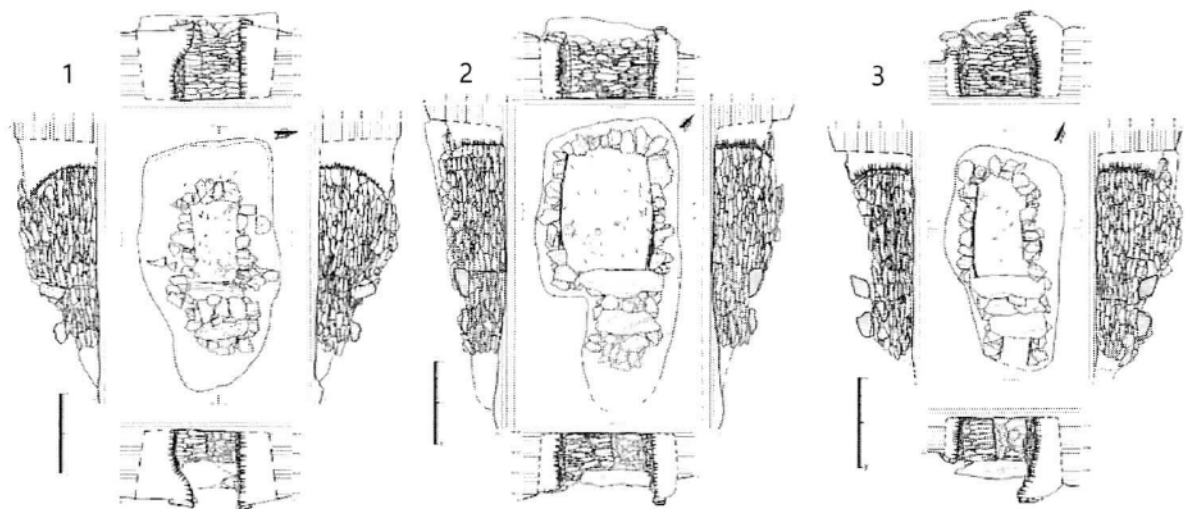


図3 百済漢城期の板橋型石室墓 (1: 板橋洞5号墳、2: 板橋洞7号墳、3: 板橋洞8号墳、4: 甘一洞1-3の17号墳、5: 甘一洞1-3の27号墳、6: 甘一洞2-5の4号墳、7: 甘一洞2-5の9号墳)*縮尺不同

(1~3: 『城南板橋洞遺跡Ⅱ』-13・16~18区域-2012、4~7: 『河南甘一公共住宅地区内の文化財発掘(試掘)調査略式報告書』2018 から引用)

板橋洞6号墳: 玄室と右片袖式羨道による地下式の単室墓である。墓壙の規模は長さ630cm、幅368cm、残存高212cmである。玄室平面は長方形(1.78:1)で、長さ304cm、幅170cm、残存高198cmである。石材は板状の割石を使用し、隙間は小さな割石で補強している。両壁は胴張技法で築

造されており、壁の下段は縦に積み上げられ、上に上がるほど横に積み上げられる比率が高い。天井は破壊されていたが、四壁が直角に上がって90cmの高さから徐々に内傾し、斜面石が使われていることから変形穹窿形の天井と推定される。四壁は塼積技法で積み上げられている。羨道は長さ192cm、幅78cm、高さ82cmである。羨道に板状の閉塞石が確認できる。床に棺台や排水施設はなく、土を固めている。2人の埋葬が確認されており、追葬が行われたことが分かる。

板橋洞7号墳：玄室と右片袖式羨道による地下式の単室墓である。墓壙の規模は長さ700cm、幅368cm、残存高192cmである。玄室平面は長方形(1.41:1)で、長さ304cm、幅219cm、残存高172cmである。石材は板状の割石を使用し、隙間は小さな割石を補強している。両壁は胴張技法で築造されており、壁の下段は縦に積み上げられ、上に上がるほど横に積み上げられる比率が高い。天井は破壊されているが、四壁が直角に上がって100cmの高さから徐々に内傾し、斜面石が使われていることから、変形穹窿形の天井と推定される。四壁は塼積技法で積み上げられている。羨道は残存長さ250cm、幅80cm、高さ85cmである。羨道に板状の閉塞石が確認できる。床に棺台や排水施設はなく、土を固めている。2人の埋葬が確認されており、追葬が行われたことが分かる。

板橋洞8号墳：玄室と右片袖式羨道による地下式の単室墓である。墓壙の規模は長さ580cm、幅300cm、残存高190cmである。玄室平面は長方形(1.52:1)で、長さ304cm、幅219cm、残存高172cmである。石材は板状の割石を使用し、隙間は小さな割石を補強している。両壁は胴張技法で築造されており、壁の下段は縦に積み上げられ、上に上がるほど横に積み

上げられる比率が高い。天井は破壊されているが、四壁が直角に上がって100cmの高さから徐々に内傾し、斜面石が使われていることから、変形穹窿形の天井と推定される。四壁は埴積技法で積み上げられている。羨道は残存長200cm、幅80cm、高さ90cmである。羨道に板状の閉塞石が確認できる。床には棺台や排水施設はなく、土を固めている。2人の埋葬が確認されており、追葬が行われたことが分かる。

4. 畿内地域

6世紀を前後に、畿内地域には畿内型横穴式石室墓が出現する。土生田純之は、畿内型横穴式石室墓の特徴を以下のとおり定義している。

- ① 玄室平面は長方形、天井は平天井で前壁が存在する。
- ② 玄門部には立柱石の使用が少なく、立柱石を立てても壁体の中央に含まれて突出しない。
- ③ 玄門部に門扉石はなく、羨道は両袖式あるいは片袖式が確認できる。無袖式は原則として見られない（7世紀に退化型式として出現）。
- ④ 羨道の閉塞施設は怪石で閉鎖し、終末期になると板石を利用して閉鎖することもある。
- ⑤ 初現期の石室の羨道は実通路として機能する幅を備えている。
- ⑥ 石材は大型化の傾向が強いが、壁体の最下部には他のものに比べて特に巨大な石を使用する要石のような手法は用いない。
- ⑦ 玄室壁の角は天井までしっかり保てる。

このような構造的特徴が現れる以前の5世紀中葉～5世紀末または6世紀初頭まで築造された横穴式石室墓を初期横穴式石室墓と呼ぶ。畿内型

横穴式石室墓は、初期横穴式石室墓の影響を受けて在地化されたことと、初期横穴式石室墓の築造集団と被葬者は渡来人または渡来人と関連の深い在地の人物であるということは周知の事実である。

初期横穴式石室墓は畿内型横穴式石室墓であり、変化する前の転換期に当たる石室墓といえることから、畿内横穴式石室墓の研究のためには、初期横穴式石室墓の導入と展開過程の様相、および変化を理解する必要がある。したがって、ここでは分析が可能な初期横穴式石室墓の構造を中心に検討する。

藤ノ森古墳：古市古墳群の誉田御廟山古墳（推定応神天皇陵）の西側に隣接して築造されたが、数回の移築を経て現在は、藤井寺市立生涯学習センターに保存されている。墳丘は円墳で直径約22m、高さ3mであり、現在は石室のみが残存している。玄室と羨道を持つ長方形（2.33:1）の単室墓であり、玄室は長さ約350cm、幅約150cm、残存高約150cmである。四壁は直角に上がり、高さ110cmから持ち送り式に積み上げ天井を形成している。両壁には赤色顔料が塗られている。羨道は長さ約100cm、幅80～90cm、高さ約110cmの右片袖式羨道である。床には特別な施設はなかったと思われるが、木棺1基が安置されたものと推定される。年代は5世紀中葉とされる。

高井田山古墳：生駒山地の南端の尾根、大和川が見える小さな丘陵に位置する。墳丘は円墳で直径約22mである。墓壙の規模は長さ500cm、幅350cm、残存高110cmである。玄室と羨道を持つ長方形（約1.6:1）の単室墓である。玄室は長さ373cm、幅226～234cm、残存高130cmである。四壁は板状の石材を直角に積み上げられ、高さ約100cmから若干内傾するこ

とが確認されていることから、高さ約200cmの穹窿形天井を呈するものと推定される。四壁は埴積技法で積み上げられている。羨道は長さ約200cm、幅118cm、高さ約110cmの右片袖式羨道である。閉塞石は現存し、床には石が敷かれていた。木棺は2基が安置されており、夫婦合葬墓と推定され、男性が左側に、女性が右側に埋葬されていた。年代は5世紀後葉と推定される。

一須賀古墳群(I支群12・14・15・16・19・20・21号墳):葛城山西側の丘陵に約280基の古墳が分布し、そのうち約70基が発掘調査された。各支群のうち、I支群が初期横穴式石室墓と関連し、I-1～23号墳のうち、I-12・14・15・16・19・20・21号墳の年代は6世紀前葉以前とされる(MT15は除く)。墳形は直径10m前後の円墳であり、周溝をもつものもある。石室墓の大部分は大きく破壊されており、下段部の数段だけが残存している。特に床面には特別な施設は確認されていない。右片袖式羨道を持ち、羨道は塊石で閉鎖されている。古墳ごとに1基(12・14・15・16・21号墳)または2基(19・20号墳)の木棺が埋葬されている。各古墳の規模を示すと以下のとおりである。①I-12:玄室の長さ310cm、幅160cm、羨道の長さ150cm、幅90cm、②I-14:玄室の長さ300cm、幅170cm、羨道の長さ180cm、幅80cm、③I-15:玄室の残存長さ220cm、幅160cm、羨道の長さ150cm、幅80cm、④I-16:玄室の長さ340cm、幅170cm、羨道の長さ140cm、幅80cm、⑤I-19:玄室の長さ310cm、幅170cm、羨道の長さ160cm、幅80cm、⑥I-20:玄室の長さ340cm、幅170cm、羨道の長さ180cm、幅100cm、⑦I-21:玄室の長さ320cm、幅160cm、羨道の長さ120cm、幅80cm。

桜井公園2号墳:安倍山丘陵の北端部に位置し、周辺には20～30基の円

墳があったが、調査当時は4基の古墳が残存していた。墳丘がすでに削平されて規模や形態は不明であり、扁平な自然石で積み上げられた横穴式石室墓の下段部が残存しているのみで、天井の構造は分からない。長方形(1.50:1)の玄室規模は、長さ291cm、幅186～196cm、右片袖式羨道は長さ144cm、幅89cmであり、塊石を用いて閉鎖されている。木棺は1基が安置されたものと推定される。年代は5世紀後葉とされる。

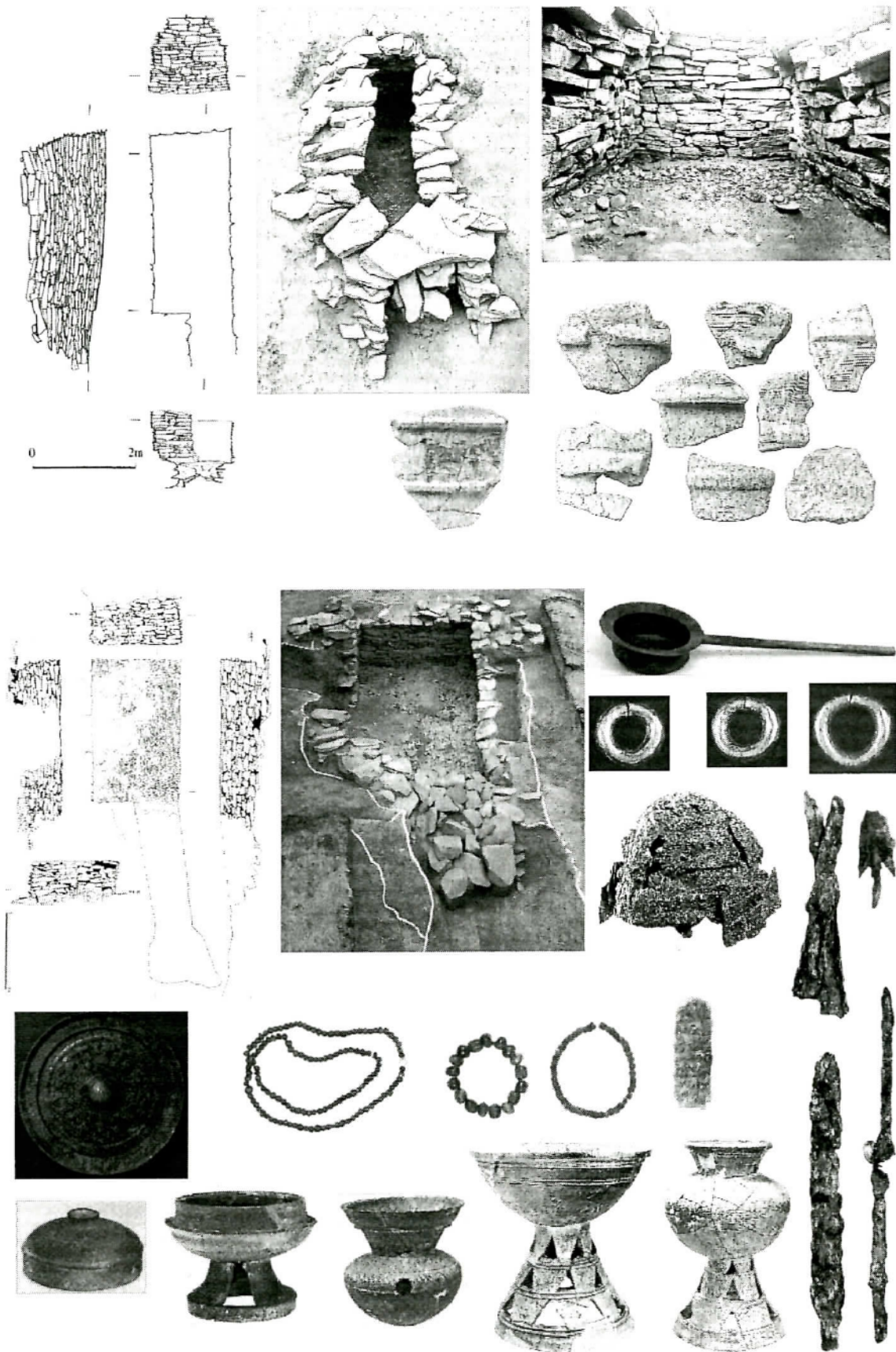
長原七ノ坪古墳：渡来系遺跡として知られる長原遺跡に長原古墳群が立地し、約200基の古墳の中で唯一確認された横穴式石室墓である。墳形は帆立貝形古墳であり、規模は全長23.5m、前方部17.5m、後円部7.5m、周濠幅約7mである。墳丘はほとんど削平されており、石室も後円部から石室の下段部が若干残存する程度である。長方形(1.41:1)の玄室と羨道によって構成された単室墓である。天井の構造は不明であるが、石室の規模は全長525cm以上、玄室は長さ348～357cm、幅246～250cmである。木棺は1基が報告されている。年代は5世紀末～6C初とされる。

寺口忍海D27号墳：葛城山麓に約170基の古墳群が存在するが、D27号墳は直径16.6mの円墳である。長方形(2:1)の玄室に右片袖式羨道を備えた単室墓であり、玄室は長さ340cm、幅170cm、高さ約200cm、羨道は長さ200m、幅75cm、高さ約100cmである。木棺は2基が安置されていた。年代は5世紀末～6世紀初とされる。

新沢千塚221号墳：畝傍山の南側丘陵に直径10～15m規模の円墳約600基が分布する。221号墳は直径13m、高さ約3.3mの円墳であり、長方形(2.31:1)の玄室に右片袖式羨道を備えた単室墓である。玄室は、長さ300cm、幅130cm、羨道は長さ140cm、幅70cmであるが、羨道の床面が玄

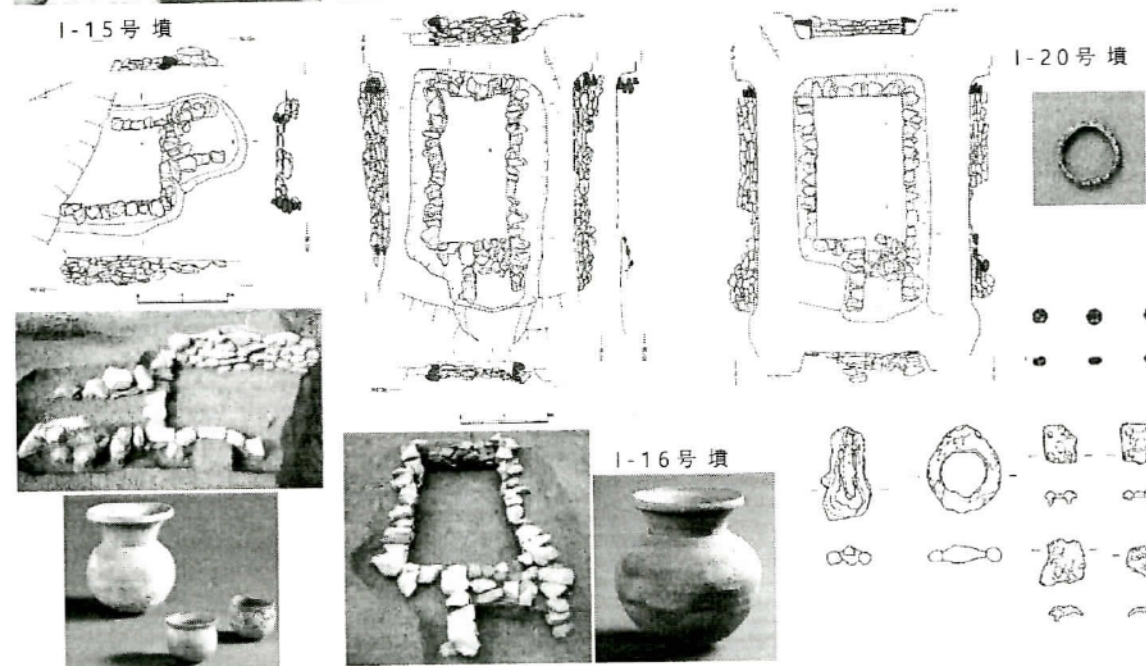
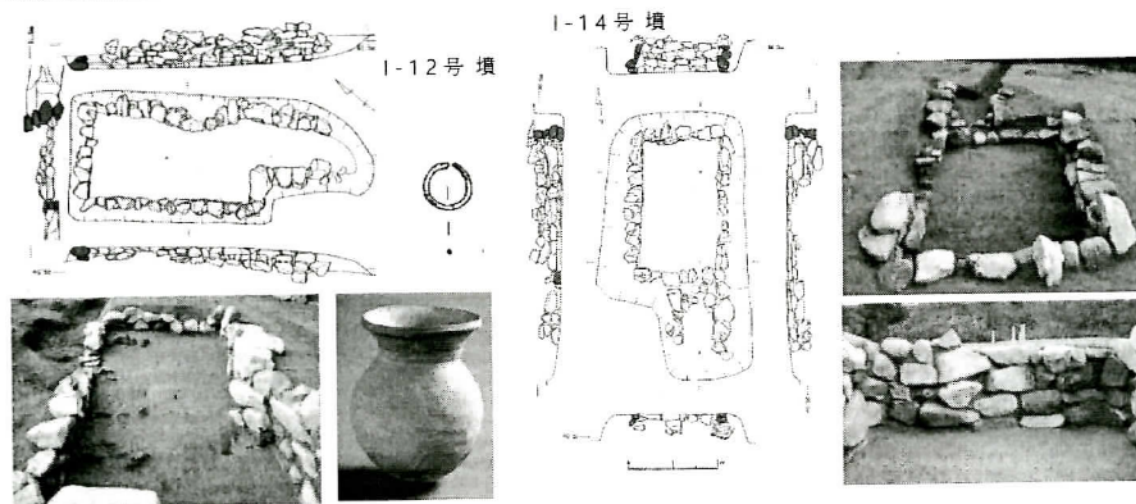
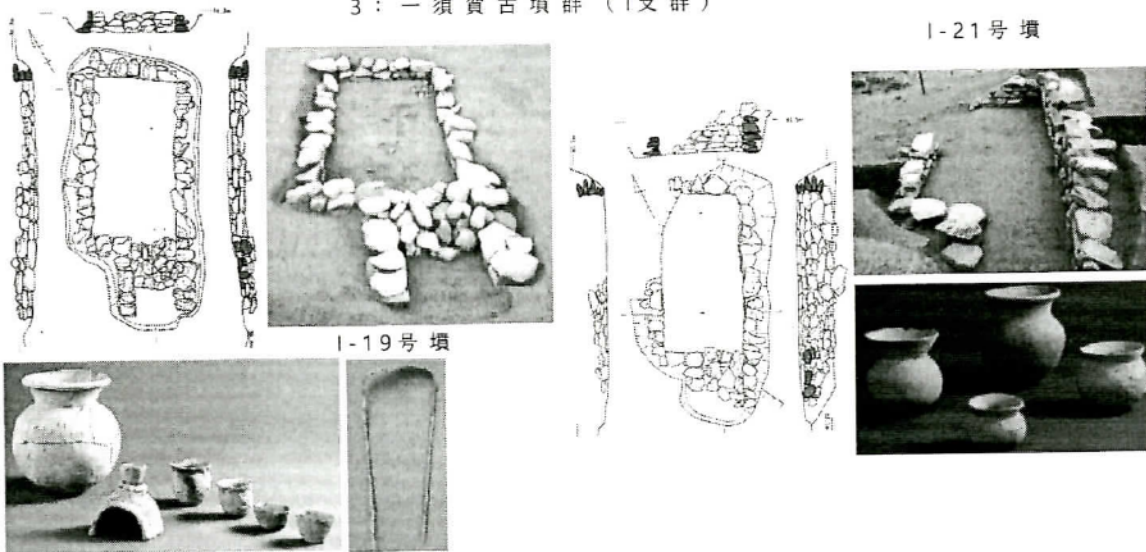
室より約15cm高い。石室の上部は破壊されて天井の構造は分からない。石室下段部は5～6段程度が残存し、厚さ20cm前後の石で壁を積み上げ、四壁は埴積技法に積み上げている。年代は5世紀後半頃とされる。

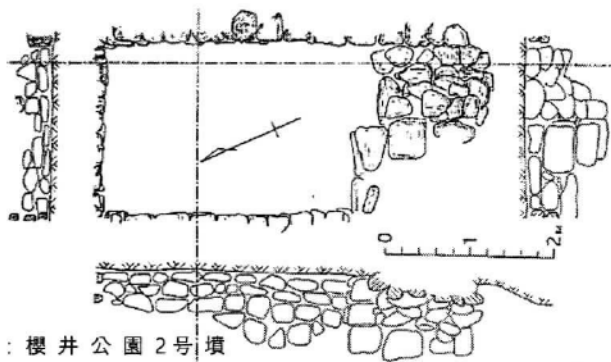
椿井宮山塚古墳： 竜田川東岸、椿井の丘陵の斜面に直径約20mの円墳がある。長方形（1.45:1）の玄室と右片袖式羨道を備えた単室墓で、羨道の一部が破壊されていることを除けば、初期横穴式石室墓の中で唯一穹窿形天井が完全に残存している。玄室は長さ421cm、幅290～292cm、高さ314cm、羨道は残存長77cm、幅102cm、高さは土に覆われているため、67cmと計測される。四壁は板状の自然石と割石を直角に積み上げ、角は埴積技法で積み上げている。高さ約100cmから壁を内傾に積み上げられ、斜面石を用いて穹窿形の天井を形成している。壁石の内傾度によって3等分に分けられ、最初は垂直に積み上げ、次に内傾させて積み上げ、最後は斜面石を利用して急角度で天井を形成している。玄室に赤色顔料が塗られており、奥壁（2ヶ所）と左壁（1ヶ所）に龕室と見られる空間が設けられている。玄室の中には閉塞石（割石）の一部が掃き込まれて残存する。年代は5世紀後半～末と推定される。



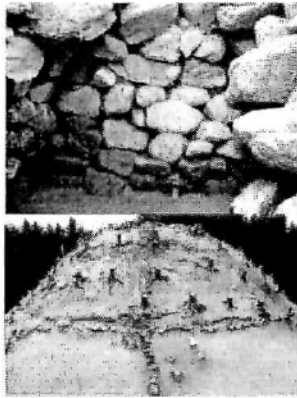
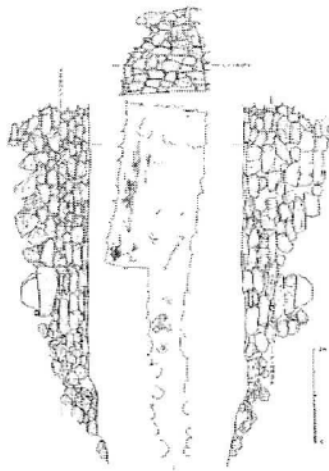
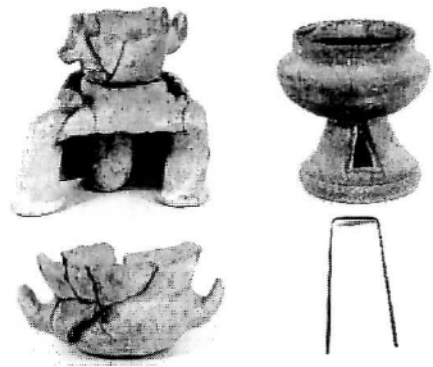
1: 藤ノ森古墳(上)、2: 高井田山古墳(下)

3: 一須賀古墳群 (I支群)





4：櫻井公園2号墳



6：新沢千塚221号

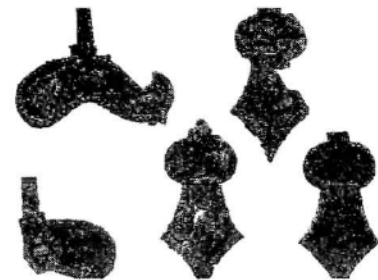
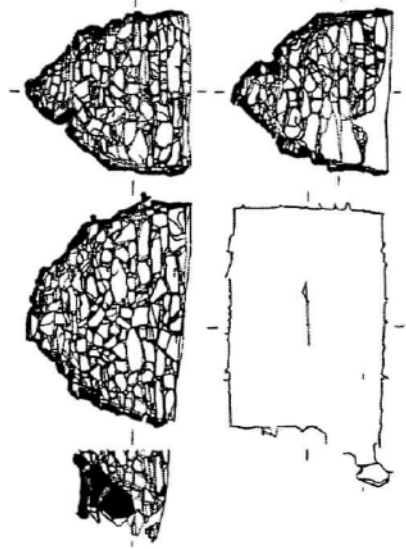
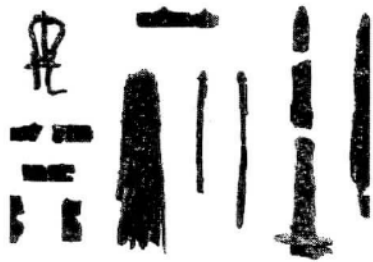
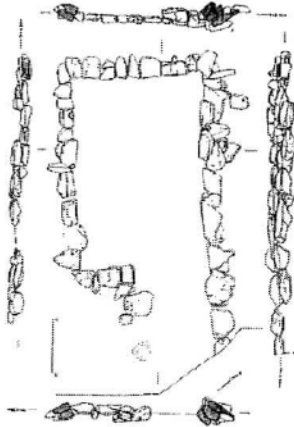
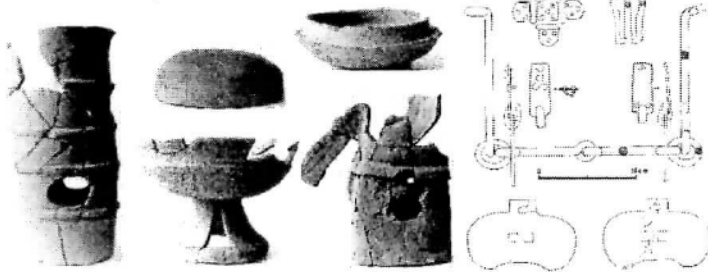
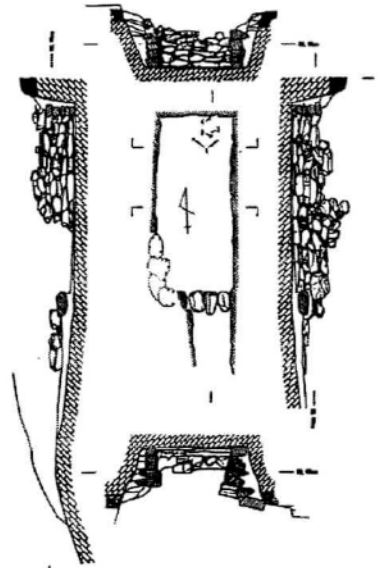


図4 畿内地域の初期横穴式石室墓[1: 藤の森古墳、2: 高井田山古墳、3: 一須賀古墳群(①～⑦I支群12・14・15・16・19・20・21号墳)、4: 長原七ノ坪古墳、5: 櫻井公園2号墳、6: 寺口忍海D27号墳、7: 新沢千塚221号墳、8: 椿井宮山塚古墳]

(4: 『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄録』11 1959、7: 『昭和60年度大阪市内埋葬文化材包蔵地発掘調査報告書』1987、5: 『寺口忍海古墳群』1988、1: 『はざみ山遺跡発掘調査概要－藤ノ森古墳の調査』1993、3: 『一須賀古墳群I支群発掘調査概要』1993、8: 「平群古墳群再論(上)」『古代文化』第45巻第10号1993、2: 『高井田山古墳をめぐって』1996、『高井田山古墳』1996から引用)

第3節：各地域横穴式石室墓の出現、展開、伝播問題の検討

遼東地域で横穴式石室墓が出現し、楽浪・帯方地域を経て漢城期百済の中央であった漢江流域へと伝わった。そして中央地域間の交流により、倭の中央であった畿内地域まで伝播した。各地域は、国家、環境、政治勢力、民族など多くの部分で相違点が明確なため、いくら外形が類似しているとしても、相違点が明らかに存在する。したがって、ここでは地域ごとに出現、展開、伝播の過程で、これまで異論が合致しなかった部分を中心に見解を提示する。

1. 遼東地域

中国の様々な地域で横穴式石室墓は存在するが、遼東地域で出現した横穴式石室墓が韓国と日本の横穴式石室墓の起源になるという点と、出現時期と関連した異見があるという点は前述したとおりである。出現時期について異見が生じる理由として、最近、遼東地域で本格的に開発が始まり、新たに発見された遺跡が増加したのに対し、それを受容できるほどの研究が行われていなかったことと関連がある。したがって、遼東地域では何よりもまず、出現に関する見解と根拠を検討し、筆者の見解を提示することが先決である。ここでは出現時期について、それぞれの立場と根拠を重点的に検討していくこととする。

横穴式墓制は中国中原の文化を象徴する要素の一つである。特に磚を使った磚室墓は、前漢代から明代に至るまで造営が続けられた代表的な墓制であるといえる。ところが、前漢代の構築材料は磚が使用されているのに対し、後漢代は中国各地で石材が新たな構築材料として登場して

いる。横穴式墓制に埴と石を併用する地域は貴州、雲南、廣西、河南（南部）、江蘇（北部）、山東（西部）、遼寧などで、当時の漢族と異民族の境界地域を中心に現れるという共通点を示す。そのため、江介也（2005）は埴室墓を造営する文化が漢族文化を象徴するものにとらえた。洪濬植（2008）は新しい構築材料である石が出現することは、当該地域での漢族文化と異民族文化の融合、または影響力が弱まるものと理解し、異民族の活動が活発であった結果であると判断した。これまでの研究ではこのような見解を基に、遼寧一帯では鮮卑族の影響力が2世紀中頃から顕著になるため、遼東地域の横穴式石室墓の出現時期を後漢時代の2世紀中頃と見ている⁴⁾。

一方、近年、遼東地域における発掘調査の増加により、遺跡間の比較が行われ、横穴式石室墓の開始年代が徐々に引き上げられる傾向が中国の発掘報告書で確認される。本稿の検討対象である羊草庄漢墓でも石室墓の出現を後漢初期としているが、後漢初期は1世紀半ば～後半に当たるため、従来の見解とは1世紀以上の大きな差異が見られる。これは新しい資料が多く発見され、そのなかに早い年代の石室が含まれている可能性もある。現在、遼東地域における漢代古墳の編年基準とする遺跡は姜屯漢墓（姜屯漢墓2013）である。

姜屯漢墓は大連市普蘭店市に所在し、計212基の古墳が確認され、そのうち154基が発掘調査された。竪穴系は土壙墓と石壙墓、横穴系は埴

4) 後漢の時期区分は、後漢初期（25～88年）、後漢中期（89～159年）、後漢晩期：（160～220年）に区分する。後漢晩期は細分して184～220年までを後漢末と見ることもある。

室墓に分けられる。古墳が造営された時期は、前漢前期から後漢後期であり、副葬品のうち五銖錢と貨泉を主軸に、後漢代古墳編年を中心に推定されている。また、共伴する土器の型式分類により古墳群全体の編年を試みられている。

羊草庄漢墓も姜屯漢墓の編年案を参照し、古墳群を編年しているが、これにはいくつかの問題がある。姜屯漢墓では石室墓が確認されていない。また、同じ遼東地域には位置しているが、二つの遺跡は遼東の北部と南部に位置しているため地理的に遠く離れている。埴室墓は漢族文化の象徴であり、石室墓の出現により漢族の影響力は他文化と融合・共存または衰退したと解釈されている点から見ると、姜屯漢墓は漢族文化がそのまま引き継がれたものであり、羊草庄漢墓は異民族の文化と見ることが出来る。しかし、地理的・文化的な違いが確認されているため、姜屯漢墓の編年案をそのまま羊草庄漢墓に適用することは躊躇される部分である。

また、編年の根拠となる遺物が五銖錢と貨泉であることも問題である。貨幣は他の遺物と比べ、遺物自体の生産期間や流通期間はわかりやすいものの、伝世されやすいため、その時期を示す指標遺物としては適切ではない。また、五銖錢は紀元前118年に初めて鑄造され、唐の621年に廃止されるまで、中国の歴史上最も長い期間流通した貨幣であり、貨泉は、新時代の14年に鑄造が始まり、40年に五銖錢が再び鑄造され始めるまで正式に流通していたが、その後も相当な期間使われた事例が多数確認されている。時期別に貨幣の細部形態が変わるため、おおよその時期が分かるというが、あくまでも推定にすぎず、断言できない。そして古墳に

副葬される貨幣は威信財にも分類されている。一例として、楽浪郡の3世紀前後の古墳である南井里116号墳（彩篋塚）から五銖銭と貨泉が出土しているが、古墳の時期を編年する上で、貨幣は参考にならない⁵⁾。いわゆる伝世、威信財、実際通用期間の問題があるからである。結局、遼東地域における石室墓の出現時期に関する最近の解釈は振り出しに戻って再度検討しなければならないと考えられる。また、遼東地域の異民族の影響力の拡大が石室墓の出現時期と連動するという従来の見解は、今のところ受け入れても大きな問題はないと判断される。簡単にまとめると、遼東地域と関連のある異民族は鮮卑族であり、2世紀中頃に遼東の支配勢力として登場する。支配以前に勢力が優勢化する時間を考慮し、2世紀前半からとしても発掘報告書の編年通り、横穴式石室墓が1世紀中葉頃から始まると見ることは難しい。やはり石室墓の出現は2世紀中頃、早くても2世紀前半をさかのぼることはないと考えられる。

横穴式石室墓の構造を簡単に見ると、羊草庄漢墓では計5基が確認されたが、各々に割石と板石で石室を構築した形態に分けられる。いずれも天井の構造については不明であるが、壁体は石で、天井は磚で構成された混築墓（M4墳）の場合、天井の大部分が破壊され、最も下部にアーチ型構造を支えるために磚で構築した支持形態が残存しており、横穴式石室墓も少なくともアーチ型または平天井に築造する技術を持っていたと推定される。壁体では胴張技法は検出されていないが、磚積技法により築かれている。玄室平面はいずれも長方形であり、羨道は存在するもの

5) 「萬歳」銘瓦、木製銘器、銅鏡、土器などに基づき、3C前後に編年される。

と存在しないものに分けられ、存在する場合も正しく付いているものと、長さが短いもの、羨道として機能が発達していないものがあるなど、定型化されていない。また羨道と玄室の段数の違いもある。これは横穴式石室墓がはじめて出現する段階であるため、まだ定型化された形態ではなかったものと考えられる。しかし、割石材を用いて埴積技法により構築する技術は、横穴式石室墓の出現当初から存在していたことが分かる。

2. 楽浪・帯方地域

楽浪・帯方地域における横穴式石室墓の出現時期については、前述したように研究者ごとに異見がみられる。そのなかでもリスンジンに代表される北朝鮮研究者たちの自生説と型式ごとの出現時期に関しては、すでに多くの学者によって批判されているためここでは取り上げず、高久健二と洪潜植の編年案と根拠として、当時の時代像を考慮して、出現時期と展開過程を簡単に見ていきたい。

2世紀後半～3世紀前半にかけて山東の一部と遼東、楽浪郡と帯方郡を支配した勢力は公孫氏であった。特に3世紀初頭に帯方郡を新設して韓半島西北部を本格的に統治し始めたが、公孫氏勢力が統治していた時期に横穴式石室墓を構築する技術が定着するという認識は共通している。

高久健二は横穴式石室墓をⅠ～Ⅴに分類したが、ⅢとⅤ型式を中心に見てみると、Ⅲ型式は長方形(4:3～2:1)に単室埴室墓(穹窿式埴天井、石材天井)と形態が類似しており、右片袖式羨道に壁面に漆喰を塗布する点、貞柏里159号墳の底に敷かれている文様埴の内容に基づいて埴天井単室埴室墓と石材天井単室埴室墓が併存すると理解し、3世紀中頃～4

世紀中頃と推定されている。V型式は資料が少なく編年が不明確であるが、天井は石を使用し、持ち送り天井(平行・三角・穹窿を含む)に両袖式羨道、漆喰の塗布を特徴としており、Ⅲ型式より遅く、5世紀初頭以前に編年した。Ⅰ・Ⅱ型式はⅢ型式より早いと考え、概ね2世紀末～3世紀前半と設定した。

洪潜植はⅠ～Ⅳ型式に分類した。そのうち、Ⅰ・Ⅱ型式を中心に見てみると、Ⅰ型式は揚両袖式羨道と玄室を持つ単室墓、Ⅱ型式は右片袖式羨道に玄室(長方形)を持つ単室墓である。一方、埴室墓もⅠ～Ⅲ型式に分類した。ⅢB型式が埴と石を混用して築造されていたが、その時期を3世紀後半初期と見ており、この時期以降、横穴式石室墓も徐々に造営され始めたと推定される。そのため3世紀末～4世紀初頭から始まった横穴式石室墓は、4世紀中頃に様々な形態に発展したが、4世紀後半に高句麗系の横穴式石室墓に交代しはじめ、4世紀末には造営が終わったと考えられる。

相違点として、高久健二の型式分類は類型別の時間的要素を加味した上で構造を基準に分類しているのに対し、洪潜植もある程度時間的要素を加味しているが、構造的分類の比重が高い。また、横穴式石室墓の出現時期も2世紀後半～末と3世紀末と時期の違いが大きい。高久健二はⅢ型式を基準にⅠ・Ⅱ型式を先行すると考えたことから、出現を2世紀後半と推定し、2世紀後半は公孫氏勢力がこの地域に進出時期を考慮して編年したものと見る。ここでの問題点はⅠ・Ⅱ型式がⅢ型式より先行するという点が挙げられる。根拠としては南玉里2号墳から出土した内行花文鏡の年代(2世紀中葉上限)を根拠に石室墓と埴室墓の形態比較によ

り編年しているため、分析例が足りないところにある。そして前述のように、遼東地域の横穴式石室墓は2世紀中葉から徐々に出現し始めたが、長方形の玄室に羨道がないものと羨道があるもの、石材が割石・板石・埴石混築墓などが同時に造営されているのでⅠ・Ⅱ型式が先に楽浪郡に導入され、Ⅲ型式が後に導入されるということは納得しがたい。

洪濬植は3世紀前半から楽浪・帯方郡の支配層の古墳が山東と遼東地域の墓制の型式を受け入れたと考えられる。しかし、この時期の遼東地域には埴と石が使われ、埴室墓と石室墓が併存していたことにより、楽浪・帯方郡では石室墓が造営されていなかった。その理由は、遼東地域における墓制導入の初期であり、石室墓構築の用途に合った石材を生産する技術基盤がなかったため、現地に石室墓を造営することができなかったと推定される。それが3世紀後半になると上記の問題は解消され、石室墓が出現すると考えられる。

ここでの問題点は、遼東地域における埴室墓と石室墓を使用する集団が異なるという点である。墓制は集団のアイデンティティを示す構造物として知られている。ところが楽浪郡に移住したからといって急に石室墓を使わないというのは理解しがたい。これはおそらく石室墓の登場を埴石混築墓より後行するものとして年代論を展開したため、このような編年案が登場したものと考えられる。遼東地域では埴室墓が石室墓より先行するが、楽浪地域へと伝播した当時はすでに埴室墓と石室墓が併存しており、割石から精巧に加工された板石に至るまで、様々な形態の石室墓が確認された。したがって、石室墓を造営できる条件が満たされていないことを例に挙げて論旨を展開していることから納得しがたい。ま

た、埴室墓の技術、時間、費用等を考慮すると、石室墓より築造しにくいため、様々な部分から洪潜植の編年案は、石室墓の出現を埴石混築墓の出現以降に固定した上で論旨を展開するには無理があったと思われる。

楽浪・帯方地域における横穴式石室墓の出現時に関連して、以下の二点を指摘することができる。まず、遼東地域からの流入時期は公孫氏勢力が支配した時期であるということである。次に、遼東地域には既に埴室墓と石室墓が併存しており、現在、石室墓は帯方郡が新設された黄海道地域ではなく、その多くが平壤地域で確認されている。帯方郡が新設された3世紀初頭以降から平壤地域を中心に様々な形態の横穴式石室墓または築造技術が取り入れられているという点である。高久健二によると、当時、帯方郡が新設され、楽浪郡に住んでいた在地勢力の一部が帯方郡に移動した事実が埴室墓の墓誌銘の姓氏（王、韓氏）を通じて確認され、埴室墓の中心地は帯方郡一帯に変わる。それに合わせ、平壤地域では新しい姓氏（佟氏）が出現し、新しい形態の埴室墓、埴石混築墓、横穴式石室墓が分布領域を侵さずに造営されたため、それぞれ異なる集団により造営された可能性が高いと見ており、築造時期は3世紀中頃からである。

このような事実から見ると、3世紀初頭～前半に帯方郡が新設され、遼東地域から人々が移住したことにより、新しい類型の埴室墓と石室墓の構築技術も取り入れられたものと見られる。そして、公孫氏が滅亡して支配主体が魏に変わった3世紀中葉になると、移住してきた人々の古墳が造営され始める。これらの集団はそれぞれ排他的な墓制と墓域を持っていたが、お互いに敵対していたわけではなく、集団と階層の違いと

して捉えている高久健二の見解に同意する。3世紀中葉以降になると楽浪・帯方地域は衰退期に入る。墓制の規模・数・質も減少し始めるが、技術・費用・時間の面で磚の使用の頻度と範囲は減らさざるをえなかったであろう。一方、石室墓の造営が増加していたため、磚室墓の築造技法が石室墓にも適用されたと推定される。そして4世紀初頭を過ぎるとさらに石室墓の築造技法が変化した。長方形の玄室平面、右片袖式羨道、左右壁の胴張技法が使われ、四壁は磚積技法、天井は変形穹窿形などの変化が起き、板橋型石室墓の築造の特徴が現れている。そして、4世紀中葉後期から百済で横穴式石室墓が出現しているため、4世紀初頭～前半のある時期に百済の中心地域へ移住したものと考えられる。

3. 百済漢城期（中央地域）

百済漢城期の中央地域における横穴式石室墓の出現時期については、現在、韓国の研究者は4世紀中葉～4世紀後半にある程度意見がまとまっている。石室墓の構造（平面、天井、羨道、墓壙の深さ）を基準として可楽洞型、松源里型、板橋型、汾江・楮石里型の4つの類型が設定され、中央地域では可楽洞型と板橋型が確認される。中央地域、特に都城周辺の漢江流域で確認される横穴式石室墓の遺跡は石村洞・可楽洞古墳群、牛眠洞古墳群、広岩洞古墳群、板橋洞古墳群、甘一洞古墳群、金岩山古墳群などがあり、可楽洞型石室墓は石村洞・可楽洞古墳群と牛眠洞古墳群である。板橋型石室墓は広岩洞古墳群、板橋洞古墳群、甘一洞古墳群、金岩山古墳群であり、分布の境界が明確に分かれている。

可楽洞型と板橋型を中心に展開過程を見てみると、可楽洞型は4世紀

後半に都城周辺とその一帯に築造された。5世紀以降は大きな枠で見ると、可楽洞型に当てはまるが、細部は多様な形態に変化し、地方の主要拠点にまで拡大し、5世紀半ばまで築造された。5世紀半ば以降は錦江流域を中心に石室墓の数量が急激に増加するが、ほとんどが可楽洞型で築造されている。そして、多様な形態から次第に統合され、定型化した可楽洞型へと完成していったことが分かる。一方、板橋型は4世紀後半に都城周辺に築造され始め、変化なく5世紀半ばまで都城周辺でのみ築造された。5世紀後半には定型化された可楽洞型と板橋型の2つの類型によって石室墓の構造が定着するが、分布地域については可楽洞型が漢城期の全地域で確認され、板橋型は依然として都城周辺の中央地域でのみ確認されており、明確な違いが認められる。

2つの類型は熊津期まで続くが、宋山里型石室墓は可楽洞型の構造+技術の系譜が続いていると考えられる。一方、公山城から南東約2km近くには金鶴洞古墳群が位置し、古墳群の立地をはじめ、石室の構造、副葬品まで板橋型石室墓と酷似している(朴信映2019)。このことから、板橋型石室墓は都城周辺にのみ位置しており、中央貴族の墓と見ることができ、副葬品の構成(佩用威信財)からも裏付けられる。また、出現初期から熊津期までは、ほとんど形態の変化がなく、初期から完成度の高い構造を持っている。他の石室墓の構造は変化を続けているが、板橋型は突然出現したにもかかわらず、初期から定型化した構造を持っていた。このことから、築造集団が移住してきた可能性を示している。漢城期石室墓の発掘調査の結果、中央地域には大規模な貴族専用の墓地があったことが分かる。

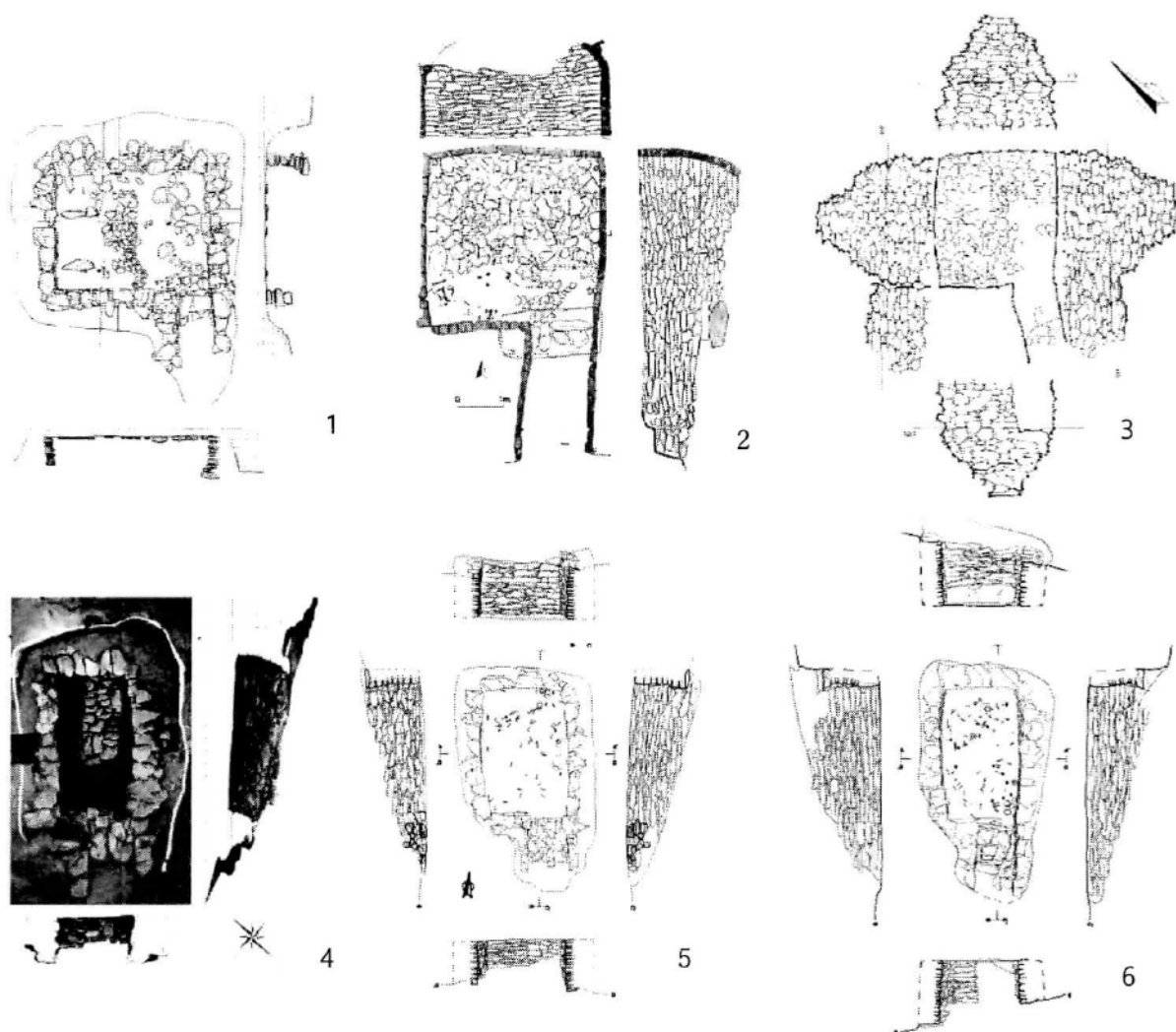


図5 可楽洞型と板橋型石室墓（1：馬下里石室墓、2：可楽洞3号墓、3：笠店里86-1号墓、4：広岩洞1号墓、5：板橋洞1号墓、6：板橋洞3号墓 - 朴信映 2019 編集引用）

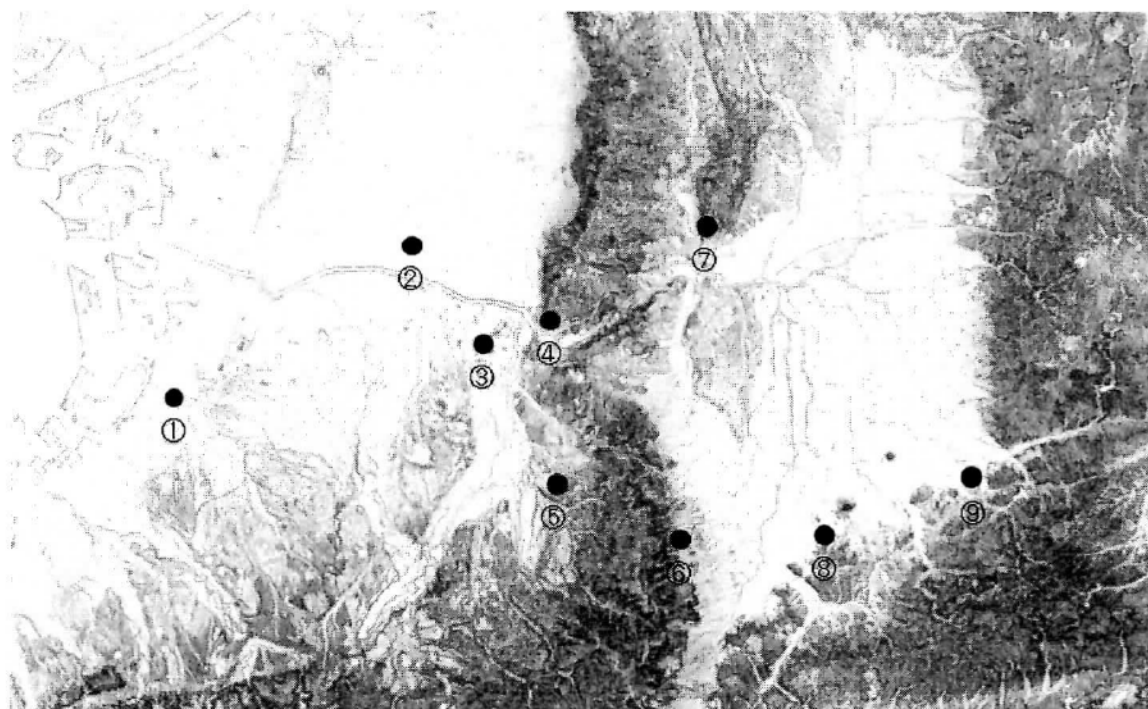
（「百済漢城期横穴式石室墓の導入と拡散過程」『百済研究』70、2019から引用）

最後に伝播時期についてまとめる。畿内地域において初期横穴式石室墓が出現する時点が5世紀中葉以降（TK23）であることを考えると、少なくとも5世紀前半または中葉には百済からの渡来人がいたことになる。その時期は漢城期末に当たり、熊津期までは下らない。さらに、6世紀に入ると首長層の古墳に畿内型石室墓が築造されるが、百済から横穴式石室墓が導入され、変化の過程を経て畿内型石室墓が誕生するまでの時

間を考慮すると、伝播時期は熊津期以前と考えられる。また、初期横穴式石室墓と板橋型石室墓は類似性が確認されるが、板橋型は中央地域にのみ存在する類型であるため、5世紀代に百済と倭の中央地域間の交流があったことが分かり、当時、初期横穴式石室墓をはじめとする渡来人関連の古墳群や生活遺跡の規模と数を考慮すると、単なる交流のレベルを超え、百済の中央貴族が倭に永久派遣されるほど密接な関係を結んでいたことが推測できる。

4. 畿内地域

前節で畿内地域の初期横穴式石室墓について構造と年代を中心に検討してみた。5世紀中葉～6世紀前後に畿内地域において初期横穴式石室墓が築造されるが、百濟漢城期中央地域との交流の中で導入されていることから、韓国学界では板橋型石室墓と畿内地域の初期横穴式石室墓との関連が認められている。畿内地域における初期横穴式石室墓も約40年の時期幅が認められるため、古墳ごとに細部の構造の違いが確認できるようである。したがって、ここでは初期横穴式石室墓の展開過程において年代と構造上の変化に相関関係が確認できるかどうか、板橋型石室墓



①塔塚古墳 ②長原七ノ坪古墳 ③藤の森古墳 ④高井田山古墳 ⑤一須賀古墳群（I支群12・14・15・16・19・20・21号墳） ⑥寺口忍海古墳D27号墳 ⑦椿井宮山塚古墳 ⑧新沢千塚221号墳 ⑨桜井公園2号墳

図6 畿内地域初期横穴式石室分布図（国土地理院地図を元に筆者作成）

(<https://maps.gsi.go.jp/#10/34.653545/135.743500/&base=blank&ls=blank%7Cslopemap&blend=0&disp=11&lcd=slopemap&vs=c0j0h0k010u0t0z0r0s0m0f1&d=m>)

との比較検討を進める。

藤の森古墳，高井田山古墳（5世紀中葉～後葉）

藤の森古墳は塔塚古墳⁶⁾とともに、現在、畿内で最も古い石室墓といわれている。高井田山古墳を中心に、畿内の他の初期横穴式石室墓とは異なり、立地、位置、石室構造などにおいて差異が見られることから、北部九州系石室墓の影響（吉井秀夫2001）または横穴式石室墓の構築について理解が不十分な状況で、百済の石室墓を模倣して築造したもの（安村俊史2014）であるという見解が示されている。筆者は、模倣築造よりも最初から両者の系統が異なるという見解に同意する。但し、既存の研究史では違いに対する詳細説明が足りないので、ここでは石室構造の違いを中心に記述する。

天井の構造は持ち送り式で次第に隅角が小さくなって天井石に至る。天井石と持ち送りの石材も壁石とともに大きさだけ異なる割石を使用している。一方、変形穹窿形の構造を持つ天井は、斜面石を使用するため、角度が比較的滑らかに上がるという違いがある。

玄室の壁体は埴積技法により積み上げられていると記載されているが、詳しく見てみると、最初から傾斜を保ちながら積み上げている。110cmの高さから持ち送り式に積み上げたため、全体的に壁体の層ごとに少しずつ飛び出て角が確認できる。一方、高井田山古墳は壁石が垂直にあがり、約100cmの高さからやや内傾している。これは斜面石で穹窿形の構造を作るための準備過程であり、板橋型石室墓でも共通して見られる部

6) 塔塚古墳は既に九州系の石室といわれているため、本稿からは除外している。

分である。割石を利用して壁体を接するように築造したという共通点以外は構造的に異なる。

また、壁に赤色顔料(朱漆)が塗られているが、これは、高井田山古墳はもちろん、板橋型石室墓からは確認されていないものであり、さらに百済漢城期の横穴式石室墓からも確認されていない。

羨道は安村俊史の指摘通り、玄室と羨道の高さの違いが確認される。しかし、羨道の構造を見てみると、玄室と同様に最初から傾斜をつけて積み上げたため、玄室に入る時、実際の幅に比べてかなり狭い。これは垂直に積み上げる板橋型石室墓と比較すると構造的な違いが目立つ。また、羨道天井石の大きさは壁石よりは大きい、目立つほどではない。しかし、板橋型石室墓をはじめ、高井田山古墳の羨道天井石は全体の石材の中で最も大きく、壁石と天井石と比べても圧倒的に大きい。

最後に藤の森古墳では最古の釘留木棺の痕跡が棺釘と鏃からわかった。これを根拠に百済の影響が指摘されている。しかし、漢城陥落前の韓国の横穴式石室墓から出土した棺釘を分析すると、百済は方頭形の棺釘を使用し、高句麗と新羅は円頭形の棺釘を使用する傾向が強く、棺釘からもある程度系譜を把握できる。ところが、藤の森古墳出土の棺釘は円頭形であるのに対し、高井田山古墳と一須賀古墳のI-4・8号墳からは方頭形の棺釘が出土している。いわゆる板橋型横穴式石室墓の影響を強く受けた古墳は方頭形の棺釘を用いており、百済との直接的な関連性を示唆することができる。しかし、藤の森古墳の場合は木棺から直接的に百済の影響があるとは言い切れない⁷⁾。

7) 金奎運も藤の森古墳から木棺は出土しているが、在地的な組み合わせ

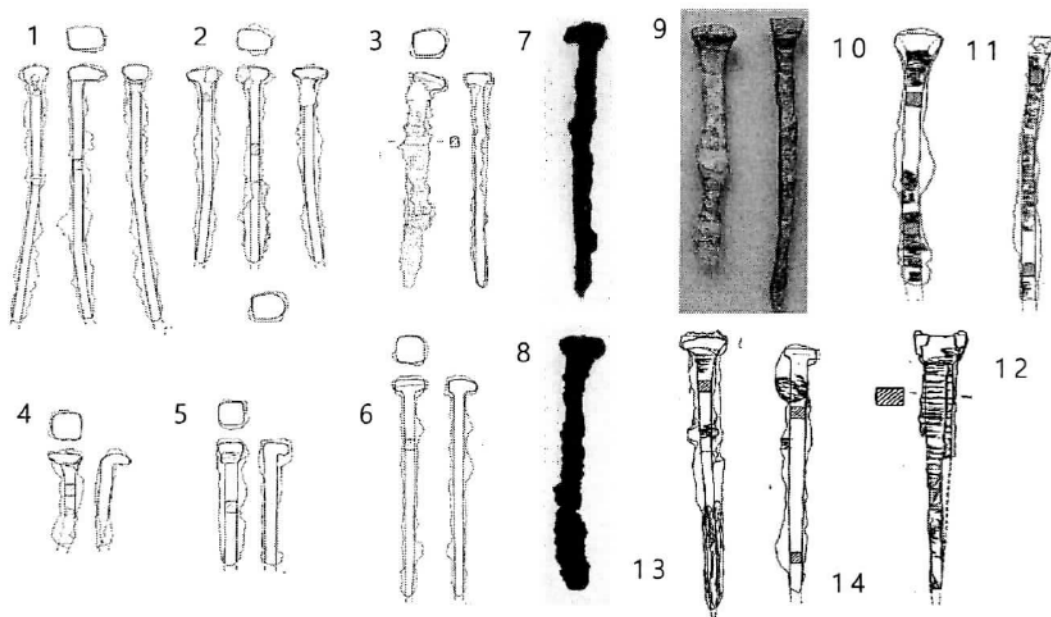


図7 高井田山古墳(1~8)と一須賀古墳群I-4(9~12)・I-8(13~14)号墳の棺釘の頭部形態(方頭形)*縮尺不同(1~8:『高井田山古墳』1996、9~14:『一須賀古墳群I支群発掘調査概要』1993から編集引用)

このように、ほぼすべての石室墓の構造や木棺など、葬制にも異なる点を確認できるため、百済の石室墓の影響を受け、模倣して築造されたと考えるよりは、九州系特に北部九州型石室墓の影響を受け、畿内の状況に合わせて築造されたと理解するのが妥当である。

高井田山古墳は百済漢城期の板橋型石室墓と判断しても大きな問題がないほど構造面において酷似している。それだけでなく、古墳の立地、石室の位置も板橋型石室墓と類似しているため、その違いは見出せない。共通点を列挙すると、右片袖式羨道に長方形の玄室、変形穹窿形の天井、割石を用いた埴積技法による壁体構築、墓道から羨道を経て玄室入口まで確認される傾斜度、夫婦合葬、木棺などが挙げられる。ただし、在地の影響も受けており、須恵器が確認され、武器・武具類など豊富な副葬

せ木棺を安置している点、埴輪などを樹立している点などから、在地的要素が大きいと博士論文で指摘している。

品の構成は、佩用型威信財中心の板橋型石室墓とは異なる部分である。そして板橋型石室墓より石室墓の規模が大きいため、出現初期から在地化が始まっていたものと推定される。

初期横穴式石室のうち、藤の森古墳と高井田山古墳が最も早い段階に属する(5世紀中葉～後葉)。従来の研究では両者の構造的相違点を在地の影響によるものと判断されていたが、石室墓の構造を詳しく分析した結果、両者の系統が異なることが分かった。中でも藤の森古墳は、板橋型石室墓はもちろん、次の段階(TK47)の初期横穴式石室墓と構造的に類似する。また、後の時期に受け継がれる石室墓が確認されていないため、板橋型石室墓が畿内地域に出現する前に既に九州系石室墓が部分的に築造されていたと考えられる。しかし結局、高井田山古墳を中心とする板橋型石室墓の系統が畿内地域で主流となり、藤の森古墳をはじめとする九州系統の石室墓は排除されたと考えられる。

一須賀古墳群(①～⑦I支群12・14・15・16・19・20・21号墳)、桜井公園2号墳(5世紀後葉)

ほとんど古墳で破壊が激しく、石室墓の下段部分だけが残存しており、天井形態は不明であるが、残存しているところを見ると、構造が高井田山古墳と類似しているため、同系統とされている。初期横穴式石室墓のうち、板橋型石室墓と構造が最も類似しており、群集墳である点や全体

表4 一須賀古墳群I支群の属性表（『一須賀古墳群の調査Ⅲ（I支群）』2

002をもとに筆者作成）

一須賀 I支群	玄室(cm)		羨道(cm)	木棺	遺物
	寸法	● 長幅比	羨道位置		
I-12	310×160	1.94	160×90 右片袖式羨道	1	須恵器・土師器・銀環1対・鉄鏃・鉄釘
I-14	300×170	1.76	180×80 右片袖式羨道	1	須恵器・土師器・鉄釘
I-15	(220)×160	-	150×80 右片袖式羨道	1	須恵器・土師器・鉄釘
I-16	340×170	2	140×80 右片袖式羨道	1	須恵器・土師器・鉄釘
I-19	310×170	1.82	160×80 右片袖式羨道	2	須恵器・土師器・ミニチュア炊飯具1 セット・銀環・釵子・銀線・鉄釘
I-20	340×170	2	180×100 右片袖式羨道	2	須恵器・土師器・銀製指輪・ガラス玉・馬 具（鉸具・辻金具）・鉄釘
I-21	320×160	2	(120)×80 右片袖式羨道	1	須恵器・土師器・銅釧・鉄釘

的に平均10～30cm高くなっているが、石材の大きさと壁体の構築技法などは共通する。単葬（1）と夫婦合葬（2）それぞれ木棺が使われている点も同じである。副葬品の構成も、須恵器と土師器を百濟土器に変えると、他の副葬品は確認できないほどであり、特に武器・武具類や誇示型威信財ではなく、愛用型威信財が主に確認される点も同じである。

このようにあらゆる面で類似性を示し、多数の古墳から事例が確認されているため、現在は渡来人たちの古墳群と結論付けられている。これまで百濟のどの地域との交流であるのか不明であったが、近年、韓国における板橋型石室墓の発掘事例が増え、交流地域の正確な位置まで類推できる指標遺跡として位置づけられるようになったという点が一須賀古

墳群の最大の意義である。

桜井公園2号墳の全体的な様相は、一須賀古墳群I支群の最も初期の石室墓と類似している。さらに規模が小さく、韓国の板橋型石室墓とさほど変わらない上に、副葬品の構成（脚付短頸壺・土師器把手付壺・ミニチュア炊飯具1セット・釧状銀製品・銀製釵子）も類似している。現在は分かりにくいですが、3・4号墳も2号墳と類似した様相だったという。木棺も2基が確認されたため夫婦合葬と考えられ、周辺に20～30基の円墳が存在していたことから、この地域も渡来系集団の古墳群であった可能性が高い。畿内の複数地域に渡来系集団が位置していたことは、百濟中央との交流関係が本格的に活発に行われていたことを示唆する。

一須賀古墳群や桜井公園2号墳はほとんど破壊されており、正確な様相は不明であるが、概ねこの時期は渡来系集団の遺跡が畿内の諸地域で数的に増加する段階であると考えられる。また、板橋型石室墓と全体的に類似しているが、副葬品の構成から在地の変化が感知される古墳も一部確認できる。しかし、在地の古墳ではTK47段階の横穴式石室墓の確認事例がほとんどないため、まだ在地社会に本格的に受容される段階には至っていないと考えられる。

長原七ノ坪古墳，寺口忍海D27号墳，新沢千塚221号墳，椿井宮山塚古墳（5世紀末～6世紀初）

京都府上狛天竺堂1号墳と郡川西塚古墳もTK47～MT15段階の初期横穴式石室墓として知られているが、石材の大きさと石室墓の外形が初期横穴式石室とは異なるため、本稿では長原七ノ坪古墳のみをとりあげる。これらの古墳の共通点は、前方後円墳（帆立貝形を含む）の墳形を呈する

が、埋葬主体施設として新たに横穴式石室墓が導入されるという点である。特に、長原七ノ坪古墳は渡来系集団の痕跡が多数確認される長原遺跡の中に位置しているにもかかわらず、木棺の構造や副葬品との組み合わせなどから見ると、板橋式石室墓との類似性は確認できない。この古墳の性格については、被葬者の出自によって二つに分けられる。被葬者が在地人である場合は、在地社会が新しい墓制を受け入れ始めたと見ることができ、渡来人である場合は、渡来文化がますます在地化し始めたと見ることができる。いずれにせよ、2つの集団間で文化的融合が起きていることは間違いなく、本格的に横穴式石室墓が古墳時代の支配層の新しい墓制として採用され始めたことを意味する。

寺口忍海D27号墳では石材の大型化が始まったものが目立つ。木棺が2つ確認され、棺釘の頭形態は円頭形が確認された。副葬品の構成も異なる。馬具類、武器類、埴輪、土師器、紡錘車、ガラス玉などが出土したが、前時期に比べると副葬品の構成は耳飾、指輪、かんざしなどの佩用型威信財から馬具、武器、武具などの誇示型への変化が目立つ。また、副葬品が厚葬である点も以前の薄葬とは異なる。一方、同時期に編年されるE21号墳では割竹形木棺が確認され、この古墳群で最も初期の石室墓であるにもかかわらず、在地化が強く見られる点などから、寺口忍海古墳群の被葬者は百済の関連性が少ないものと考えられ、関連性があるとしても、すでに在地化がかなり進んでいたと考えられる。

新沢千塚221号墳は破壊が激しく盗掘もされていることから全体的な様相が分からないが、平面形態はかなり細長く、玄室の幅を考えると木棺1基が置かれた可能性が高い。この点が新沢千塚221号墳を在地化され

た古墳であるとする根拠としてあげられていた。しかし最近、韓国の甘一洞古墳群において同規模の玄室、木棺1基の単葬石室墓が発見されたため、もはや意味のない主張となっている。特に羨道と玄室の段差は板橋型横穴式石室墓にもよく見られる形態である。一方、残る副葬品の組み合わせが馬具・須恵器・土師器である点、以前時期の周辺古墳から韓半島系の遺物が出土したが百済との関連性が低い点、石室墓が突然出現した点などから、被葬者は百済との直接的な関連よりは石室墓を築造する工人を招待して築造したとか、あるいは百済の石室墓の外形を真似て築造したりしていたと推測される。

桜井宮山塚古墳は、初期横穴式石室墓の中で唯一、天井が完璧に残存している。この古墳は畿内型横穴式石室墓が出現する直前段階で築造されたものであるが、天井は穹窿形（変形穹窿形）であるが、石材の大型化が始まり、何より玄室の規模はその他の初期横穴式石室墓よりも大きくなった。さらに、玄室に赤色顔料（朱漆）を塗布した跡がある点、群集墳から離れ、単独墳となっている点、平群町周辺に注目すべき渡来人関連遺跡も確認されていない点などから、まだ発掘調査が行われていないため確実な様相は見られないが、すでに在地勢力もある程度完成した形態の古墳を築造し始めていたと考えられる。

まとめると、TK47～MT15段階に入ると、渡来人中心から在地の影響がますます強まっていることが明らかになった。古墳築造および被葬者の主体については、いくつかの組み合わせの可能性が考えられる。まず、古墳築造と被葬者が渡来人であるにもかかわらず、葬祭は在地化された場合であり、次に古墳を築いた主体は渡来人である可能性が高いが、被

葬者は在地人である場合である。最後は在地人によって石室墓が構築され、被葬者も在地の人物である場合である。

上記の様相により個別の古墳を完璧に判断することは不可能であるが、前時期（TK47）までは明確に確認できなかった墳形、葬祭の在地化（木棺、副葬品構成、赤色顔料など）、石室墓の築造位置および石材の大型化などにより、在地社会に横穴式石室墓が定着し始めたことを示している。

特に注目される部分は、古墳時代は伝統的に、階層によって墳形を変えて築造を行っていた。帆立貝形古墳も含め、最も上位階級の墓制である前方後円墳に横穴式石室が出現するという事実から、TK47～MT15段階を古墳時代中期から後期に変わる分岐点とみなすことができる。そして、市尾墓山古墳をはじめとする畿内型横穴式石室墓の出現とともに、地域首長層を中心に本格的に古墳時代後期が始まる。

以上、畿内地域の初期横穴式石室墓を時期別に分類し、展開過程について考察した。その結果、TK208～TK23段階、TK47段階、TK47～MT15段階の3時期に分けられる。5世紀中葉～後葉は板橋型石室墓系と九州型石室墓系が並存し、畿内地域に横穴式石室墓が築造され始めた時期と考えられる。九州型石室墓系は藤の森古墳をはじめとし、数基が在地の古墳で確認される一方、板橋型石室墓系は高井田山古墳であるが、調査の結果、渡来人の古墳という見解が有力である。検討事例が少ないが、両者古墳の採用集団が明確に分かれていると考えられる。そして、1基だけで結論付けることは困難であるが、高井田山古墳の時期にはすでに石室墓の規模や副葬品の構成（厚葬）に若干の変化が確認できる。TK47段階

に九州型石室墓系は確認されていないが、畿内の複数地域において古墳群を中心に築造されていることが確認できる。しかし、現在までの発掘成果を見ると、在地勢力の影響と見ることでできる要素は一部石室墓での副葬品の構成を除けば、ほとんど確認されておらず、前時期と大差はない。ただし、数的に増加しており、渡来人たちを中心に畿内地域に広がっていた時期といえる。TK47～MT15段階になると、墳形、石室墓の構造、葬祭など全体的に再地化が行われる。特に在地の支配層の古墳と考えられる前方後円墳でも横穴式石室が採用されているが、この時期からは在地勢力も新たな墓制を用いており、渡来集団でも在地化が進んでいると考えられる。

第4節：小結

遼東地域で石室墓が出現し、楽浪地域と百済漢城期中央地域を経て畿内地域に至る過程について検討した。遼東地域における石室墓の初現は2世紀中葉で、漢族文化が弱体化して、異民族(鮮卑)が遼東地域を支配することになって、文化的融合により塼室墓が主体を占める中に石室墓が出現した。その後、2世紀後半から山東、遼寧を支配していた公孫氏勢力が3世紀初頭、楽浪・帯方地域に進出し、移住民によって石室墓が伝わった。本格的な出現時期は3世紀半ば頃で、3世紀後半から4世紀初頭にかけて、塼室墓の築造技法の影響で板橋型石室墓に似た外形の石室墓が出現する。楽浪郡と帯方郡が滅亡した後、4世紀前半のある時点で百済中央地域に移住し、4世紀中頃から板橋型石室墓が築造され始める。5世紀に入り、百済と倭の交流が増加したが、中央地域間の交流が目立つ。5世紀中頃以降、畿内地域でも高井田山古墳を皮切りに、畿内地域にも

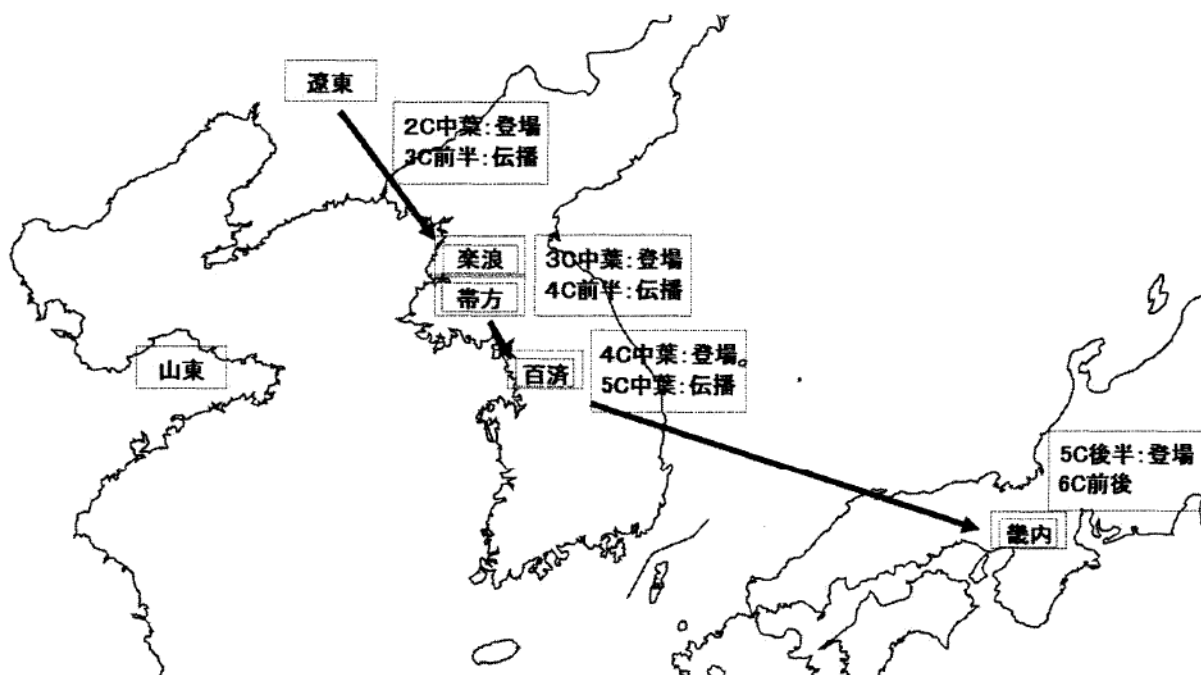


図8 横穴式石室墓の出現・伝播時期・経路(遼東地域-楽浪地域-百済漢城期中央地域-畿内地域)(筆者作成)

初期横穴式石室墓が出現する。

このように畿内地域に伝播した初期横穴式石室墓は、墳形、石室墓の外形変化、葬祭、副葬品の構成によって3時期に分けることができる。各段階の古墳の編年は、共伴した須恵器の型式に基づいて、1期：5世紀中頃～TK23、2期：TK47、3期：TK47～MT15に分けられる。1期は板橋型石室墓とほぼ類似しており、葬祭、副葬品の構成など全てが渡来人と判断される時期である。2期は1期と同じであるが、畿内の複数地域に渡来人集団を中心に広がっていく時期である。3期は墳形、石室墓の外形、葬祭、副葬品の構成などに少しずつ変化が起こり、在地化が始まった時期である。そして、初期横穴式石室墓の影響を受け、6世紀初頭に畿内型石室墓が出現し、古墳時代後期が始まる。

第3章：古墳築造の変遷過程をめぐる各観点とその意味

第1節：研究史および研究目的

古墳時代は前期・中期・後期・終末期に大きく分けることができる。畿内地域を基準に、前期と中期は前方後円墳を頂点とした墳丘形態が主流となり、墳丘の頂上部に竪穴系の埋葬施設を造営する。後期になると、墳丘形態は前方後円墳体制が続くが、埋葬施設は横穴系の埋葬施設が出現し、特に横穴式石室が主流として採用される。終末期になっても横穴系埋葬施設は続くが、前方後円墳の造営が終了し、方墳と円墳（天皇の場合は八角墳）が中心となる。

横穴式石室は本来、地下に埋葬主体部が位置し、傾斜した墓道を通じて外部につながる構造になっている。中国の前漢代に始まり韓国の百済を経て、5世紀後半に日本の畿内地域に伝わったため⁸⁾、外来の埋葬施設といえる。一方、竪穴系埋葬施設は墳頂部に墓壙を掘り、埋葬主体部を構築した。弥生時代後期の大型墳丘墓から古墳時代中期までを契機として発展してきたため、途中で中国と韓国からの影響があったものの、伝統的な埋葬施設といえる。九州地域を除いて古墳築造の展開過程で特に接点がなかった二つの墓制は古墳時代中期後半に畿内地域で出会うことになる。そして、併存期間を経て横穴式石室は古墳時代後期の主流の墓制となっている。

第2章で述べたように、初期横穴式石室は5世紀中葉～6世紀初頭にかけて、畿内地域に出現し、渡来人を中心に拡散し、在地社会に受容される3段階を経て、在地社会に定着する。6世紀初頭に出現した畿内型石室

8) 北部九州地域は4世紀後半に横穴式石室が登場するが、研究の対象地域が畿内地域のため本稿では扱わない。

は石室の規模や構造が初期横穴式石室と著しく異なり、石室をめぐって墳丘や周辺構造、副葬品など、すべてが完全に在地化されたため、日本独自の横穴式石室といえる。しかし、物理的結合が化学的結合を意味するものではないように、一見、竪穴式石室から横穴式石室へと自然に入れ替わったように見られるが、埋葬主体部が竪穴式石室から横穴式石室に取って代わったことを、単なる外形の変化としてのみ理解することは困難である。白石太一郎の指摘のように、もともと前方後円墳は竪穴系埋葬施設に最適化されていた墓制である。ところが、埋葬主体部が横穴式石室に取って代わったということは、今までの埋葬原理と造営原理が完全に変わったことを意味する。さらに、古墳の各部分は本来の大きさや位置に関係なく、外形的構造だけでなく、儀礼の精神的な部分まで有機的につながって、意味が付与されていた。そのため埋葬主体部の変化は、古墳の全体的な構造まで変化をもたらされることは十分予想でき、石室と墳丘で起きる変化を綿密に検討してこそ、古墳時代の古墳の変化に伴う意味と背景を正しく理解することができるだろう。

これまで墳丘と石室の相関関係について論旨を展開していた代表的な研究は次の通りである（表5）。

研究史を簡単にまとめると、小林行雄と尾崎喜左雄は石室が墳丘に影響を及ぼしていることを認知していたが、あくまで墳丘を中心に規模と構築方法に関する研究が中心であったため、墳丘と石室を対等な観点から検討はしなかった。吉井秀夫も墳丘を石室より重視する研究傾向はあるが、石室の比重が高く、墳丘と石室の相関性について初めて言及し、研究範囲を日本の外に広げた。土生田純之は、中国の葬送儀礼に代表される東アジアの思想が日本の古墳に影響を及ぼし、それが墳丘と石室に変化をもたらし、受け入れの過程で政治的な結果による変化だけでなく、

心性的な側面からの変化にも関心を持つべきであると指摘した。そして他の著書である『古墳の復元的研究』を通じても墳丘と埋葬主体部の位置関係を把握することができる。とくに、曹永鉉は伽耶地域の古墳発掘成果を中心に、様々な形態で存在している墳丘と埋葬主体部の関係を把握できる程度の豊富な資料と解釈を提示した。最近の日本では古墳の全面発掘の制限により、なかなか確認できない部分についても、ある程度古墳の全面的な構造が予想できるという点で重要な成果であると考えられる。一瀬和夫は時期別に墳丘と石室の変化の様相を指摘し、初めて両者の検討が対等に行われた。青木敬は吉井秀夫の観点（墳丘と石室の相関性）を発展させ、古墳時代後期と終末期の列島全域の古墳を検討した。平面での石室と墳丘の関係を細分化し、地域別の違いを確認した。白石太一郎は古墳の平面と立面を通じて墳丘と石室の関係を分析し、時間の経過とともに墳丘と石室の変化が連動していることを明らかにした。

研究史で注目されるのは、一瀬和夫による墳丘中心の研究であり、墳丘と石室の研究比重が対等に扱われている。青木敬は研究の空間的範囲を広げた代わりに、時間的範囲を古墳時代後期と終末期に絞り、平面位置関係に集中して論旨を展開しており、地域別の特徴をよく示した研究結果によって、墳丘と石室に関する研究水準が一段階上がったと評価される。白石太一郎は墳丘と石室の変化の方向性について、平面と立面から詳細に観察した。特に、石室の高さが次第に下降し、基底部に位置すること、墳丘の中央と玄室の奥壁、または中央に相応するように築造することに対する時期別の流れと分岐点を明瞭に示し、研究史的に一段階発展したと判断される。また個人的には、これまでの研究の中で最も発展した有効な分析法として評価することができ、本稿でも白石太一郎の分析法を取り入れ、本稿の論旨展開に活用したい。ただし、精密な観察

結果によって時期別の変遷過程を明らかにしたが、残念ながら、このような現象が現れるようになった理由と意味については、一般的な立場と推定を示す程度にとどまったため、本稿において様々な観点を通じて検討したい。

表5 墳丘と石室の相関関係に触れた研究（筆者作成）

研究者	年度	論文名	内容
小林行雄	1951	『日本考古学概説』	奥室と墳丘中央部を一致させることと石室の入口を側面開きにするため、後円部の大きさを縮小するかわりに前方部が大型化する必然性がもたらされたとみた。
尾崎喜左雄	1956	「古墳の墳丘と内部施設との関係」	埋蔵施設と墳丘の相関性に関する研究で墳丘の意味を重視し、竪穴式石室と横穴式石室の構築順序によって積土の方法が異なることを認識した（横穴式石室は先石-後土、竪穴式石室は先土-後石）。そういうわけで竪穴式石室の墳丘は基壇、横穴式石室の墳丘は封土と把握した。
吉井秀夫	2001～2003	「百済の墳墓」 「朝鮮三国時代における墓制の地域性と被葬者集団」 「朝鮮三国時代における墳墓の構築過程について-墳丘先行型と墳丘後行型」	日本列島を越えて百済の墳墓の様相を墳丘先行型と墳丘後行型に大別し、被葬者が埋葬された当時と墳丘の有無を把握した。また、韓半島全域に範囲を広げ、集団別差というよりは地理的差が長期間続いていることを確認しており、墳丘と石室の相関性に基づき、墳丘の持つ意味が日本だけでなく、韓国でも通用することを提示した。
土生田純之	2003	『日本全国古墳学入門』	古墳と墳丘の変化の流れにおいて、政治的だけではなく心性面からも関心を持たなければならないと指摘し、中国の葬送儀礼に代表される当時の東アジアの思想が列島に入り、内部で主体的に展開・受容されていく過程で現れる現象について言及した（社会・政治的構造の変化と政治的・精神的象徴物の変化におけるギャップ）。また墳丘の巨大化が5世紀中葉までなのに対し、横穴式石室の盛行は6世紀にいたってからであり、横穴式石室の導入と墳丘の縮小化に直接的関連性はないとした。
一瀬和夫	2005	『大王墓と前方後円墳』	中期古墳は埋葬主体より墳丘が中心となるため、古墳が巨大化すると考え、後期古墳になると巨石を使う横穴式石室の構築に中心が移ると指摘し、古墳の変容を墳丘と石室の両方から検討した。
青木敬	2007	「古墳における墳丘と石室の相関性」	墳丘と石室とが相互に影響を及ぼすこと（相関性）に着目し、双方向から検討を行った。日本列島の後期と終末期古墳を対象に墳丘優先型・石室優先型・折衷型の3つに大別し、地域性と時間的変化を検討した。その結果、墳丘優先型から折衷型・石室優先型へと変化していき、畿内地域と違って関東地域は終末期に入っても墳丘優先型の割合が高いことを指摘した。特に、列島全域を対象に検討を行った部分は注目に値する。
白石太郎	2009	古墳の墳丘における横穴式石室の位置について」	埋蔵原理と構造原理が全く異なる横穴式石室が、伝統的な前方後円墳と結合して変化していく流れを通じて、中国・韓国をはじめとする日本の墳丘の構造そのものの変遷過程の変化の意味と背景を把握することを重要な課題と認識した。 古墳時代の後期と終末期を4時期に区分し（受容期・展開期前半・展開期後半・終末期）、畿内地域、特に近畿中央部の大型古墳を中心（後期は前方後円墳、終末期は方墳と円墳）で墳丘における埋葬施設（横穴式石室）の位置と変化を観察した。その結果、石室の大きさは大型化し、位置は地面に近くなり、墳丘の中央が石室の中央や奥壁に相応する傾向が高まることになったと考えた。

研究史の時空間的範囲についてまとめると、研究の初期には弥生時代の墳丘墓も含めて、日本以外の地域にまで研究範囲が拡大したが、近年では古墳時代後期と終末期、そして地域別特徴に集中しており、徐々に縮小していく傾向が見られる。しかし、これを研究の縮小と考えるよりも、既存の研究成果が蓄積され、ある程度、研究の方向性と成果が定まったものにとらえられる。次の段階に発展していくためには、既存の研究成果の検討や整理が必要であると考えられる。

実際、上記の研究成果により、次の研究で継続すべき部分が明らかになったため、本稿における時空間の範囲を古墳時代後期と終末期の畿内地域に限定することができた。そして、横穴式石室が前方後円墳・方墳・円墳に導入される時点から、構築位置（平面と立面）の変遷過程に対応しながら、共に変化する古墳全体の各構造を時期別に綿密に検討できるきっかけとなった。特に横穴式石室と墳丘の変遷過程の意味と原因および背景を検討するために、横穴式石室を積極的に古墳に導入した支配層の意図（政治的観点）、それに伴う新しい死生観の導入（死生観的観点）、様々な観点から始められた表現の欲求を古墳に実現するための努力（技術的観点）など、多様な観点から総合的に判断する必要性も確認された。もちろん、その他にも様々な観点と多様なアプローチが存在するが、ここで全ての部分を扱うことは無理があり、上記の観点からいくつかを選定し、それを中心に検討を進める。

既存の研究史では、一つの観点を選択した上で、その観点到集中して論旨を展開する場合がほとんどであった。このような研究の長所は、一つの観点を通じて論理を詳細に展開することが可能であるため、高い研究完成度を示している。しかし、一つの観点から説明が困難な事例が出現する場合、正しく対応できないという短所がある。これは、他の研究

テーマにもよく現れる問題の一つであり、既存の様々な研究成果を総合的に整理する機会があまりなかった場合、各研究間で細部の論理では衝突するものの、導かれた結論が同じであることや、また逆に細部の論理は似たような様相であったが結論が異なっているなど、一つのテーマで矛盾する様相がしばしば確認される。そこで、第3章の研究でも一つの様相をとりあげ、複数の観点から総合的に把握し、議論を導き出す機会が必要と考える。

第3章では、死生観的観点、心性面的観点、技術的観点を中心に、墳丘と横穴式石室の平面・立面の位置関係を検討したい。政治的観点については、既に他の研究で最も多く言及されたテーマであり、他の観点と比較すると、考古資料だけでは検討しにくい部分も存在するため、今回の検討では除外することとした（心性面的観点も同様であるが、研究史において検討されたことがない）。研究の時空間的範囲は、畿内地域において造営される古墳時代後期と終末期の首長の前方後円墳・円墳・方墳を対象に検討する。なぜなら、3つの観点が比較的よく見られる古墳は首長の前方後円墳・円墳・方墳であり、畿内地域は当時の大和政権の中心地としてヘゲモニーを掌握していたため、上記基準を満たした古墳を中心に検討を進めたい。

第2節：時期別古墳の基礎的検討

第2節では、畿内地域に造営された古墳時代後期と終末期の前方後円墳と円墳・方墳のうち、平面と立面から石室と墳丘の位置関係を把握できるものを選定し、検討を進める。また、古墳の全体的な構造を合わせて検討し、石室や墳丘と連動しながらどのように変化していくのかについても考察する。

前述したように、畿内地域の6世紀初頭～7世紀中葉までの古墳のうち、首長級の古墳を検討対象として選定した。変遷過程を綿密に検討するため、造営時期によって6世紀初頭～6世紀前半、6世紀中葉～6世紀後半、6世紀末～7世紀初頭、7世紀前半～7世紀中葉に細分化した。一方、畿内地域の初期横穴式石室は首長級の古墳ではないが、最初に在地社会にどのような形態で受け入れられたかを把握する必要があり、5世紀中葉～6世紀末の初期横穴式石室の墳丘と石室の様相を最初に検討する。

表6 時期別の検討対象古墳目録（筆者作成）

5C中葉～5C末	6C初頭～6C前半	6C中葉～6C後半	6C末～7C初頭	7C前半～7C中葉
高井田山古墳	五ヶ庄二子塚古墳	物集女車塚古墳	赤坂天王山古墳	石舞台古墳
	今城塚古墳	市尾宮塚古墳	牧野古墳	塚穴山古墳
	市尾墓山古墳	五条野丸山古墳		峯塚古墳
	東乗鞍古墳	平林古墳		西宮古墳
				菖蒲池古墳



- ①物集女車塚古墳 ②五ヶ庄二子塚古墳 ③今城塚古墳 ④西宮古墳 ⑤高井田山古墳 ⑥牧野古墳 ⑦塚穴山古墳 ⑧東乗鞍古墳 ⑨峯塚古墳 ⑩平林古墳 ⑪五条野丸山古墳 ⑫菖蒲池古墳 ⑬石舞台古墳 ⑭赤坂天王山古墳 ⑮市尾宮塚古墳 ⑯市尾墓山古墳

図9 検討対象古墳の位置図（国土地理院地図をもとに筆者作成）

(<https://maps.gsi.go.jp/#10/34.653545/135.743500/&base=blank&ls=blank%7Cslopemap&blend=0&disp=11&lcd=slopemap&vs=c0j0h0k010u0t0z0r0s0m0fl&d=m>)

1. 5世紀中葉～5世紀末

この時期に該当する古墳には、塔塚古墳をはじめとし、1章で言及した初期横穴式石室がすべて含まれる。しかし、ここで全ての古墳を検討することはできない。なぜなら、初期横穴式石室は群集墳であり、後の時期に単独墳として造営された首長級古墳と比較するには条件が合わないからである。また、破壊が進んだ古墳も正確な様相の把握ができないため、除外した。なお、塔塚古墳と藤ノ森古墳は調査当時、ある程度、墳丘と石室が良好に残存していたが、これらは検討の結果、九州系の影響を受けた石室であることが明らかになり、系統的に異なるため比較の条件に合わない。高井田山古墳は畿内型石室の原形である板橋型石室であり、単独で位置する。また、古墳の規模と副葬品の構成からも、他の板橋型の初期横穴式石室に比べ、卓越した地位を占めていたと考えられる。発掘担当者も高井田山古墳の被葬者を渡来系集団の首長と推定しているなど、検討対象時期以前の様相を把握する上で最も適していると考えられる。

高井田山古墳：5世紀後葉の古墳であり、大阪府柏原高市の高安山から大和川に向かって長く伸びている小丘陵の頂上部に位置する。墳形は円形で直径は22mである。石室は地山層を掘り下げて設置しているが、総じて壁体部は地下、天井部は破壊されて分からないが（穹窿形推定）、地上の墳丘と並行して積み上げたものと見られ、石室の位置は半地下式と判断される。また、古墳全体の平面図を見ると、玄室の中央が墳丘の中央と一致するように造営されたことが確認できる。墳丘の周辺と内部からは施設や遺物は見つかっていない。石材は30cm前後の板状の安山岩の割石を使用している。玄室は長さ373cm、幅226～234cm、残存高130cm、

羨道は長さ約200cm、幅118cm、残存高約110cmである。

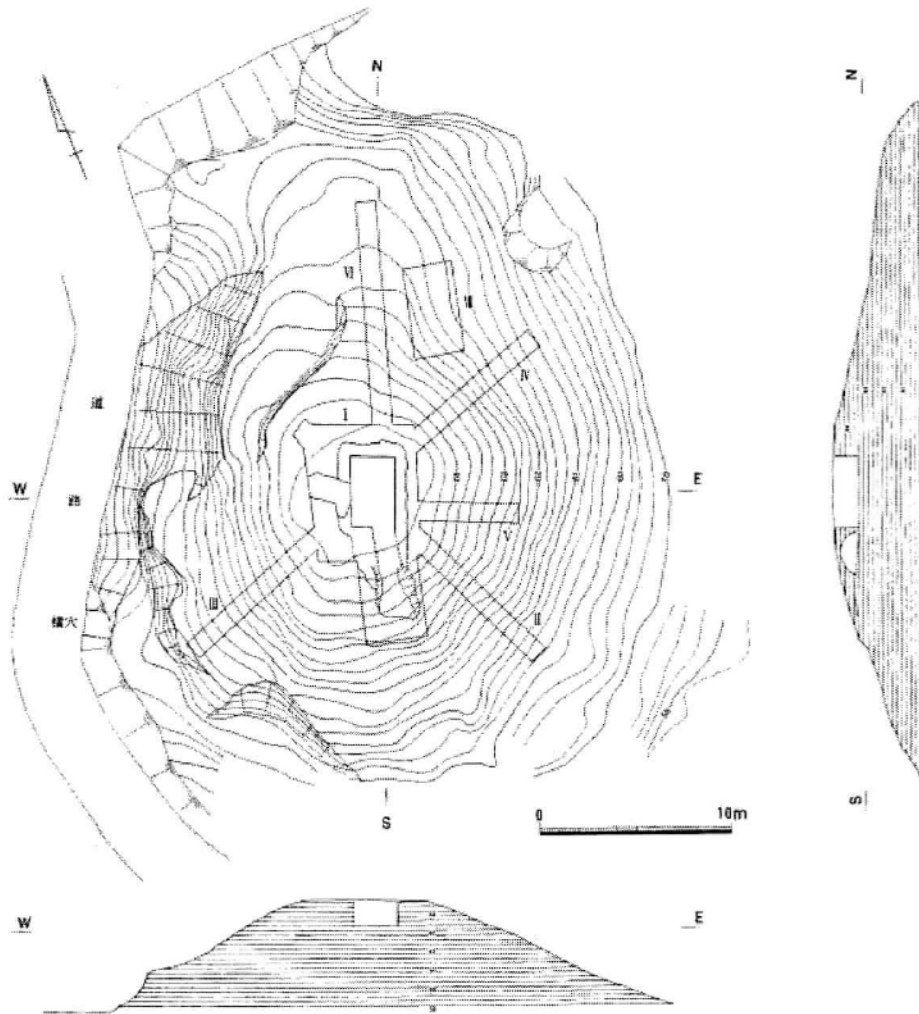


図10 高井田山古墳平面・断面測量図(『高井田山古墳』1996から編集引用)

2. 6世紀初頭～6世紀前半

6世紀初頭～6世紀前半(MT15～TK10)には首長層の前方後円墳に横穴式石室が出現する。しかし、石室の外観は前時期とはかなり異なり、いわば畿内型石室と呼ばれる形態の横穴式石室が施設される。一方、峰ヶ塚古墳は大王墓として知られる5世紀末ごろの大型前方後円墳であり、唯一埋葬施設の調査が行われている。調査の結果、埋葬主体部の一部(長さ3.4m、幅2.2m、高さ1.8～1.9m)は、石室基盤補強工法をはじめとす

る諸根拠により横穴式石室の存在が想定され、6世紀初頭を起点に畿内では大王墓まで横穴式石室が採用されたと想定される。ただし、不明な部分があるため、観察が可能な6世紀前半までの首長層の前方後円墳と、継体大王の古墳として知られる今城塚古墳を中心に検討を進める。

五ヶ庄二子塚古墳：京都盆地南東部，宇治川右岸の微高地上に築造された大型前方後円墳であり、6世紀初頭に編年される。古墳全体（周濠を含む）の長さ218m、幅202m、墳丘全長112m、後円部直径62m、前方部の長さ50m、幅87mであり、前方部と後円部ともに3段築盛である。墳丘の周辺には2重の周濠が巡らされており、内堤幅19m、外堤幅15mである。造り出しは西側のくびれ部に位置し、長さ約15mである。埋葬施設は横穴式石室として知られているが、後円部が激しく破壊されているため現存していない。石室の造営位置と推定される場所で長さ18m、幅9m、20～30cm程度の礫石を2段以上積み上げ、石室の平面の大きさに合わせて石を敷いた施設が確認された。これは、石室の堅牢性と安定性のために基盤を補強した施設として知られている（石室基盤補強工法）。石室基盤補

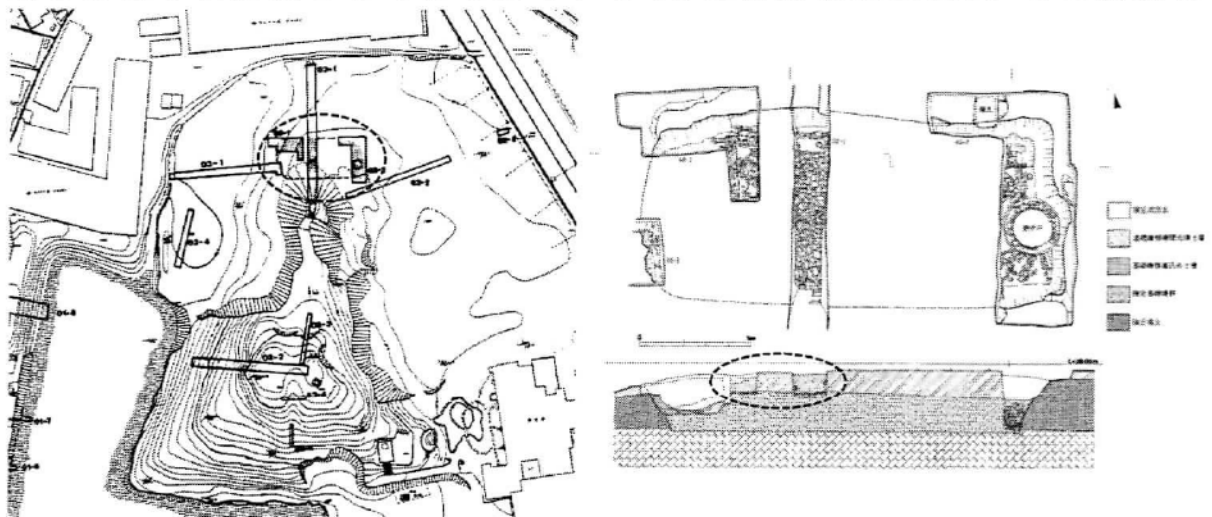


図11 五ヶ庄二子塚古墳平面測量図と石室基盤補強工法実測図（『五ヶ庄二子塚古墳』1992から編集引用）

強施設の位置と墳丘復元図から墳丘と石室の平面位置を推定すると、墳

丘の中央が玄室の中央に合致していると考えられる。墳丘と石室の立面位置は、石室基盤補強施設の位置から推測すると、少なくとも墳丘の2段目テラスの上に位置していたと考えられる。円筒埴輪(普通・朝顔形)や形象埴輪(動物形・家形・盾形)などが墳丘や周濠などから出土している。

今城塚古墳:6世紀前半(531年以後)に編年され、被葬者は継体大王とされている。三島平野のほぼ中央部に位置する淀川流域の最大級の前方後円墳である。古墳全体(周濠を含む)の長さ350m、幅342m、墳丘全長186m、後円部直径100m、高さ11m、前方部の長さ86m、幅141.5m、高さ12mである。墳丘は破壊が激しいため、段築ははっきりとはわからないが、後円部は3段築盛と想定される。石室は完全に破壊されたが、石室に使われた石材と、石棺に使われた石材の破片が出土した。古墳の構造は墳丘・造出部・内濠・内堤・埴輪儀礼場(長出)・外濠・外堤によって構成されている。後円部の2段目テラスからは五ヶ庄二子塚古墳と同様、石室基盤補強工法の痕跡が確認される。石室の羨道と推定される位置からは、

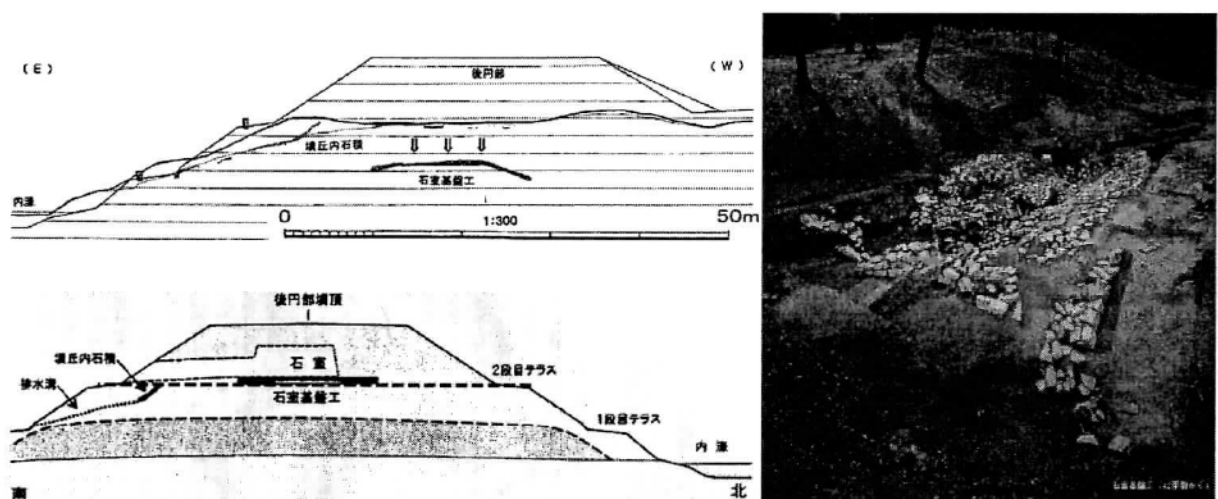


図12 今城塚古墳推定模式図と石室基盤補強工法写真(『史跡・今城塚古墳』-第10次規模確認調査-と現場説明会資料2008から編集引用)

墳丘内積石と排水路施設が確認された。発掘状況に基づき作成された古墳推定模式図によると、古墳の立面位置は後円部2段目テラスの上に位

置する石室基盤補強工法の上に石室が施設されており、平面位置は墳丘の中央が玄室の中央に一致していると考えられる。一方、長出の上に埴輪儀礼場が全面に展開し、様々な形態の形象埴輪136点（2004年基準）が確認された。儀礼場は東西65m、南北約10mが復元されている。

市尾墓山古墳：6世紀初頭の前方後円墳で、奈良県高取町の中央部から西側に、曾我川上流の平坦地に位置する。墳丘全長66m、後円部直径39m、高さ10m、前方部の長さ27m、幅49m、高さ10mである。横穴式石室は右片袖式であり、石室の全長9.5m、玄室の長さ約5.8m、幅約2.6m、高さ約3m、羨道の長さ約3.6m、幅約1.8mである。前方部と後円部ともに2段築盛であり、墳丘の周囲を掘って周濠と外堤を構築している。墳丘には円筒埴輪（普通・朝顔形）が樹立され、造出部からは若干の形象埴輪（蓋形、盾形などの器財類）が出土した。その他にも鳥形木製品が確認された。石室の位置は後円部の中心から前方部に若干偏っているが、概ね後円部の中央に石室の奥壁がある。特異な点は、奥壁の右側にL字型の羨道上の通

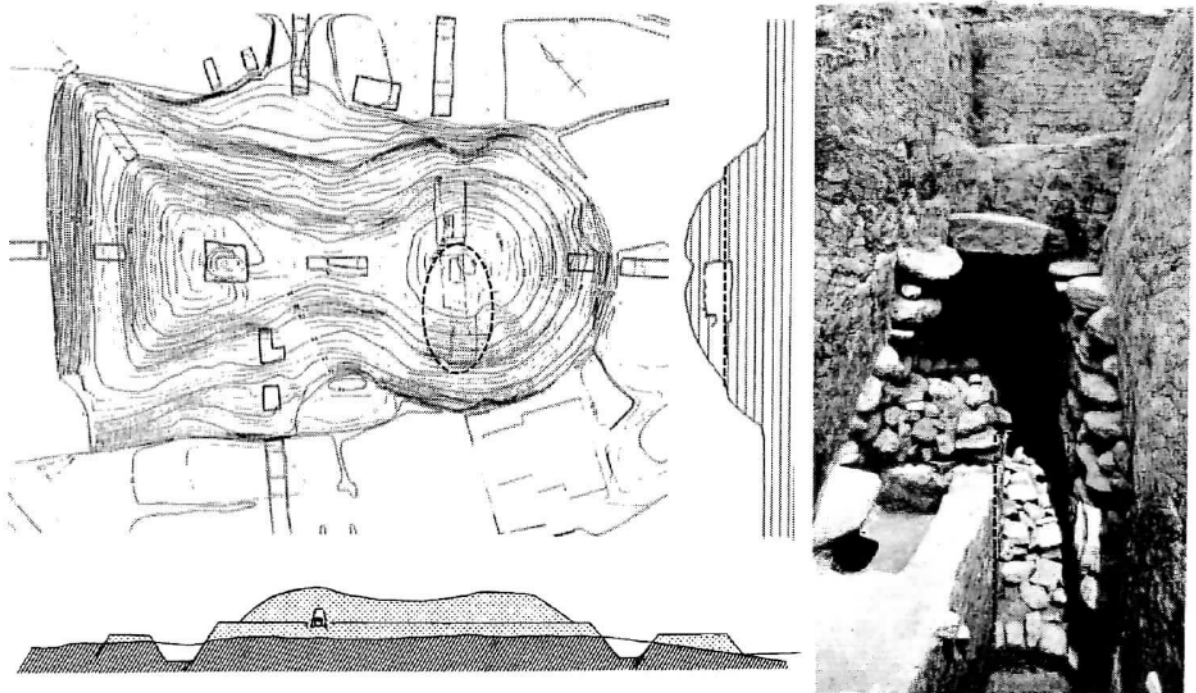


図13 市尾墓山古墳平面・立面測量図と石室基盤補強工法写真（『市尾墓山古墳』1984から編集引用）

路を設置し、石室の全ての構築が完了した後、奥壁を完成させたことである。これを見ると、後側の通路施設まで考慮すると、実際には奥壁が正確に位置するとは言いがたい。立面的な位置については、石室が1段目テラスの上に設置されているが、全体的には2段目テラスに石室が構築されているといえる。また、今城塚古墳、五ヶ庄二子塚古墳と同様に、石室基盤補強工法が石室の下に設置されていることが確認された。

東乗鞍古墳：奈良県天理市杣之内町・乙木町の奈良盆地東縁、東から西に延びる丘陵尾根上に築造された前方後円墳であり、6世紀前半に編年される。墳丘全長83m、後円部直径44m、高さ約10m、前方部の長さ39m、幅68mである。石室は全長14.6m、玄室約7.6m、幅2.4m、高さ約3.3m、羨道7.6m、幅1.7m、高さ1.5mの右片袖式横穴式石室である。前方部と後円部いずれも2段築盛とされているが、3段築盛である可能性もある。前方部の西側には幅10m、深さ2mの周濠が確認された。墳丘と石室の平面位置を見ると、玄室は後円部の中心から前方部に若干偏っているが、墳丘の現状上、概ね後円部の中心に玄室の奥壁が位置している。石室の立面上の位置が2段目である場合、2段墳丘の中央に位置し、3段築盛の場合は2段目テラスの上に位置することになるが、いずれの場合も石室は墳丘の上段に構築されていると判断される。近年、墳丘で円筒埴輪1点が出土している。石室は崩れてはいないが、非常に不安定な状況である。石室崩壊の恐れがあるため石室周辺は発掘できなかったが、同時期の五ヶ庄二子塚古墳、今城塚古墳、市尾墓山古墳で確認されるように、墳丘の高い位置に築造されたため、石室基盤補強工法が行われた可能性が高いと想定される。

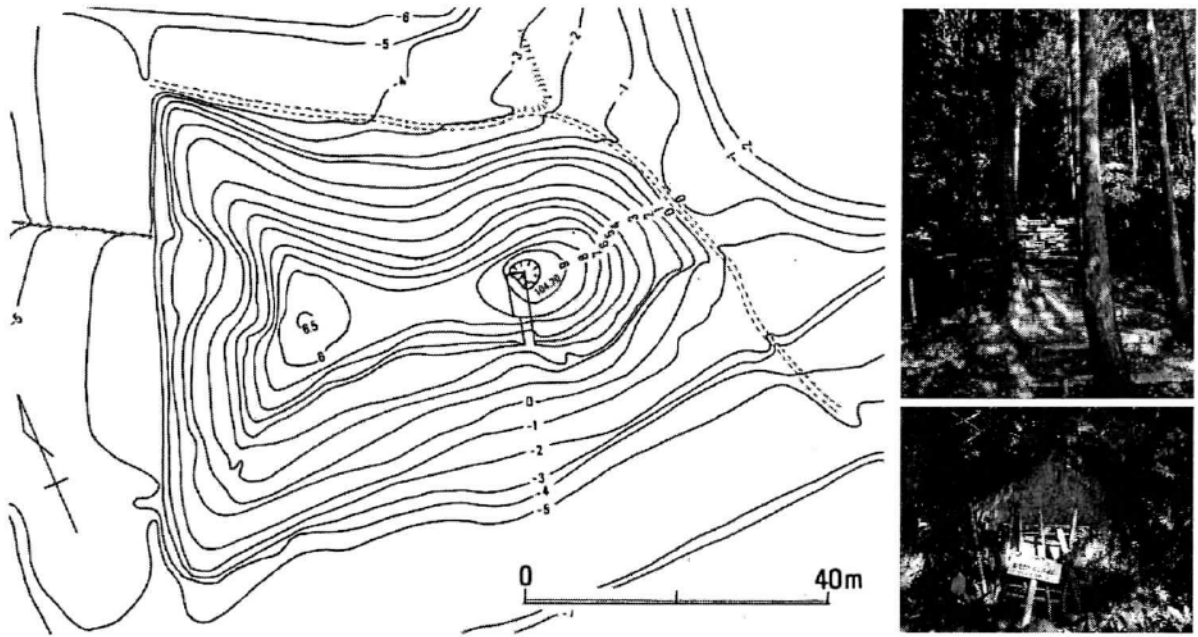


図14 東乗鞍古墳平面測量図と石室入口写真
 (『天理の古墳100』2015から引用と筆者撮影)

3. 6世紀中葉～6世紀後半

物集女車塚古墳:京都府向日市の向日丘陵から伸びる尾根を利用してほぼ東西方向に築かれている前方後円墳であり、6世紀中葉に編年される。前方部、後円部ともに2段築盛である。墳丘全長45m、後円部直径24～32m、高さ約9m、前方部の長さ18～23m、幅39m、高さ約8mである。石室は全長10.9m、玄室約5.07m、幅2.4～2.8m、高さ約2.9～3.05m、羨道(右片袖式)長さ5.83m、幅1.3～1.5m、高さ1.7mである。墳丘と石室の平面位置を見ると、後円部の中心に玄室がある。立面位置は1段目テラスより約1m低いところで玄室の床面が確認され、開口方向にいくほど徐々に高くなり、入口と1段目テラス面に繋がる。一方、1段目テラスで地山層が確認され、石室はそれより少し下に床面を施設したため、実際に古墳を築造する際、墳丘の周りを掘り出して1段目を構築した後、2段目は盛土によって完成させている。これは古墳がなだらかな丘陵上に立地しているため、平地に比べて少ない労働力で墳丘の造成が容易であり、

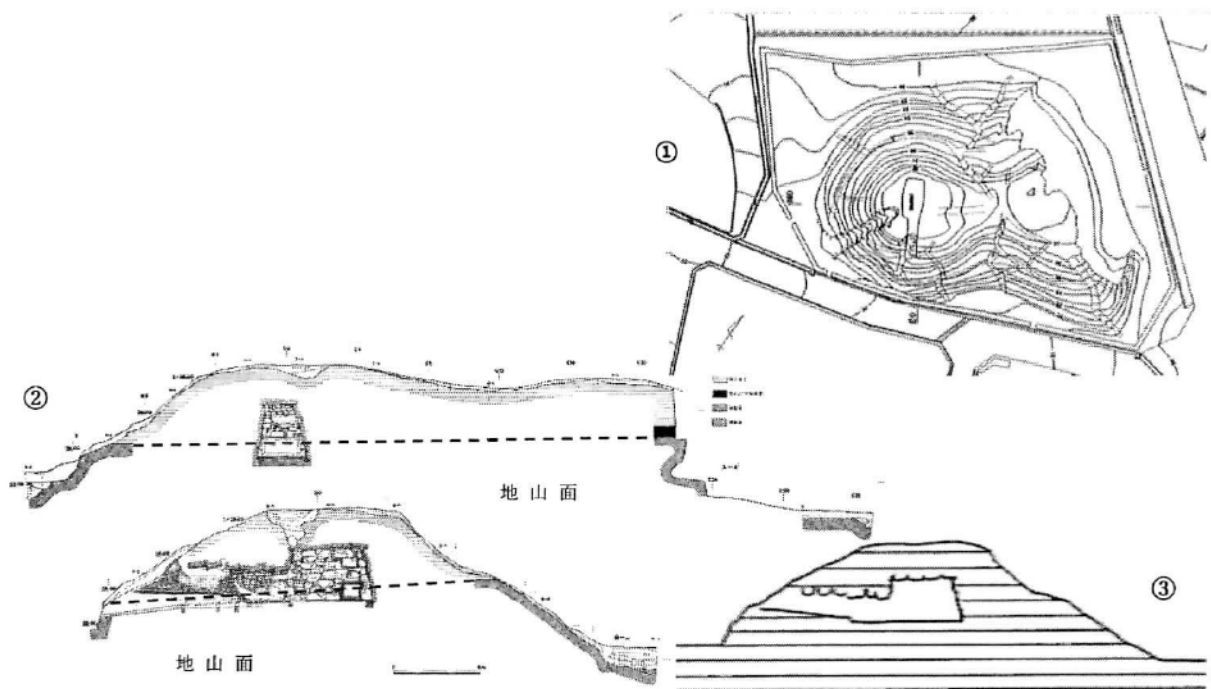


図 15 物集女車塚古墳平面・立面測量図

①②『物集女車塚古墳』1988より編集引用 ③「古墳の墳丘における横穴式石室の位置について」2009から編集引用

最小限の労働力で最大限の効果を狙って墳丘を構築しようとしたものと考えられる。結果的に、墳丘の周辺を低くして古墳を引き立たせるとともに、墳丘の比較的高い位置に石室を構築したような視覚的効果を意図している。また、石室は地山層に造営されているため、石室の床面は安定性が確保され、前時期にみられた石室基盤補強工法は確認されない。埴輪については、円筒埴輪(普通・朝顔)と形象埴輪(盾・衣蓋など)が出土しており、おもに円筒埴輪は墳頂部と1段目のくびれ部、形象埴輪は1段目のくびれ部と周濠から見つかっている。

市尾宮塚古墳：奈良県高取町の天満丘陵上に位置する前方後円墳であり、6世紀前半～中葉に編年される。前方部と後円部ともに2段築盛とみられ、測量調査の結果、外堤があった可能性が想定される。墳丘全長52m、後円部

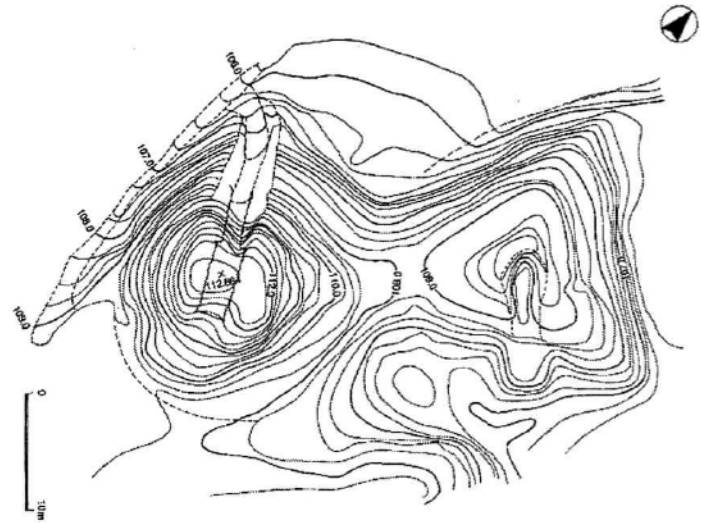


図16 市尾宮塚古墳測量図（『市尾宮塚古墳発掘調査報告書』2018から引用）

直径28m、高さ6.5m、前方部長さ24m、幅28m、高さ3.5mである。石室は全長11.6m、玄室6.3m、幅2.4m、高さ3m、羨道（両袖式）長さ5.3m、幅1.4m、高さ2mである。墳丘と石室の平面位置を見ると、後円部の中心に玄室が位置する。立面位置は石室床面が墳丘の基底面と概ね一致するが、隣接する前時代の市尾墓山古墳（MT15）の石室床面が概ね墳丘の1段目テラス上に施設されているのと比べると、6世紀前半と中葉の間に石室の位置は墳丘の盛土から基底面に下りてきて、地山層に築造されている可能性が高い。一方で、全面的な発掘調査が行われていないためか、畿内地域では、6世紀中葉に埴輪の種類・数が急激に減る傾向があり、この影響を受けている可能性もある。

平林古墳：奈良県
葛城市兵家の金剛山
から北東に派生した
丘陵頂上の先端部に
築造された前方後円
墳であり、6世紀後
半に編年される。前
方部と後円部ともに
2段築盛であるが、
地形上、前方部の一
部では段築が省略さ

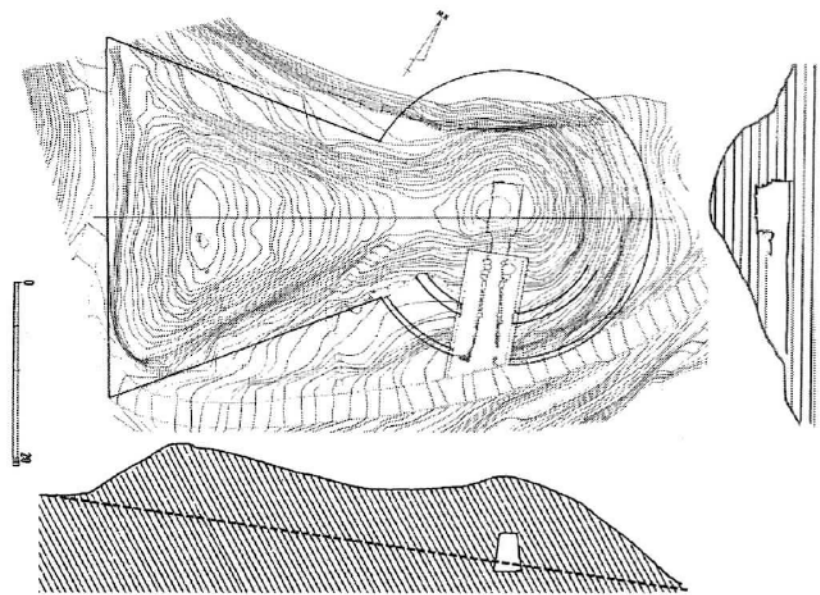


図 17 平林古墳平面・立面測量図（『平林古墳』
1994、「古墳の墳丘における横穴式石室の位置につ
いて」2009から編集引用）

れている。墳丘全長 62m、後円部直径 33m、高さ約 4.9m、前方部の長さ 29m、幅 42m、高さ約 5.1m である。石室は全長 20.1m、玄室 5.7m、幅 3.35m、高さ 3.72m、羨道の長さ 8.8m、幅 1.9m、高さ 2m である。墳丘と石室の平面位置を見ると、後円部の中心に玄室がある。立面位置は、発掘調査当時、墳丘の基底部から地山層が確認されたかどうか分からないが、前方部と後円部の墳丘基底面を直線をつないだ場合、石室床面は、墳丘の基底面よりやや下に位置しており、物集女車塚古墳と同様に地山層に石室を施設したと思われる。埴輪は確認されていない。

五条野丸山古墳：奈良県橿原市の見瀬町・五条野町・大軽町にかけて築造された前方後円墳であり、古墳時代後期に築造されたもので最大規模となる（6世紀後半に編年）。墳丘は改変が著しく正確にはわからないが、前方部は2段築盛、後円部は3段築盛と想定される（Gowland 復元による）。古墳の全長（周濠を含む）420m、墳丘の全長約 318m、後円部直径約 155m、高さ約 21m、前方部長さ約 163m、幅約 210m、高さ約 15m

である。石室は全長 28.4m、玄室長 8.3m、幅 4.1m、高さ 4.5m、羨道（両袖式）長さ 20.1m、幅約 2.5m、高さ 1.5m である。墳丘と石室の平面位置を見ると、後円部の中心からかなり外れて玄室がある。立面位置は、Gowland の復元案に従うと 1 段目テラスに石室を造営したものと見ることができ、同時期の大型前方後円墳に分類されるウワナリ塚古墳（6 世紀中葉～後半）でも石室が 1 段目テラスに造営されている。これは、墳丘の盛土から基底部に下りながら、それまでの石室の造営に反対する現象とも取れるが、五条野丸山古墳やウワナリ塚古墳などは、6 世紀後半の大型前方後円墳であるため、古墳の地位を誇示するため、前時期の物集女車塚古墳のように墳丘の周辺を掘り出し、基底部を 1 段目に構築することによって、視覚的効果を意図したものと解釈するのが妥当である。

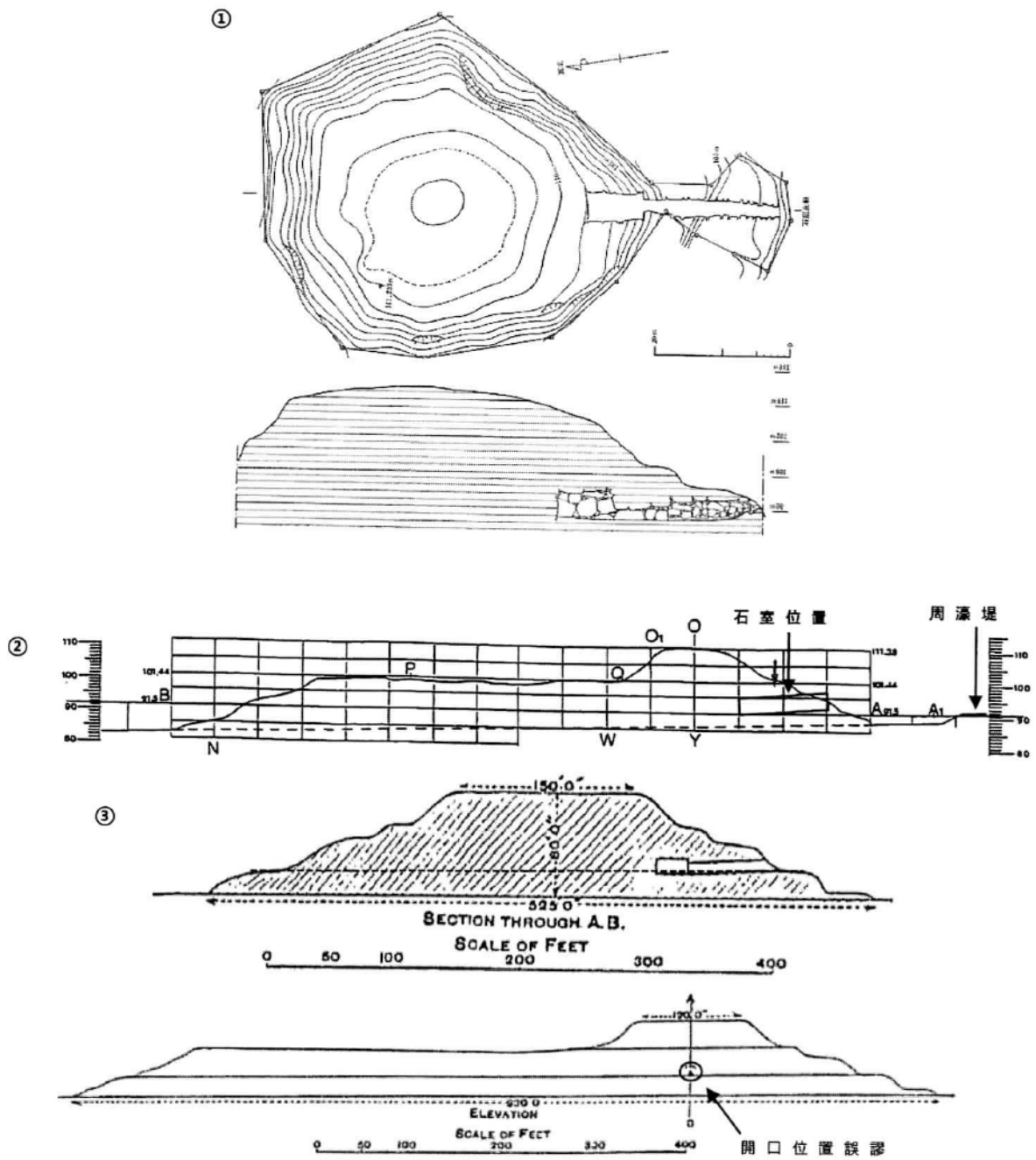


図 18 五条野丸山古墳平面・立面測量図

① 『書陵部紀要』第 45 号 1994、②③ 『季刊考古学』別冊 2 号 1992 から編集引用

前述のように、物集女車塚古墳の 1 段目は地山層から成っている。白石
 太一郎の指摘の通り、五条野丸山古墳でも周濠の周囲を取り囲む周堤は
 旧地形の丘陵をそのまま利用したことが確認されているが、周堤は墳丘

の1段目とほぼ同じ高さになっており、原地形の周濠を掘り出して自然に基底面が1段目に位置するように造営したことは疑いの余地がない。埴輪は確認されていない。

前時期との最大の相違点を簡単に整理すると、石室の規模と石材の大きさがさらに大型化する。また、石室床面に設置されていた石室基盤補強工法が確認されていないと同時に、石室の位置が墳丘床面に下がる傾向が確認されている。依然として墳丘の基底面より高い場所に石室がある場合もあるが、その場合、墳丘の周辺を掘り出して本来の墳丘床面が1段目テラスにあるようにした。実際、石室は地山層に位置することが、墳丘調査と周辺地形の調査で確認されている。一方、6世紀中頃から古墳の墳丘と周囲で埴輪の種類・数量が急激に減少し、あるいは全く出土しない古墳も見られはじめ、6世紀後半の大王墓と推定される五条野丸山古墳でも埴輪が検出されない。このことから、この時期を起点として畿内地域においては埴輪の樹立が終了すると考えられる。

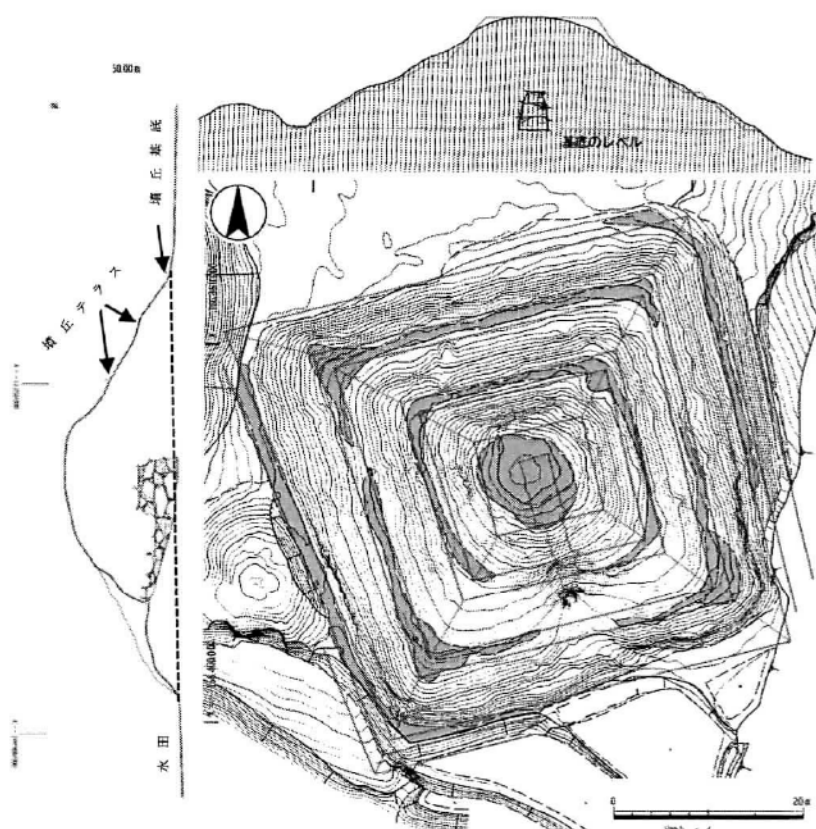


図19 赤坂天王山古墳平面・立面測量図（『赤坂天王山古墳群の研究』2018から編集引用）

4. 6世紀末～7世紀初頭

赤坂天王山古墳：須恵器は確認されなかったが、6世紀末～7世紀初頭に編年され、被葬者は崇峻天皇と推定される。奈良県桜井市倉橋の多武峰の北西の尾根に位置する3段築盛の大型方墳である。方墳の各辺の長さは北50.5m、南43.2m、東46.5m、西47mで同一ではない。高さは約11.75～13.75mである。石室は全長15.3m以上、玄室6.5m、幅3～3.2m、高さ4.2m以上、羨道（両袖式）長さ約8.8m以上、幅約1.8m、高さ約1.9mである。墳丘と石室の平面位置を見ると、墳丘の中心に玄室がある。立面位置は最近の測量調査の結果、古地型図と墳丘の傾斜などから考えると、現在の玄室の床面と墳丘の基底面がともに海拔154.00～154.75mの間に位置している。古墳築造当時の墳丘の基底面の高さは154.00m程度と判断されるため、石室と床面の高度がほぼ同一であることが確認された。埴輪は確認されていない。

牧野古墳：奈良県北葛城郡の馬見丘陵の中央部の小稜線の先端部に築造された大型円墳であり、羨道部から出土された須恵器により6世紀末～7世紀初頭に編年される。古墳の直径は約60m、高さ約13m、3段築盛（高さ：1段3m、2段4m、3段6m）である。石室は全長17.1m以上、玄室6.70～6.73m、幅3.2～3.3m、高さ約4.5m、羨道（両袖式）長さ約10.24～10.0m以上、幅約1.77～1.8m、高さ約2～2.2mである。墳丘と石室の平面位置を見ると、墳丘の中心に玄室の奥壁がある。立面位置を見ると、2段目の墳丘の中央に（標高68～70m）石室の床面がある。1段目テラスよりかなり高く位置しているが、墳丘のトレンチ調査結果、墳丘の1段目と2段目で地山が確認された。このことから、傾斜した地形を利用して石室を地山層の上に造営し、その時、石室の開口部が1段目の上に位置するように墳丘の形を意図的に調整したことが分かる。埴輪

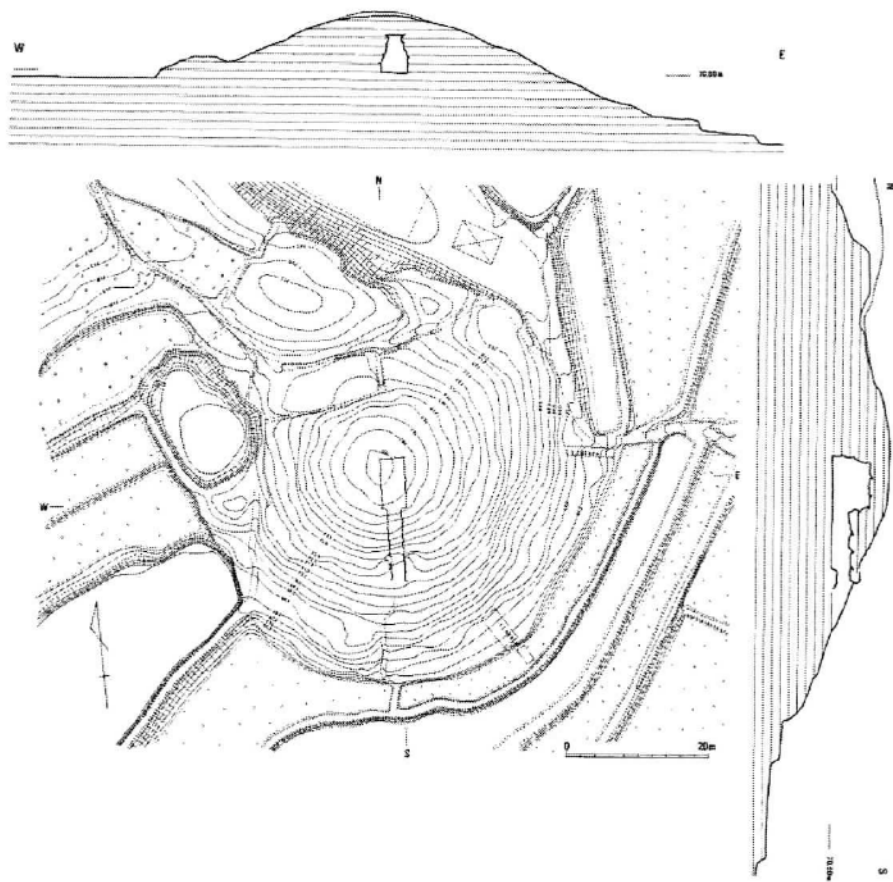


図20 牧野古墳平面・立面測量図(『牧野古墳』1987から編集引用)

は、墳丘の頂上部で破片が確認されているが、元の位置でないこと、他の調査区にはまったく出土していないことなどから、埴輪は樹立されておらず、後代の墳丘補修などの改変により入り込んだものと報告者は把握している。

この時期には前方後円墳の築造が終了する。大王または王族の古墳であるにもかかわらず、二つの古墳が前方後円墳ではなく、方墳と円墳として築造されていることからよく分かる。一方、墳丘の規模は小さくなったが、石室の規模はより大きくなったことが分かる。前時期と同様、石室の築造位置は原地形の基底面にあり、墳丘の高い位置に置くため、墳丘周辺を掘り出していることが確認されている。このことから、古墳の造営において外見的に現れる伝統的な要素とはほぼ決別したが、石室

を高い場所に位置させようとする在地的傾向が残存していると考えられる。

5. 7世紀前半～7世紀中葉

石舞台古墳:7世紀前半に編年され、被葬者は626年に死亡した蘇我馬子として知られている。奈良県明日香村の細川谷に入る曲部に位置し、一辺約51mの方形古墳で周濠(幅5.9～8.4m)と外提(幅7m)までを測定すると81～83mである。墳丘は1段目しか残っていないが、2段以上(3段)と推定される。玄室長さ約7.7m、幅約3.5m、高さ約4.7m、羨道(両袖式)長さ約11m、幅約2.5mである。墳丘と石室の平面位置を見ると、墳丘の中心に玄室が位置する。立面位置を見ると、石室の床面と墳丘の基底面である周溝の床面の高さはわずかな差はあるものの、ほぼ同じ高さに位置している。報告書では本来傾斜地だったこの場所を古墳の造営のため平坦化し、黒赤色の砂利層を地山層と判断したが、その上に玄室と羨道、墳丘を構築したと考えられる。

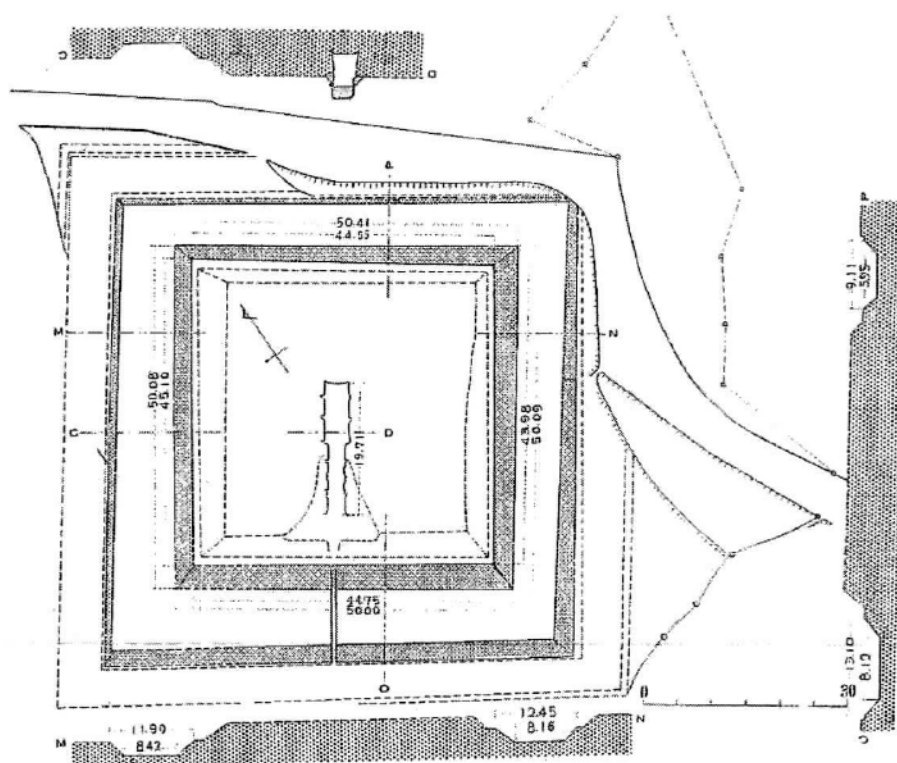


図21 石舞台古墳平面・立面測量図

(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第14集』1960から引用)

塚穴山古墳:石舞台古墳と同時期に築造され⁹⁾、石室の形態も似ている。被葬者は物部氏の首長だったといわれている。奈良盆地の東麓には西山古墳が位置するが、塚穴山古墳は西山古墳の北の外提を若干侵食した状態で築造された、直径約63.4m、高さ(残存)約8m以上の円墳である。外提まで含めた外径は112mに達する。石舞台古墳と同様に墳丘と石室の上段はすでに破壊されている。石室の全長17.12m、玄室の長さ約7.04m、幅約2.9~3.24m、高さ(残存)約3.6m、羨道(両袖式)の長さ約9.4~10m、幅約2.14~2.24m、高さ(残存)約3mである。墳丘と石室の平面位置を見ると、2014年の測量調査により、墳丘の中心に玄室が位置していることが明らかになった。立面位置を見ると、石室と外提の床面がほぼ同じレベルに位置している。墳丘と外濠の間

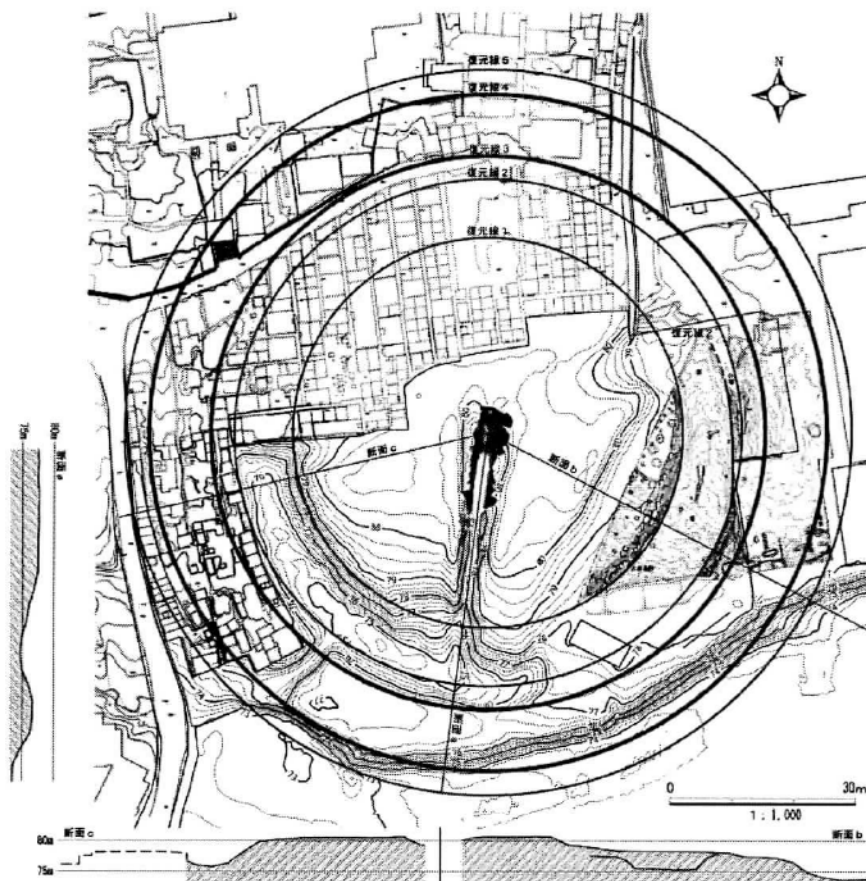


図22 塚穴山古墳平面・立面測量図

(『天理大学考古学・民俗学研究室紀要』19号2015から引用)

9) 周濠内と堆積層からTK47~TK209期の須恵器が出土し、石舞台古墳より築造時期が早い可能性がある。

を掘って周濠を構築したため、原地形の地山層より多少低い位置に、墳丘の1段目が位置する。

峯塚古墳：7世紀中葉
(TK217段階後半)で編年される。奈良盆地の東麓から伸びる小丘陵の南に位置する3段築盛の大型円墳である。石室は岩屋山式といわれているが、羨道の長さがやや短いことを除けば、石室の外観は非常に似ている。墳丘の直径35.5m(2段28.4m、3段17.6m)、高さ約5mであり、墳丘の各段には全体的に敷石があり、特に3段目の

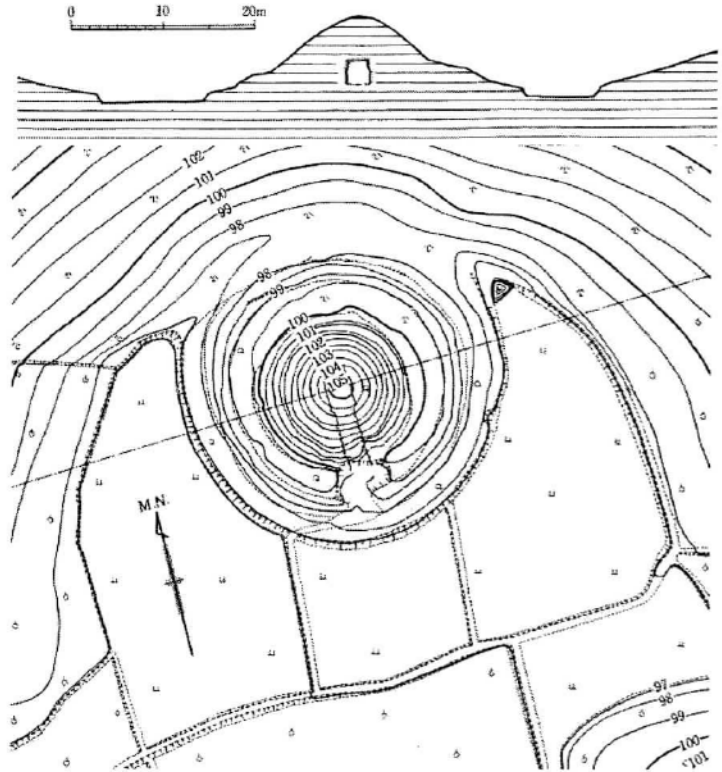


図23 峯塚古墳平面・立面測量図

(『杣之内古墳群の研究』2014から編集引用)

敷石は切石を用いている。円墳の外形は円錐形に似ており、白石太一郎は円墳の最後の形態と評価する。石室の全長約11.11m、玄室長約4.46m、幅約2.58～2.6m、高さ約2.4m、羨道(両袖式)の長さ約6.65m、幅約2.28m、高さ1.7mである。墳丘と石室の平面位置を見ると、墳丘の中央に玄室があり、立面位置を見ると、石室の床面は墳丘の1段目テラスに構築されている。古墳周辺の地形図を調べると、台地を整地した後に墳丘を構築している。発掘調査は行われていないが、測量調査によって、石室構築面と周辺の地山層の高さがほぼ同じレベルであることが明らかになっており、石室は地山層の上に造営されたと判断できる。

西宮古墳：奈良県平群谷の竜田川西岸の廿日山丘陵の南斜面に位置する3段築盛の大型方墳であり、TK217段階の須恵器が出土していることから、7世紀中葉後半に編年されている。墳丘の一边は35.6m、高さ約7.2m以上（推定復元約8m）、墳丘は全体的に貼石に覆われている。石室の全長約14m、玄室の長さ約3.6～3.7m、幅約1.8～1.95m、高さ約2～2.1m、羨道（両袖式）の長さ約10.1m、幅約1.7～1.8mである。この古墳の最大の特徴は墳丘の短縮斜面（2段目と3段目）と横穴式石室を計画的に配置し、段築に合わせて墳丘の貼石と石室の開口部石材の露出部分が一致するように処理されている。具体的には石室床面は1段目テラス面、羨道天井石は3段目の斜面と一致している。これは墳丘と石室の築造が最初から完璧に設計されており、精美化までも計画されていたことを意味する。墳丘と石室の平面位置を見ると、墳丘の中央に玄室があり、立面

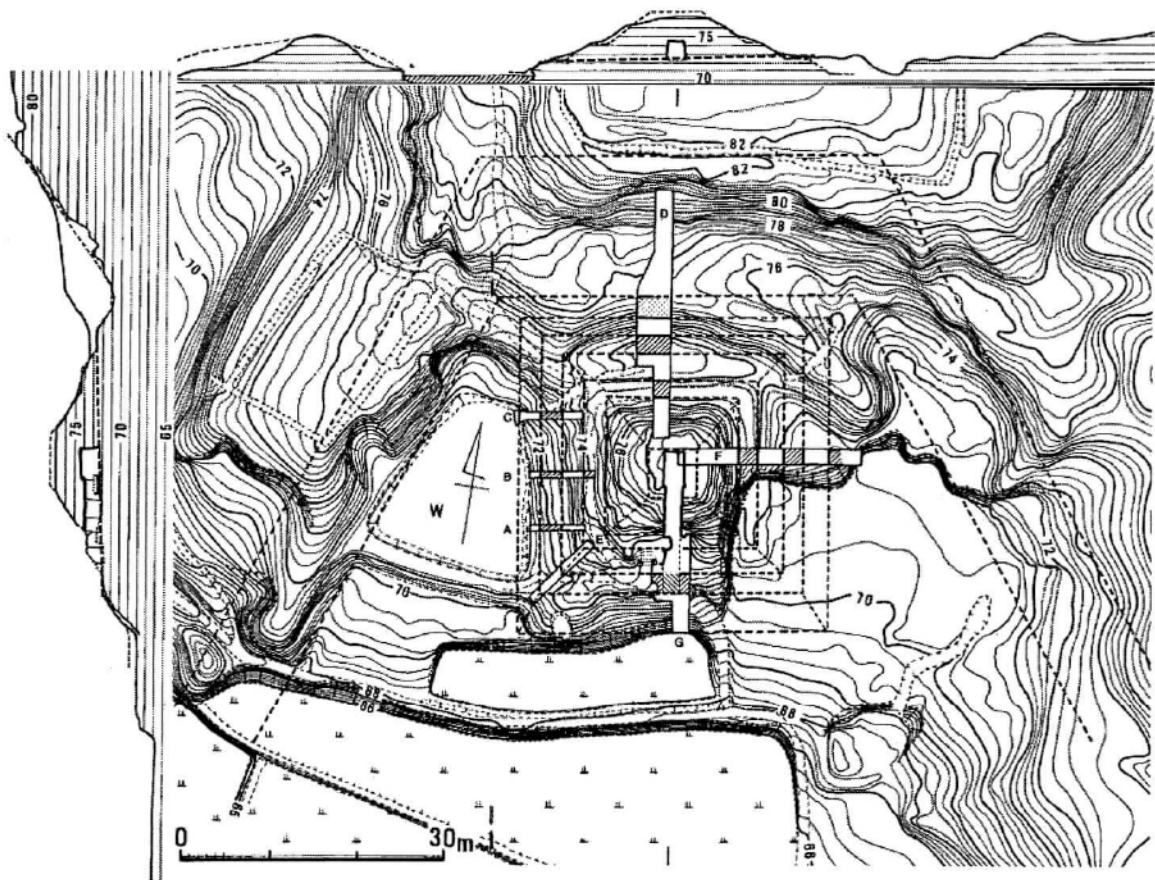


図24 西宮古墳平面・立面測量図

（『奈良県生駒郡平群町西宮古墳発掘調査概報』1995から編集引用）

位置を見ると、石室床面は墳丘の1段目テラス上に構築されている。峯塚古墳と同様、古墳周辺の地形図から石室と周辺の地形の高さを比較した結果、石室は地山層またはそれに近いレベルで造営された可能性が高いと推定される。

菖蒲池古墳：奈良県橿原市の南東部、明日香村との境界付近に位置している。被葬者は当時の王族または蘇我氏の墓と推定される。下段は一辺約30m、高さ約3.2m、上段は一辺約18m、高さ4.3mの2段築盛の大型方墳である。復元推定石室の全長約20m、玄室の長さ約7.2m、幅約2.5m、高さ約3.5m、羨道（両袖式）のほとんどが埋没しているので不明であるが、長さは約12.8mと推定される。墳丘の下段は版築が認められており、墳丘の上段の一部では敷石、墳頂部には磚が使用された可能性がある。墳丘下段の版築から飛鳥Ⅰ～Ⅱ以降に編年される須恵器が出土していることから、7世紀中葉後半に造営されたと考えられる。墳丘と石室の平面位置を見ると、墳丘の中央に玄室があり、立面位置を見ると、標高約118mから墳丘の基底部と石室の床面が一致しているこ

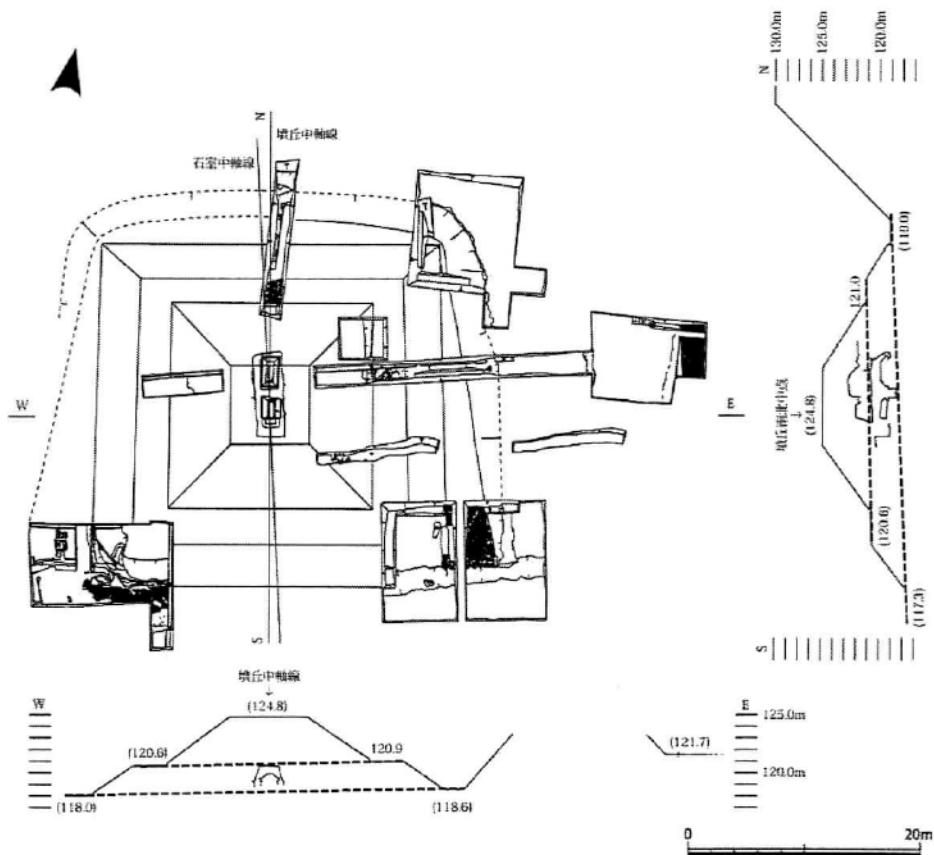


図 25 菖蒲池古墳平面・立面測量図（『菖蒲池古墳』2015から編集引用）

とが確認できる。

以上、7世紀前半の石舞台古墳と塚穴山古墳、7世紀中葉の峯塚古墳、西宮古墳を対象に検討を行った。7世紀前半における最大の特徴としては、石室の規模と石材の大きさが最大化する点があげられる。しかし、墳丘の大きさは前時期とそれほど変わらず、古墳の造営において墳丘中心（外形）から石室中心（内部）へと完全に転換したことが確認できた。そして、7世紀中葉になると、今まで大型化し続けていた墳丘と石室が逆に縮小しはじめる。墳丘は30～35mほどであり、7世紀前半に比べて20～25mほど小さくなり、石室も長さ・幅・高さが減る反面、石材は切石のように加工度が大幅に高まる。墳丘と石室の平面位置はすべて墳丘の中央に玄室が位置し、立面位置は石室の位置が墳丘の基底部から再び1段目テラスに構築される傾向が観察される。しかし、周辺地形まで考慮して調べると、石室の底面は、原地形の基底部である地山層とほぼ同じ高さに位置しているため、6世紀中葉から地山層に石室を築造する現象は、ずっと続いているといえる。そして7世紀中葉の古墳は墳丘と石室の細部構造から構造的安定性を超え、精美化まで確認されているため、古墳を築造する際、最初から完璧に計画されていたことが分かる。

6世紀初頭から7世紀中葉にかけて、墳丘と石室の平面・立面との位置関係、墳丘（規模・墳形）と石室（規模と石材）、周辺施設（埴輪）の変化について概観した。まず、墳丘と石室の平面はおおむね墳丘の中心に玄室が位置する比率が高いことが確認された。本稿で玄室の奥壁が中央に位置することが確認された古墳として、東乗鞍古墳と牧野古墳がある。しかし、全体的に奥壁が墳丘中央に位置する古墳の事例は畿内地域で少なく、また墳丘の中央が玄室の中央または奥壁に位置する時の有意義な違いは確認できなかった。韓国では新羅と伽耶の竪穴式石槨において墳丘と石槨の平面位置の関係に着目した研究があるが、それぞれの古墳の築造事情により平面位置が一致していないため、有意義な結果は見つかっていない。

一方、立面位置は有意義な結果となった。6世紀前半までは墳丘の上段に石室を築

造したことが確認されが、6世紀中葉からは石室が墳丘の基底面または1段目テラスに位置する二つの形態が併存している。1段目テラスに石室が位置する場合、墳丘の周辺を掘って墳丘の1段目を造営したため、事実上、すべて石室は原地形の基底面（地山層）に位置していることになる。二つの形態は7世紀中葉まで続く。ただし、前時期と異なる点は墳丘の斜面の角度まで考慮し、石材を加工して石室を造営したため、最初から精美化まで考慮し、完全な計画の下で古墳を造営したことが確認できる。次は墳丘（規模と墳形）と石室（規模と石材）について見ていく。6世紀初頭以降から7世紀中葉まで、墳丘の規模は引き続き小さくなり、墳形は6世紀後半を最後に前方後円墳が終了し、方墳と円墳が主要墳形に再編される。石室の規模と石材は6世紀初頭～前半にかけて次第に大型化し、7世紀前半でピークに達した後、7世紀半ばでは再び縮小する。石材は6世紀末を起点として加工が行われるようになるが、7世紀中葉になると、切石加工のように加工度が高くなる。周辺施設の変化については、6世紀前半までの古墳では多種多様な埴輪が大量に確認される。しかし、6世紀中頃からは種類・数が減り、6世紀後半の古墳では大王墓と推定される五条野丸山古墳ですら確認されていない。上記を簡単にまとめると表7のようになる。

表7 時期別墳丘と石室の位置関係および変化様相（埴輪含む）（筆者作成）

(*青はだんだん小さくなる、下がる、無くなる傾向を意味し、赤は反対の傾向を意味する)

	墳丘と石室の立面 (墳丘基底部基準)	墳丘		石室		埴輪
		規模	墳形	規模	石材	
6C初頭～前半	高い所	■	前方 後円墳	■	■	⋮
6C中葉	基底部とほぼ同じ高さ	■	■	■	■	
6C後半						
6C末～7C初頭						
7C前半						
7C中葉						

第3節：各観点から見た横穴式石室と墳丘の相関関係

1. 死生観的観点

前方後円墳と竪穴式墓制は弥生時代後期の大型墳丘墓に起源を探ることができる。墳形と儀礼の細部的な差はあるが、岡山県倉敷市楯築墳丘墓(双方中円形、80m)、島根県出雲市西谷3号墓(四隅突出形、40×30m)、京都府京丹後市赤坂今井墳丘墓(方形、39×36m)、福井県福井市小羽山30号墳(四隅突出形、26×22m)等、諸地域で確認されている。上述した墳丘墓は、墳形と墳頂部での儀礼の内容が発掘調査によりある程度全貌が明らかになったが、特に楯築墳丘墓の事例から比較的詳細がよく確認されている。埋葬の主体部は墳頂部に位置し、その周囲には4つの柱穴が見つかったが、首長の葬儀の際に建てられた臨時の建物の痕跡と推定される。その他、楯築墳丘墓でも墳頂部の埋葬主体部の周囲に5つの巨石をはじめとし、多数の壺形土器・特殊器台・特殊壺の破片が確認されるなど、墳頂部における実際の共飲儀礼の行為が確認された。

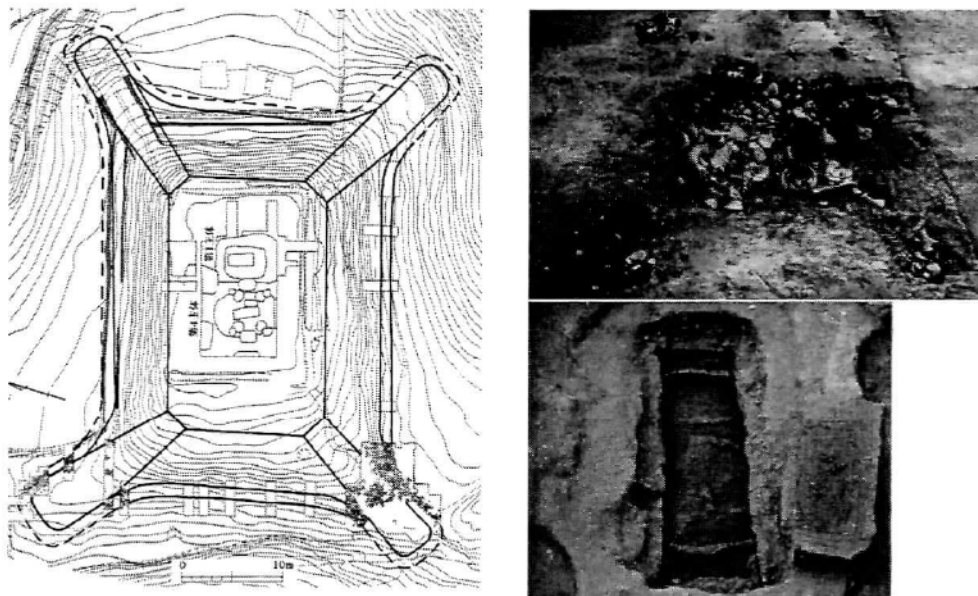
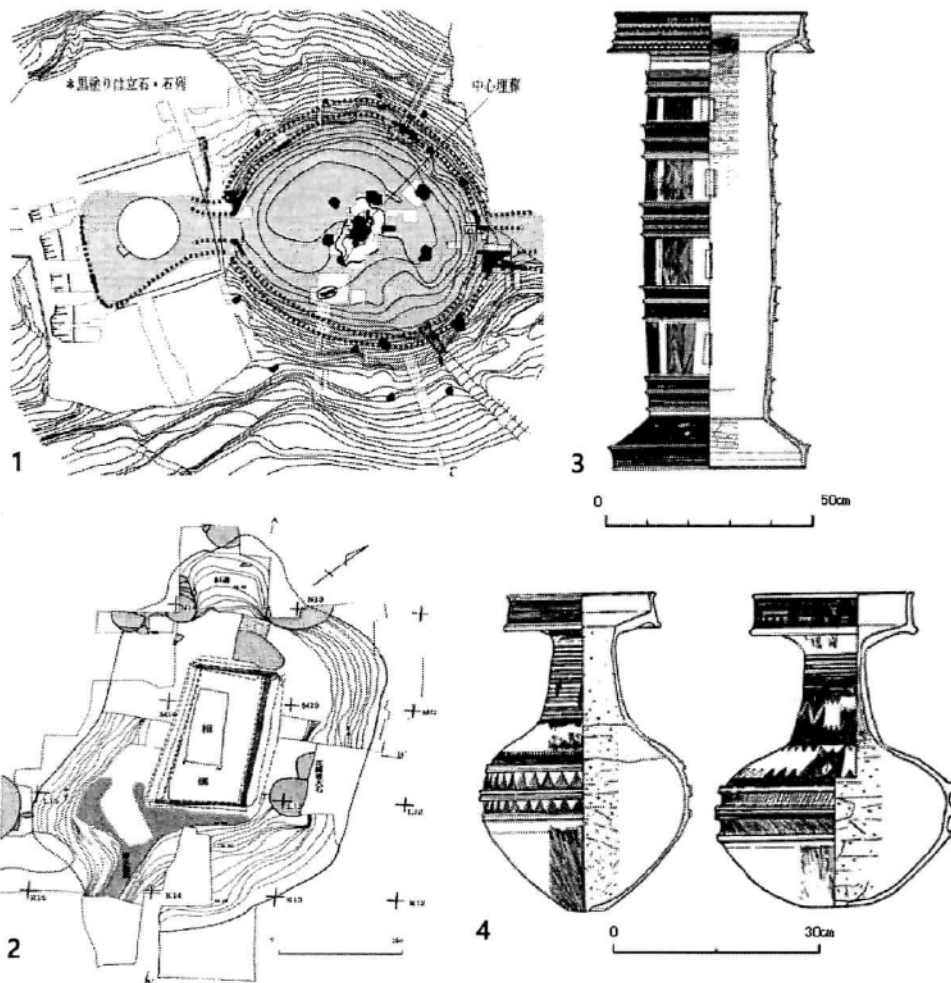


図26 西谷3号墓及び第4主体と土器出土状態

(『西谷墳墓群』2006、『西谷3号墳発掘調査報告書』2015から引用)



1 楯築墳丘墓復元図（『吉備と邪馬台国』2013から引用）

2 楯築墳丘墓の中心主体の発掘遺構図（『楯築弥生墳丘墓の研究』1992から引用） 3・4 楯築墳丘墓出土の特殊器台・特殊壺（『楯築弥生墳丘墓の研究』1992から引用）

3・4 楯築墳丘墓出土の特殊器台・特殊壺（『楯築弥生墳丘墓の研究』1992から引用）

図27 楯築墳丘墓の復元図・主体部・特殊器台・特殊壺

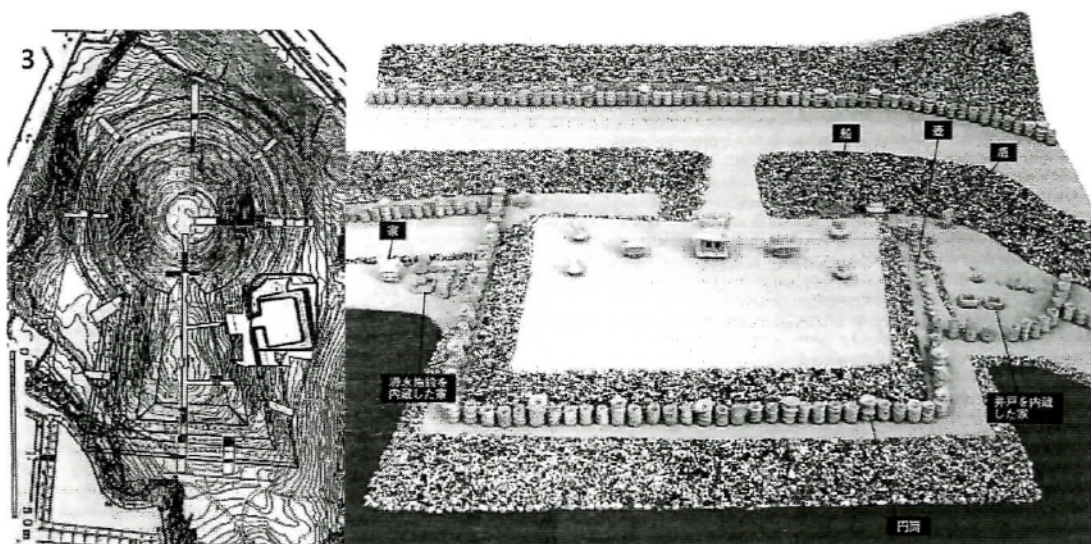
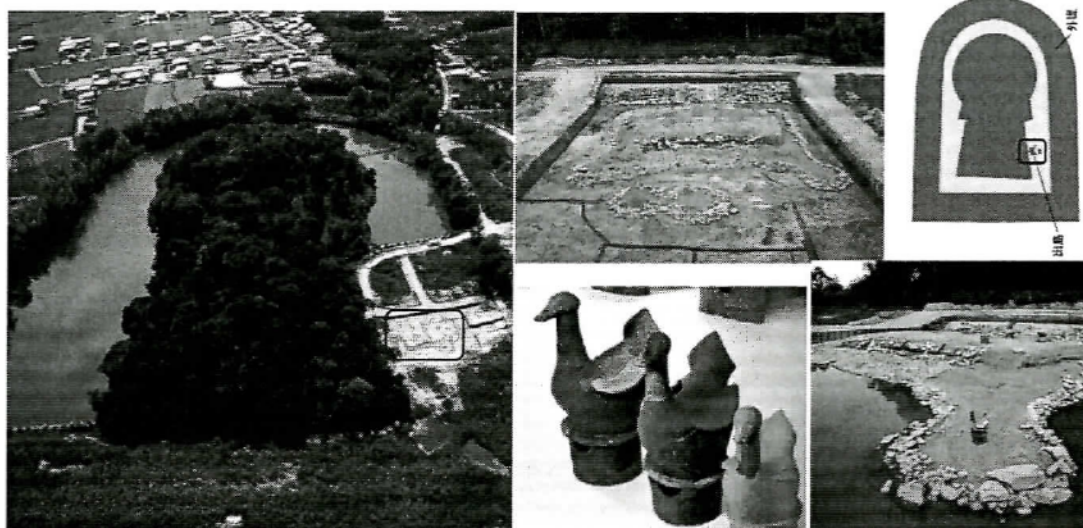
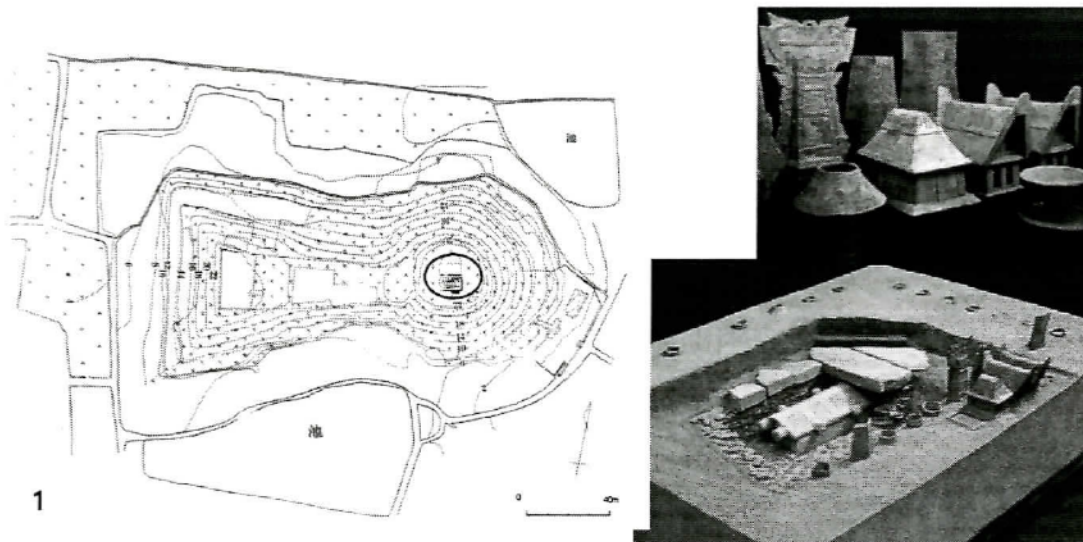
また、内容と形態では細部的な地域差があるが、上記の墳丘墓の墳頂部では共飲儀礼の痕跡が発見されており、当時の共通した現象といえる。

古墳時代になると、前時期の儀礼に変化が起きる。多数の構成員が参加した共飲儀礼は実際には行われず、特殊器台・特殊壺は円筒埴輪（朝顔形）に変化して図式化するなど、墳頂部における儀礼の様相に変化が見られる。埋葬主体部はそのまま墳頂部に位置するが、その周辺には形象埴輪（器財・家形・動物）が新たに出現する。形象埴輪は、主に前代の

靈魂を安全に守る楯形埴輪、運搬(船形)する役割を果たす器財埴輪、儀礼の間に靈魂が宿る家形埴輪、そして靈魂を案内や運搬する動物埴輪(鳥形:鶏・水鳥・鶴)等で構成されている。このほか、様々な古墳における多様な形象埴輪の組合せから当時、複数の儀礼内容の存在が想定される。その中でもヤマトタケルの白鳥伝説が最も有名である。これを簡単にまとめると、ヤマトタケルは父である天皇の命令で国外の諸地域に征伐し続けたが、最後は故郷を懐かしんで倒れ、ヤマトタケルの靈魂は白鳥になって故郷に飛んだ。そして白鳥が飛び上がって留まった所に古墳を造り、白鳥の陵と名付けたという内容である(『古事記』中巻、『日本書紀』卷七 景行天皇・成務天皇)。

白鳥伝説を通じてわかることは、当時の観念では、人が亡くなると、靈魂は古墳の中に留まらず、生きている人たちは知らない場所に旅立つと考えられていた。そして残された人々が亡者のための儀礼を行う時、どこかに旅立った靈魂は、鳥の案内によって儀礼場所に戻ると信じられていた。そこで、儀礼場所である埴頂部では、亡者が還った際、休める空間である家形埴輪と靈魂の案内・運搬の媒介である鳥形埴輪を樹立しており、これは埴輪を通じて儀礼の過程を再現したといえる。

整理すると、弥生時代後期から古墳時代中期までの時期や地域ごとに埋葬主体部の形態と儀礼は性格や内容に変化があったが、埴頂部での埋葬と儀礼は続いた。一方、古墳時代後期においては、埴頂部の共飲儀礼は実際には行われなかったが、その伝統は円筒埴輪によって形象化された状態になっていたと考えられる。また、様々な儀礼の内容を見ると、中国の葬送儀礼など、当時の東アジア情勢に基づく儀礼の内容も含まれているが、日本独自の古墳体制の展開が認められるだけに、まだ外部世界からそれほど大きな影響を受けることなく、徐々に変化・発展していったと考えられる。



1室宮山古墳図面・石室と埴輪配列の模型・形象埴輪群（『国宝武人ハニワ、群馬造りへ帰る』2009から編集引用）2巢山古墳全景・出島状施設と細部・水鳥埴輪・樟造り出馬（『国宝武人ハニワ、群馬へ帰る』2009から編集引用）3宝塚1号墳図面・造り出馬へ帰る（『国史跡松阪宝塚1号墳調査概報』2001、『国宝武人ハニワ、群馬へ帰る』2009から編集引用）

図28 古墳時代中期まで確認される様々な形態と内容の儀礼行為

一方、5世紀中葉から畿内地域で横穴式石室が出現し、6世紀を前後して首長層の前方後円墳にも横穴式石室が導入される。第2章で述べたように、中国の前漢代に横穴式墓制が出現し、横穴式石室は楽浪郡と百済を経て単室の構造を持つ石室として整備され、それが畿内地域に入る。

日本の前方後円墳と埋葬主体部（縦穴式石室）の形態、そして埋葬主体部があった墳頂部で行われた儀礼はお互いに影響し合い、時代にふさわしい形態に変化してきた。それと同様に百済でも横穴式石室や墳丘、周辺で行われていた儀礼はその時代にふさわしい形態であったであろう。ところが、それがそのまま古墳時代の畿内地域という百済とは全く異なる環境に取り入れられたのである。

縦穴系と横穴系は、ともに死者を埋葬するという基本観念は同じであるが、横穴系は追葬を前提に造営された墓制である。墳頂部において死者を垂直に安置した縦穴系とは異なり、横穴系は地下に石室を造営し、入口と羨道を通じて複数の死者を埋葬する構造であるため、両者の埋葬原理と造営原理は大きく異なる。

そのため死生観に関する説話も前時期と異なるが、横穴式石室にまつわる代表的な話として黄泉国訪問がある¹⁰⁾。イザナギとイザナミは兄妹でありながら夫婦神として様々な神々を生み出した。しかし火の神を生んでいる途中、イザナミが死亡して黄泉国へ行くことになり二神は別れる。黄泉国にいるイザナミを連れてくるために、イザナギは地下に降りてイザナミに会ったが、地上に着くまで振り向かないという約束を破って地上に帰る途中イザナミを見上げる。そして、すでに腐敗した彼

10) 土生田純之によると、黄泉訪問以外の物語として、喪屋説・山中他界説・海上他界説(一部地域)が認められており、当時はお互いに矛盾する様々な黄泉国観が存在する理由は、現在も同様として残された人々が各自で考える表現方式(仏教・神道・キリスト教)で、死者を記念するので、色んな他界観が共存しているのが当然だと見た。

女を見て怖くなったイザナギは逃げることになり、それを恨んだイザナミは、イザナギを殺そうとして追いかけたが、結局地上とあの世の境界を、イザナギが大きな石で塞いでしまい、二神は完全に別れることになる¹¹⁾（『古事記』上巻、『日本書紀』巻一 神代（上））。

上記の物語は土生田純之をはじめとする学者たちによって、とざし戸は玄室、黄泉比良坂は羨道、千引の石は閉塞石であり、石室内に副葬された土器の中から発見される果物の種、魚の骨などから死者に対する供献行為は黄泉戸喫に対応されるなど、物語での黄泉国の全般的な構造が横穴式石室の構造と副葬の様相を呈していることが既に指摘されている。いわゆる黄泉国は横穴式石室そのものを意味する。

前時期における代表的な儀礼に係わる説話である白鳥伝説と黄泉国訪問の最大の違いは、人が死亡すると、霊魂は残された人々は知る由もない場所へ旅立つ。その後、鳥や船などによって引き渡され、古墳に戻り、儀礼が行われる間、墳頂部に居座ると考えられていたが、これはまだ明らかに死者の世界観が確立していないことを示している。これに対して、古墳時代後期には人は死ねば地下世界の黄泉国に行く信じられていた。また、死者は一度黄泉国に渡ると、永遠に滞在すると認識していたため、死者が黄泉国でくつろげるように、横穴式石室を家のような形、または黄泉国を想像しながら造営した。一方、横穴式石室は中国で出現した墓制であるため黄泉国の死生観も中国からの影響を受けており、これは当時の中国を中心とした東アジアの世界観に本格的に日本が組み込まれた証拠として挙げられる。

11) イザナギの黄泉国訪問の物語はヤマトタケルの白鳥伝説より以前の時代と『記紀』に記されているが、実際は後代の話として、後に加工された物語であることがわかる。しかし詳しい話は本稿の論旨から外れるのでここでは取り上げない。

再び本論に戻ると、竪穴式石室と横穴式石室は時空間と変化・発展してきた期間などが全く異なるため、横穴式石室は従来の墓制であった前方後円墳や竪穴式石室などと、すべての部分において異なると考えられる。当時の支配層の要求により、前方後円墳に横穴式石室が造営されたが、横穴式石室をめぐる様々な背景が存在するため、横穴式石室の外形のみ物理的に導入することはできず、当然それに関連する埋葬原理と造営原理も同時に導入されることになる。したがって、横穴式石室への交替は、以前の死生観と新しい死生観が出会った後、影響を与え合い、次第に新しい死生観に取ってかわっていくことを意味する。以下では、前方後円墳に畿内型石室の導入が確認された6世紀初頭から横穴式石室の造営が終了する7世紀中葉までの古墳を対象にして、死生観の変遷過程と関係があると考えられる部分について検討する。一方、7世紀後半の墓制は横口式石槨が主流であるため、本章では検討しないが、論旨の展開と関連する部分については触れることにする¹²⁾。

6世紀初頭～前半：大王をはじめとする首長層の前方後円墳の埋葬主体部が竪穴式石室から横穴式石室に交替する。埋葬主体部は、墳丘の上端に位置するが、黄泉国訪問の説話からも分かるように、もともと黄泉国は地下に存在し、横穴式石室は黄泉国を表現したものであるため、横穴式石室は地上式でなく地下式に造営されるべきである。それにもかかわらず、地上式、それも墳丘の上段に造営されたということは、横穴式石室の造営観念および死生観を正しく理解していなかった可能性、または既存の死生観に固執し、黄泉国の死生観を受け入れることができなかった可能性がある。

12) 7世紀後半の古墳に関する説明は第6章で述べた。

表 8 埴輪様式の変遷と設置場所

(『もっと知りたいはにわの世界』2009から編集引用)

		第1様式	第2様式	第3様式	第4様式
3世紀					
4世紀					
5世紀					
6世紀					
特徴	種類	円筒埴輪、朝顔形埴輪	円筒埴輪、家形埴輪、器財埴輪、鶏形埴輪	円筒埴輪、家形埴輪、器財埴輪、水鳥形埴輪、罌形埴輪	円筒埴輪、器財埴輪、動物埴輪、人物埴輪
	設置場所	墳丘上	墳丘上、墳頂部	墳丘上、墳頂部、造り出し	墳丘上、墳頂部、外堤
	内容	死者への供献場の神聖化	埋葬部の荘厳 死後の居館表現	外界と死者をつなぐ彼岸の居館表現	豪族が生前に行った特別な儀礼・催事群と保有した財物群の誇示

表9 機種別埴輪年表（『もっと知りたいはにわの世界』2009から修正引用）

	3世紀	4世紀	5世紀	6世紀
円筒埴輪 (特殊器台)		■		
家形埴輪		■		
器財埴輪 (盾・蓋・釵)		■		
器財埴輪 (大刀・弓・帽子)			■	
器財埴輪(甲冑)			■	
船			■	
鶏		■		
水鳥			■	
多様な人物埴輪			■	
多様な動物埴輪 (馬)			■	

古墳における前時代の死生観がよく表れている部分は、埴輪の構成と樹立位置である。墳丘や墳丘の周囲に、様々な形態と内容から構成される埴輪が樹立されているが、弥生時代からの影響が残る円筒埴輪、古墳時代前期から確認される家形埴輪と鳥形埴輪（鳥形木製品）、各種の人物埴輪と動物埴輪、本稿では取り上げなかったが、導水祭祀施設関連の埴輪など、様々な物語の構造を持つ前時代の死生観と横穴式石室の黄泉国思想が共存する。

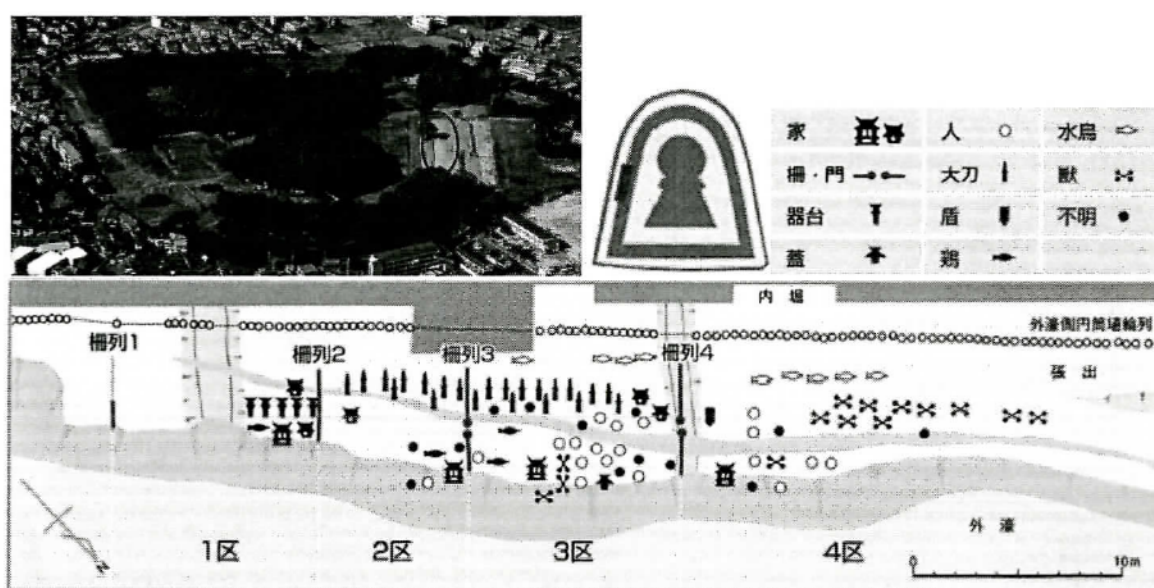


図 29 今城塚古墳の内堤埴輪祭祀場配置図と構成内容

（『国宝武人ハニワ、群馬へ帰る』2009から編集引用）

特に注目されるのは、今城塚古墳の祭祀場と埴輪の構成にみられる人物埴輪である。人物埴輪は、5世紀中葉の大仙陵（仁徳天皇陵推定）の外堤で初めて確認されている。畿内地域における横穴式石室の出現も5世紀中葉からである。もちろん、大仙陵で横穴式石室が確認されたわけではないので推定に過ぎないが、同時期に出現する人物埴輪と横穴式石室は儀礼の内容変化において何らかの関連があるのではないだろうか。とにかく人物埴輪が出現することで、儀礼場所の中心は墳丘の周辺に変化

していくようである。当然ながら、儀礼は最も重要と思われる場所で行われるものであるため、これまで墳頂部で行われてきた儀礼の構成や内容から大きな変化が起きていることは確かである。但し、それが横穴式石室の導入と直接関連があるかどうかは確認されておらず、今後の資料の増加を期待するしかない。

整理すると、前方後円墳に横穴式石室が導入されたが、造営位置は本来の造営原理にそぐわない墳丘の上段に位置する。また、古墳で確認される全体的な様相から、前時期の様々な死生観の痕跡がはっきり存在し、新しい死生観は石室以外の空間では見られないため、まだ影響力の弱い段階と判断される。

6世紀中葉～後半：6世紀中葉になると、横穴式石室が墳丘の下段または基底部に造営され始め、石室の規模は6世紀前半より大きくなる。また、埴輪の樹立数・種類が急激に減り、全く樹立しない事例も確認されている。6世紀後半では、6世紀中葉よりも墳丘の規模は小さくなる傾向にあり、大王墓として知られる五条野丸山古墳にも埴輪は見られない。一方、横穴式石室の規模はより大きくなり、築造位置は墳丘の基底部に位置する頻度が優勢になるなど、古墳の影響力が横穴式石室に徐々に移動していることが分かる。

特に墳丘の規模は横穴式石室の出現以前から縮小傾向が続いており、以前から中心儀礼は造出部や墳丘周辺で行われていた可能性がある。実際の事例（大仙陵、保渡田八幡塚古墳）も確認されており、儀礼場所が変わったことが分かる。結局、墳頂部では実際には儀礼行為が行われていなかったため、墳丘を大きく築造する必要性がなくなり、伝統的な墳丘の意味がなくなる結果につながったものと想定される。

整理すると、墳丘の規模は小さくなり、埴輪の樹立が終了する。石室

は巨大化し、基底部に造営する比率が高くなる。つまり、古墳における横穴式石室の重要性が高まり、本来の造営目的に合わせて変化していく。これは6世紀中葉～後半になり、黄泉国に代表される新しい死生観が主流になっていく過程を示しているといえる。

6世紀末～7世紀中葉：前方後円墳の造営が終了し、墳形は円墳と方墳に再編されることにより墳丘の規模が急激に縮小し、7世紀中葉まで続く。一方、石室の規模は7世紀前半に頂点に達するが、7世紀中葉になると再び規模が縮小しており、墳丘と石室の間に差が見られる。すなわち、7世紀前半までは、墳丘や石室に新たな変化が確認されるよりも、黄泉国の死生観がより強くなる傾向を示していると考えられる。したがって、6世紀末～7世紀初頭には前方後円墳や白鳥伝説など、伝統的な死生観の痕跡と見られる要素がすべて消えて、7世紀前半には黄泉国の死生観が定着しているように見られる。そして、7世紀中葉は墳丘と石室がいずれも縮小したが、西宮古墳からも確認できるように、墳丘と石室の精美化が進み、構造的にも安定性が高まる。白石太一郎が指摘するように、この時期の古墳は横穴式石室の完成形であり、黄泉国死生観の完成とも見ることができる。一方、6世紀末に飛鳥寺が造営され、正式に仏教が受容される。仏教の死生観を簡単に述べると、すべての人間は因果法則によって輪廻を繰り返すが、成仏すると輪廻から脱して阿弥陀仏のある極楽世界で過ごすことになる。つまり、輪廻を続けるために残された肉体は大きな意味を持たず、古墳を造営する必要性は低くなり、古墳の規模（墳丘と石室）は縮小される。

仏教的な様相は7世紀中葉に墳丘においてはじめて確認される。具体的には、段ノ塚古墳(7世紀中葉)・牽牛子塚古墳(7世紀中葉後期)・御廟野古墳(7世紀後半)・野口王墓(7世紀末)・中尾山古墳(8世紀初頭)等があげ

られる。これらはすべて大王墓に分類され、八角形の墳形を持つ。八角墳は古代中国の政治思想（天下八方）または仏教の影響を受けて成立したという見解に分かれているが、いずれも大王の権威と特別さを示すために築造されたのは間違いない。後述するが、八角墳の出現当初は仏教の影響がより強かったと思われる。また、時間が経つにつれ墳形だけでなく、埋葬主体部にも仏教的影響が現れているが、野口王墓と中尾山古墳では発掘調査と文献記録などにより、遺体を火葬して納骨していたことが分かる骨壺が確認された（野口王墓では棺が入る空間に銀製骨壺があり、後代に盗掘され遺骨が捨てられた状況が『明月記』に記録されている。また、中尾山古墳の横口式石槨の内部は初めから骨壺を安置する目的の大きさに構築されている）。

南河内を中心に、主に渡来人が集団で居住していた地域で、横穴式石室の形態が縮小したり、極端に小さくなったりする形態の横口式石槨が出現する。出現背景には内部説と外部説があるが、外部説は渡来人、特に百済系渡来人たちの可能性が想定される。時期別の造営集団を見ると、7世紀前半は主に渡来人集団とその周辺地域を中心に横口式石槨の造営が確認され、7世紀後半頃から在地支配層の主流墓制として造営される。7世紀代は仏教の影響力が強くなっていった時期であり、それまで古墳と死生観の間に相関関係があったことを考えると、横口式石槨と仏教との関連性も想定されるが、これまでの研究では関連性については確認されていない。しかし、ほぼ同時期の6世紀末に百済で仏教寺院が建立されており、横口式石槨が出現する外部背景説の一つとして百済との関連が指摘されていることから、日本に横口式石槨が出現する以前の百済の状況を簡単に見ていく。

宋山里古墳群の武寧王陵と宋山里6号墳(6世紀前半)から陵山里古墳群

の中下塚(6世紀中葉)を経て確立された陵山里型石室の初期形態と、陵山里寺址の昌王銘石造舍利龕の形態はすべてアーチ形の構造を持っており、当時の百済王陵の石室構造を模倣して石造舍利龕を作ったものと見る見解がある(李炳鎬2013)。中下塚の被葬者と推定される人物は聖王であり、轉輪聖王を自称するほど仏教との関係が深く、彼の息子である昌王(威徳王)は父のために陵山里古墳群の隣に王室寺院である陵寺を建立した。寺院の最も中心は塔だが、塔の最も核心は舍利龕である。百済の舍利龕は中国と形態が異なる独創的なアーチ形で作られ、舍利龕と石室の形態は王権強化に仏教が利用・結合している様子がよく表れている¹³⁾。物理的な結合に近いが、とにかく仏教のイメージを内包するようになった初期陵山里形石室は、間もなく断面六角形や四角形の典型的な形態に変化し、7世紀を前後して石室の規模が小さくなり、夫婦合葬から単葬の形態に変化する(日本での横口式石槨)。そして渡来人たちを通じて、単葬化した陵山里型石室の築造観念が日本に伝わったものとみられ、以後の日本での状況は上述の通りである。

6世紀末に出現した仏教は7世紀中葉～7世紀後半になると、墳形は八角墳(大王墓)、埋葬主体部は横口式石槨、火葬などの葬法も出現し、影響力はさらに大きくなる。ところで、なぜ7世紀前～中葉の古墳には仏教の影響がなかったのだろうか。それは横穴式石室が導入された後、首長層に受容されるまでに時間(TK23～MT15)がかかったように、仏教も導入されてから支配層に受容されるまでにかかる時間を考慮すべきであると考えられる。また、前時期とは異なり、寺院という別の空間では

13) 7世紀前半後期(639年)の弥勒寺址石塔の1層目の舍利深柱石につながる通路の構造と陵山里形石室の構造(断面六角形)が類似しているのも同様の事例と考えられる。

とんどの儀礼が行われるため、空間的にも古墳と隔絶されているなど、仏教の影響が古墳に現れるのに時間がかかった可能性もある。

以上、死生観的観点について見てきた。6世紀前後に前方後円墳に横穴式石室が造営され、埋葬主体部には黄泉国の死生観が導入される。しかし、墳丘の墳頂部や周辺には、弥生時代の共飲儀礼の痕跡である円筒埴輪や古墳時代の前期と中葉に代表的なヤマトタケルの白鳥伝説を示す形象埴輪が併存する。横穴式石室が安定的に造営（下段に位置）されるとともに巨大化し、影響力が大きくなる。一方で墳丘の影響力が減少するにつれ、墳丘に残っていた従来の死生観の痕跡も薄くなる。6世紀末～7世紀初頭に前方後円墳の造営が終了したことにより、黄泉国の死生観だけが残る。一方、同時期に仏教が導入されるにつれ、さらに影響力が拡大するが、儀礼および思想的統合の機能を果たしていた死生観、つまり宗教的な役割は次第に仏教に移動し、儀礼も古墳から離れ、別途の空間である寺院で行われるようになる。その結果、横穴式石室を含む古墳自体の重要性は徐々に減少していき、7世紀中葉以降は八角墳と横穴式石槨等が出現し、黄泉国の死生観も終焉を告げ、仏教の死生観に取って代わることとなる。

2. 心性面的観点

心性面的観点は研究史で明らかにしたように土生田純之によって初めて示された観点である。氏は政治的行為による結果およびそれに伴う精神的な部分を心性と想定し、それが象徴物である古墳として表現されることに注目した。つまり、古墳は畿内地域を中心とした広域首長連合の政治と心性の両面にわたる象徴物であり、古墳時代の全時期にわたって社会全体に多様な変化があったが、政治的・精神的象徴物である古墳に

は大きな変化はなかったとした。しかし、上記の死生観的観で検討したように、新しい死生観が出現するたびに一挙に変わることはないが、古墳の各部分は絶えず変化に対応する様相が確認されるため、新しい死生観が導入された当時の古墳と安定化した後の古墳を比較すると、全体的な構造が大きく変わっていることはすでに確認している。

また、土生田純之は、心性を古墳造営の要素として捉え、古墳規模の格差は政治的産物と理解することに同意したが、墳形の差は心性の部分も含めて評価すべきであるとした。つまり、土生田純之が設定した心性の概念には精神的な面(=死生観)が相当部分含まれており、当時の前方後円墳体制という古墳造営システムに合意し、それに合わせていく人々の造墓行為を加えたことを心性の範疇であると判断した。筆者も上記の見解に同意する。ただし、主に古墳の墳形や規模だけを重点的に説明しているため、心性の本来の意味より縮小させ、心性の概念と適用範囲を死生観に限定している点が不十分である。

心性は時代を問わず 死生観だけでなく、埋葬と死者をめぐってそれと直接・間接的に関連した人々が影響を及ぼしたすべての行為が含まれる。そのため、古墳から確認される全体的な構造と、それに関連する儀礼の型式や内容など、古墳を構成するすべてのことがそれぞれ意味を持つ。また、同じ時空間と状況に置かれていても、それに反応する人々は各自の方式で対応するため、条件がすべて同一だとしても、それぞれの表現方式と対応によって、古墳ごとに偏差が生じることになる。

特に、古墳時代の前方後円墳では墳丘(墳頂部・墳丘上)または墳丘周辺(造出部・内外堤)で様々な内容の儀礼が行われ、儀礼内容は今城塚古墳など、いくつかの古墳において様々な形象埴輪によく表現されている。このように前方後円墳という特定の構造物に墓制と儀礼が共存する現象

は、日本の古墳時代の特徴であり、時期的な変遷が比較的よく確認できる。

古墳時代後期の6世紀に入ると、日本では前方後円墳の埋葬主体部が横穴式石室に取って代わられる。上述したように、従来とは異なる新しい墓制が出現するということは、単なる外形の変化ではなく、死生観をはじめとする儀礼の内容と型式が以前とは異なることを意味する。ところが、埋葬主体部を除く古墳全体では、依然として前時期の儀礼に関連するものが変形して消えずに残存しているが、これには二つの可能性が想定される。

まず、横穴式石室の埋葬原理と造営原理が完璧に習得されていない状態で築造上の様々な制約条件により、外形だけを模倣して受容された場合である。横穴式石室と竪穴式石室は埋葬原理と造営原理が異なるため、儀礼的な部分でも異なる。したがって、埋葬と関連する儀礼もすべて古墳で行われるという特徴を持つ前方後円墳では、古墳に関連する構造・施設物などの一つ一つがそれぞれの意味を持ち、埋葬主体部の墓制が横穴式石室に取って代わられた以上、古墳全体の構造にも変化が起きるのは当然であり、新しい文物の導入過程で発生した時間差は心性の受動的な作用と見ることができる。

一方、心性が能動的に作用した状況も確認できる。当然のことながら、ある社会で自意または他意によって新しい文物が導入される時、それは原地域に存在していた形態と完璧に同じ形態で再現されることも再現することもできない。なぜなら、原地域の環境をはじめ、社会、政治、経済、文化、伝統、歴史などが結びつき、その地域において当時の構成員たちにふさわしい形態で存在していたからである。もちろん導入当時、最も重要あるいは再現可能な部分は可能な限り反映するが、上記の諸条

件を100%再現することができないのなら、それを受け入れる側で妥協すること、それを在地化という。そして時間が経つにつれ、徐々にその社会にふさわしい形態に変わっていく。また、導入当時は理解の不足から省略し反映されなかった部分も、後に理解度が高まり反映されるが、再び否定されて消えることもある。このように新しい文物を受け入れる過程で現れる古墳の様々な形態は、墓制と儀礼の時間差、そして在地化をもとに心性面の観点から観察することが可能であると考えられる。

墓制が儀礼より早く定着する現象(時間差)と在地化について、時空間の差があるということは最近の韓国の例でも知られている。韓国は朝鮮時代から儒教的な影響が強く続いているため、火葬率は1993年には19.1%に過ぎなかったが、政府の火葬推奨政策と人々の認識の転換などにより、2005年に火葬と埋葬の割合が逆転した後、2018年には86.8%、2020年には88.4%が火葬を選択しており¹⁴⁾、毎年、増加傾向を示している。人間の一代をおおむね30年とすると、わずか1世代を過ぎる前に、土葬から火葬に主流墓制が急激に変化したのである。

一方、儀礼は遅いが多様に変化する様相を呈している。統計によると¹⁵⁾、2014年段階で節句に先祖に祭祀を行う際、朝鮮時代の儒教式儀礼で行われた比率は71%、他の宗教(キリスト教・仏教・他宗教)の方式で行われた比率は14%、儀礼を行わない比率は15%である。宗教によって違いはあるものの、節句という伝統に基づいて儀礼を行った割合が85%を占める。上記の結果から分かることは、墓制は様々な条件によって早い変化が観察される反面、儀礼は変化の速度が非常に遅く、原形からの変

14) 大韓民国保健福祉部 2020年高齢者支援と火葬統計

15) 「韓国人の正月風景」韓国ギャロップ調査研究所 20140128 統計調査

化の幅は大きくはないが、細部的な様相（内容）が多様化しているという点である¹⁶⁾。

二番目の統計で興味深いのは、儀礼の当事者である故人より儀礼を主導する人々が望む方式で意識的であれ無意識的であれ、様々な内容に分化・共存することである。これは日本の古墳時代にも白鳥伝説と黄泉国の説話が代表的であるが、その中でも様々な話（白鳥伝説（魂を運搬する媒介：鳥・水鳥・船など）と黄泉国（黄泉国の位置：地下・森・山・海））が共存しており、現在、韓国の節句に儀礼を行うという大命題の下、各自が信じている宗教ごとに型式と内容が分化しているような現象と同様であると見ることが出来る。そして、儀礼を詳細に検討した結果、本来、儀礼には全く存在しない、韓国固有の儀礼内容が含まれていることが確認され（例えば、キリスト教（ロマンカトリック）の本拠地であるヨーロッパのキリスト式の葬式には存在しない、韓国固有のキリスト式儀礼内容の煉禱がある。また、殯所の前の故人に拝むことが許されるなど、韓国でも宗教に伝統が土着化した事例として評価されている。））、依然として現代においても新しい文物が導入された後、在地化が起きている代表的な事例と言えよう。それでは次に、古墳時代後期を中心に古墳の変化過程を通じて、心性面積の観点を見てみよう¹⁷⁾。

5世紀後半になると畿内地域に初期横穴式石室が導入される。畿内地

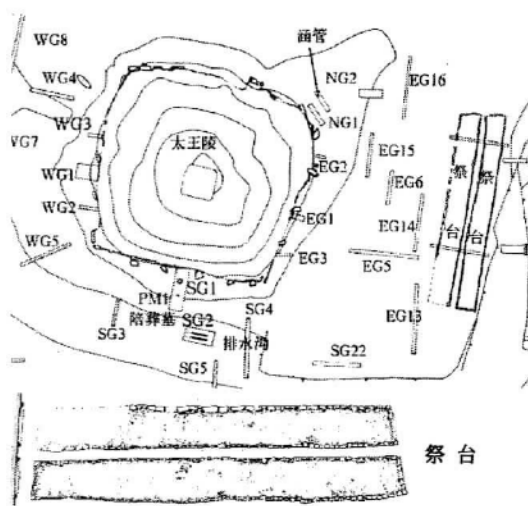
16) 韓国の現代史は世界でも類を見ないほど、わずか約40年間に最貧国から最富裕国へと急激な変化を経験した。そのため、変化に慣れながらも敏感に反応する。それにもかかわらず、儀礼と関連した部分では、少しずつ変化してはいるものの、依然として最も保守的な伝統が守られている。

17) 死生観と心性は説明過程で重なる部分が存在するため、死生観的観点から言及した内容が繰り返される部分が登場する。しかし、心性面的観点での墓制と儀礼の受容速度の違いと在地化を説明するため、やむを得ず繰り返した。

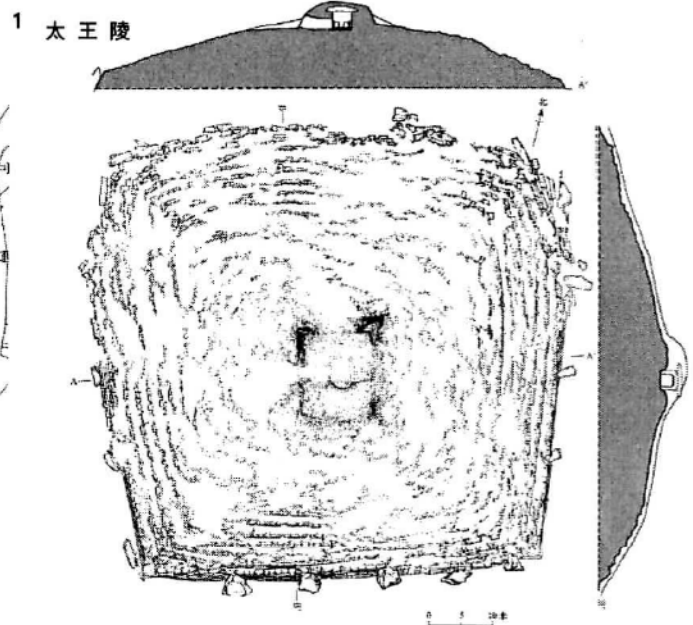
域に影響を与えた初期横穴式石室の立地は、概ね傾斜の緩やかな丘陵上に位置する。古墳は不定形の円形であり、墳丘の規模は石室の天井を軽く覆う程度である。墳丘の中央には石室の玄室があり、地山層を掘って石室を築造した。天井は穹窿形で、壁体の一部と天井が地上に露出している半地下式である。出土遺物は基本的に薄葬であるが、多くの場合、渡来系副葬品が確認される。特に、その中には儀礼の内容を推定することができるミニチュア炊飯器をはじめとする明器が含まれている。いずれも前時期には見られなかった要素であり、100%外部から導入されたものである。被葬者もほとんどが渡来人であるため、在地化される以前の状況と見られる。

6世紀に入ると、在地社会の最も上位である首長層の前方後円墳に横穴式石室(畿内型石室)が受容される。石室は墳丘の上部に位置し、墳頂部・墳丘上・墳丘周囲には埴輪が樹立される。副葬品は渡来系文物と考えられるものは確認されていない。興味深い点は、渡来系の初期古墳の要素のうち、在地社会に受容されたのは横穴式石室のみであり、これ以外の部分はすべてが竪穴式石室を築造した時とほとんど変わらない在地の伝統を維持しており、埋葬主体部のみが選別されていると考えられる。

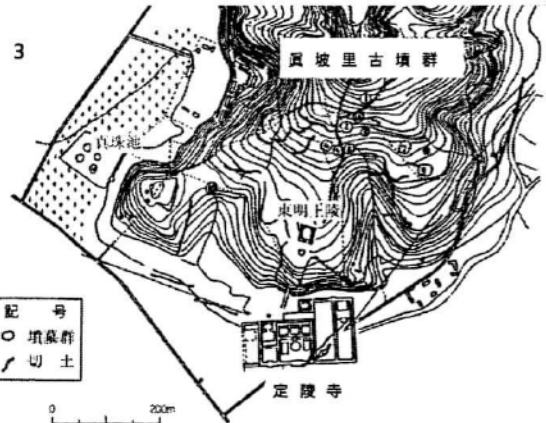
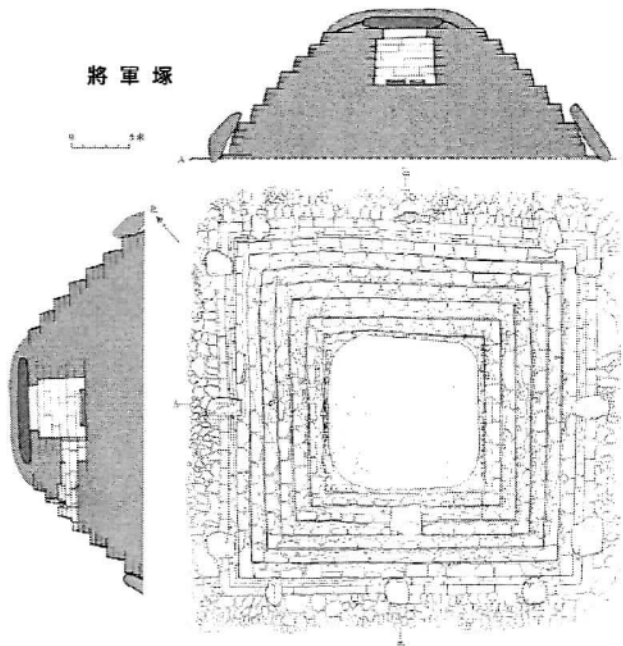
古墳から埋葬主体部の選別的受容を示す例として高句麗の太王陵・將軍塚を挙げることができる。二つの古墳は国内城時期において最終段階の王陵とされている。二つの古墳は、堅穴式墓制の積石塚であるにもかかわらず、横穴式の埋葬主体部が構築された積石塚である。また、周辺には祭祀を行った祭壇施設が依然として墓域の一部として造営されている。積石塚は堅穴式から横穴式に転換する過渡期の形態をしており、依然として前時期の儀礼行為が存在していたことを示す重要な事例といえる。また、百済でも同様の事例が確認されている。石村洞3号墳は近肖古王を埋葬したと推定される積石塚であり、その規模は高句麗の太王陵と將軍塚に匹敵する。同様に、古墳自体は堅穴式に適した積石塚であるが、埋葬主体部は堅穴式から横穴式へと変化したため、地域を問わず墓制や儀礼の変化の速度が異なることを示している。



1 集安太王陵と陵園と祭台（『集安高句麗王陵-1990～2003年集安高句麗王陵調査報』2004から引用）



2



2 集安將軍塚と陵園（『集安高句麗王陵-1990～2003年集安高句麗王陵調査報』2004から引用）

3 平壤眞坡里古墳群と定陵寺（「傳東明王陵と眞坡里古墳群の性格検討」『湖西考古学』18、2008から引用）



4 ソウル石村洞3号墳（「積石室」『相島積石塚群 謎解きの旅』2016から引用）

5 扶餘陵山里古墳群と陵寺（『扶餘陵山里古墳群の調査と記録』2017から引用）

図30 三国時代の高句麗・百済の積石塚と横穴式墓制、眞坡里古墳群と定陵寺、陵山里古墳群と陵寺

その後、高句麗は平壤に遷都したが、ここで造営された王室古墳群の真坡里古墳群は、墳丘を備えた典型的な横穴式石室として築造され、その前には定陵寺を建立した。百済も泗泚（扶余）に遷都した後、造営された陵山里古墳群の隣に陵寺を建立していることから、古墳周辺での儀礼が行われるのではなく、古墳群の隣に寺院を置き、専用の空間で行われるようになったことが分かる。

6世紀中葉～後半は、6世紀前半と同様に前方後円墳に横穴式石室が造営されつづける。しかし、墳丘の規模は6世紀前半より小さくなるのに対し、石室の規模と石材は大型化する。石室は、墳丘の下段や基底面に位置するが、地山層に造営されている。依然として墳頂部・墳丘上・墳丘周辺に埴輪が樹立されているが、その種類・数は著しく減少し（6世紀中葉）、完全に樹立が終了した事例も確認されている（6世紀後半）。注目すべき点は、横穴式石室の外形的拡大と本来の造営位置を取り戻す傾向にあるなど、全体的に石室の重要度が増していることがわかる。これに対し、在地の伝統といえる前方後円墳と埴輪が縮小または消滅するなど、重要度が低下していることが確認される。つまり、この時期になると、伝統的な儀礼が新しい墓制にふさわしい儀礼へと変化していく様相が明確に確認できる。一方、石室の規模と石材が大型化する現象は韓国・中国とは異なる様相であり、在地化が起きている現象と判断される。

全ての古墳が時間の経過に伴い、石室の比重が大きくなり、伝統的儀礼がなくなるといった一律の傾向にあるわけではない。五条野丸山古墳は、前方後円墳造営の終了直前の古墳であるにもかかわらず、墳丘の長さは約318mであり、最大の規模を誇った5世紀前半～中葉の前方後円墳に匹敵する大きさである。また、横穴式石室は、墳丘の基底面ではなく、

1段目テラスの上に設けられ、当時の造営された古墳のなかで比較的高いところに築造されている（もちろん、実際の石室の造営位置は地山層に構築されているように見える）。これは時期ごとに一律的な古墳造営が起こるのではないことを示している。被葬者の社会的地位、当時の周辺状況や認識、宗教、思想、趣向や被葬者周辺の人々との関係など、様々な部分を考慮しながら古墳を造営しなければならなかったため、様々な変数が存在したと考えられる。したがって、埴輪と葺石の使用は終了したが、逆に墳丘の規模を大型化し、1段目テラスの上、比較的高い場所に石室が造られている点は、伝統とのバランスを念頭に置き、墳丘を築造しだと考えられる。五条野丸山古墳の被葬者は、欽明天皇と推定されているだけに、伝統的な儀礼と新たな儀礼との間で、大王の立場から中立を守るべきであったのかも知れない。実際、欽明天皇の時代には、百濟からの仏教伝来と仏教の公認をめぐる論争（『日本書紀』欽明十三・十四年）、在地と渡来文物、価値観の対立が激しかったという記録がある。五条野丸山古墳は、古墳の築造に関わる人たちの心情が複雑に働いていたことを示していると考えられる。

6世紀末～7世紀前半は墳丘と墳形に大きな変化が起きる。前方後円墳の造営が終了し、円墳と方墳に再編された（6世紀末）。墳丘の規模は6世紀中葉～後半と比較して大きく縮小するのに対し、石室はさらに大型化し、古墳時代の中で最大規模を誇り（7世紀前半）、墳丘の基底部の地山層に石室を造営する頻度が高くなる。

前方後円墳造営の終了を最後に、古墳の様々な構成要素のうち、横穴式石室より前に存在したもの（墳形・埴輪・造出部など）はすべて消滅した。前時期までの古墳において重要な場所は、埋葬主体部、墳頂部・墳丘上・造出部・祭祀場などに分散していた。しかし、6世紀末～7世紀前

半からは古墳における最も重要な空間は横穴式石室に集中するが、これを反映するように、主に石室内部と前庭部で儀礼の痕跡が確認され、石室の規模から石室の重要度を推測することができる。また、墓制の変遷速度より常に遅れていた儀礼が、6世紀末を起点に墓制にふさわしい形態に変化したということは、心性的に新たな儀礼に対する抵抗感が消滅し、横穴式石室とそれに伴う儀礼が在地社会の主流として構成員に受け入れられたことを意味するものであり、いわゆる心性的パラダイムの転換といえる。

一方、墓制や儀礼の合致の側面以外にも、在地化の側面からも変化が確認できる。前方後円墳に横穴式石室が導入されてから約1世紀にわたり、最初の形態から絶えず変化する過程で、韓国と中国とは異なる形態である畿内型石室が出現し、変化していくことは墓制が当該社会に相応しい形態に在地化したものと考えられる。そして、儀礼も在地の状況に合わせて変化する。実際、畿内地域の横穴式石室の源流として知られる百済中央では夫婦合葬と薄葬が基本であるのに対し、畿内地域では夫婦合葬が守られておらず、厚葬が行われる例がほとんどである。このように、6世紀末～7世紀前半には新しい文物が入ってきた後、在地の人々の抵抗感を徐々に減らし、ついに墓制と儀礼が合致し、合致する過程でも在地化した形態に変化させて受容する姿を最もよく示す画期であると評価できる。

7世紀中葉になると、7世紀前半に比べ墳丘と石室の規模が縮小する。古墳の消滅過程と解することができるが、石室の切石石材は加工度が向上し、築造に使われた石材の数も統一された。また、墳丘と石室の構造を緻密に計算して造営することで、外形的には華やかさを、構造的には安定感と統一性を意図している。前時期が古墳の造営に重点を置いたと

すれば、この時期はそれを超えて古墳の精美化に重点を置いたといえる。また、すでに7世紀前半に横穴式石室の埋葬原理と造営原理である墓制と儀礼が合致しているため、この時期には心性の二番目の要素である在地化（古墳の精美化）のみが顕著となる。

7世紀後半には在地の支配層に横口式石槨が取り入れられ始める¹⁸⁾。横口式石槨は横穴式石室の大きさが極端に縮小した形態であるが、別の埋葬原理を持つ墓制であったことは、出現した背景と使用主体を通じて知ることができる。大化改新により律令制度を取り入れ、政治構造が変化した、従来の氏族中心（物部氏・大伴氏は軍事、中臣氏・忌部氏は祭祀、蘇我氏は外交など、氏族別に職務を世襲）から氏族に関係なく、個人の能力に応じて国家の官等体系の中で職務を担当する官僚制に再編されることと関連がある。

大化改新の諸政策のなかに薄葬令がある。効用性については異論があるが、薄葬令の主な内容を見ると、国家は被葬者の地位によって築造可能な古墳の規模を制限し、葬具・造営日数・動員労働力の制限、殉死の禁止など、古墳の造営に関する規制が確認される。本来、古墳は氏族ごとに自由に造営されているため、横穴式石室の被葬対象となる範囲には夫婦・家族・親族などが含まれる。これに対し、横口式石槨は官僚である個人だけを対象に国家主導で造営が行われたため、単葬が基本である。その結果、追葬が最大の特徴である横穴系にもかかわらず、横穴式石室とは埋葬原理が異なるようになった。

横口式石槨の出現では、上述のように百済との関連性が指摘されている。百済では7世紀前後に単葬の陵山里型石室が出現する。当時の百済

18) 7世紀後半は本章の研究範囲から多少外れるが、論旨の流れ上、簡単にまとめることにする。

と日本との関係や日本での出現の時点と地域を考慮すれば、横口式石槨の埋葬原理と造営原理もまた、百済から影響を受けた蓋然性は十分ある。

横口式石槨の出現は新しい埋葬原理（墓制）が導入されたことを意味する。それはまた、新しい埋葬原理に合わせた造営原理（儀礼）が受け入れられ、融合するのに時間がかかることを意味する。一方、7世紀後半の儀礼の内容は国家律令に合わせており、仏教を利用して特別さを強調した大王墓以外には、宗教色を確認できる事例は少ないが、8世紀前後に編年される古墳からは壁画や火葬に宗教色が現れており、心性による選別的な行為である在地化が確認される。

以上、古墳造営に関する心性面的観点について考察した。人の心性は、墓制と儀礼が同時に出現した後、心性に当たる儀礼が当時の人々に完全に受け入れられるまでの時間差（保守性）と、受け入れられる過程で在地社会にふさわしい形態に選別・変化する在地化（在地性）の二つに大別される。二つの側面から古墳造営の変化を観察した結果、新しい墓葬祭を受け入れる際に、儀礼は墓制より徐々に進行（保守性）しながらも様々な形に絶えず変化（在地性）していく。このような様子は古墳時代後期から終末期の全時期にかけて確認できる。一方、墓制と儀礼が一致した時期は6世紀末～7世紀初頭で、畿内地域のみの横穴式石室の墓葬制が完成した画期といえる。そして、7世紀中葉は古墳の造営において単純な築造ではなく、精美化に重点を置いているため、在地化が確認できる時期である。

3. 技術的観点

古墳は社会・政治・経済・文化・思想・歴史・技術などを網羅した高度な建築物と言っても過言ではなく、当時の社会の精神的な表象とアイデンティ

ィティをよく示しているといえる。そのため世界史的に古墳の造営に力量を総動員した事例はエジプトのピラミッド、中国の皇帝陵など、様々な事例が確認されている。日本の場合、前方後円墳が代表的な例として挙げられる。前方後円墳の中でも大仙陵は世界で最も巨大な規模を誇っており、当時の古墳を取り囲む築造技術について多くの人々の関心を集めている。

3世紀後半頃、最初期の前方後円墳といわれる箸墓古墳が出現した後、5世紀後半までの前方後円墳には竪穴式の埋葬施設が構築され、この時期の最後の段階では竪穴式石室が構築された。古墳で最も重要な部分は埋葬主体部であり、古墳の規模や構造の華やかさにおいては埋葬主体部が重視されている。しかし、先に調べたように、弥生時代後期の大型墳丘墓から古墳時代の前方後円墳に至るまで、墳頂部・墳丘上・墳丘周辺で様々な儀礼が行われていたため、墳丘も埋葬主体と同様に重要な要素として認識されていたのが特徴といえる。

古墳時代において墳丘の長さが200mを超える前方後円墳は40基余りあり、300mを超えるものも7基が存在するが、そのほとんどは畿内地域に集中している。また2基を除き、古墳時代前期と中期に築造されたため、この時期までは埋葬主体部（竪穴式石室）より墳丘の規模や儀礼施設に労働力を集中させたと考えられる。実際、現在まで確認された竪穴式石室の寸検は概ね長さは前期が6～8m、中期が3～6mであり、幅と高さは1～2mの間である。古墳時代前期と中期の前方後円墳の規模を考えると、墳丘全体のうち、石室が占める部分は一部に過ぎないことが分かる。また、竪穴式石室と墳丘の築造技術の欠陥による墳丘内崩壊の事例は確認されていないため、墳丘は竪穴式石室の荷重に十分耐えることができたと考えられ、石室が墳丘の上段に位置しても構造的に特に問題点は発生

していなかった。

しかし、6世紀を前後して前方後円墳に主体部が横穴式石室に取り替えられ、建築工学的な問題が発生し始める。横穴式石室は羨道と玄室に構成されている。また、追葬が可能であるため、全体的に大型化された規模、玄室の天井を高く築造する横穴式石室の構造的特徴、そして特に巨大化した天井石など、横穴式石室の荷重は竪穴式石室とは比べ物にならないほど重くなった。また、横穴式石室は、中国や韓国では、地下あるいは地山層に築造されたため、異なる古墳造営技術が必要である。それにもかかわらず、前方後円部の上段に横穴式石室が位置しているのは、造営原理を知らない状況で築造された可能性が高い。

図31は重心の位置が構造物に及ぼす影響について示した図である。こ



図31 中心の位置による荷重圧力と支持力の状態（筆者作成）

れにより分かることは、古墳を造営する際、技術的に考慮しなければならないのは横穴式石室の造営位置と墳丘の盛土である。横穴式石室が重すぎるため、構造物（横穴式石室）が安定的で堅固に維持されるためには、全体の重心が重要である。力学的平衡状態が崩れても、一定の範囲内であれば、復元力が働き、再び元の状態に戻ることができてこそ安定的な構造物である。当然のことながら物理学的に重心は低いほど安定的で、重心が底面を離れると、構造物は重力の影響を受けるため、ますます不安定な状態になり、臨界点を過ぎると倒れるか崩壊する。そして構造物の下の部分にかかる荷重圧力と重力に対応できる程度の支持力（地

盤耐力又は垂直抗力) が伴わなければならないため、盛土の密度は緻密で堅くなければならない。すなわち、安定的な構造を持つためには、重心の下方化と支持力が必須条件といえる。

しかし、6世紀前半の墳丘盛土方法は、まだ横穴式石室の荷重に対応する支持力が伴わず、重心が上部に位置しているため構造的に脆弱であった。それにもかかわらず、墳丘の上部に石室を造営した理由は、死生観や儀礼行為とも関連があるが、構造的弱点を補うため、建築技術的に補強を試みたためと考えられる。それは6前半の石室底面の下で確認できる石室基盤補強工法である。荷重の重い横穴式石室底面を補強し、支持力を高めるために設置したものと考えられる。しかし、石室基盤補強

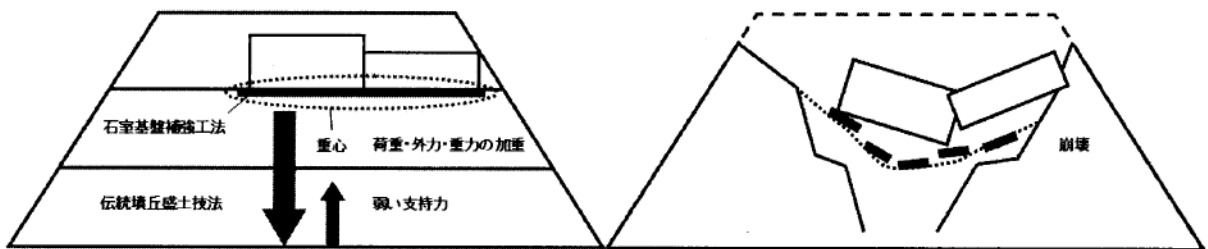


図32 6世紀前半の石室崩壊原因（筆者作成）

工法施設の位置も、墳丘の基底部から依然として高い位置にあり、またその間に位置する盛土には支持力を高めるための技術的補強は行われていなかったようである。結局、墳丘の基底面と石室基盤補強工法との間には、石室基盤補強工法の荷重まで加えてしまったので以前よりも強い荷重・外力・重力などが加重され、結局、復元力の臨界点を超えて崩壊が起きたものと考えられる。

実際に6世紀前半の古墳は、上述の築造技術上の欠陥により、大型古墳の横穴式石室が崩壊している場合(今城塚古墳・五ヶ庄二子塚古墳)や、中・小型古墳にも崩壊の危険性があるものが存在する(東乗鞍古墳)。市尾墓山古墳だけが比較的安定しているが、上記の古墳の中で石室の規

模が最も小さく、築造の高さも他の古墳より墳丘の基底面に近く、荷重、中心、支持力が復元臨界点を越えていないと考えられる。結局、伝統的な古墳造営能力では横穴式石室を造営することができないという技術的能力の限界が確認され、改善が行われた時期であると評価できる。

これらを踏まえて、6世紀中葉になると、直ちに古墳造営技術が改善された。横穴式石室の築造位置は前時期より下にあり、墳丘の基底面と1段目テラス上に石室が位置する。本稿の2節で詳述したように、1段目テラス上に位置した石室は、墳丘の周辺を掘って1段目を構築したのちに、その上に石室を築造したため（図15物集女車塚古墳参照）、6世紀中葉の横穴式石室はすべて地山層の上に築造されているという共通点を

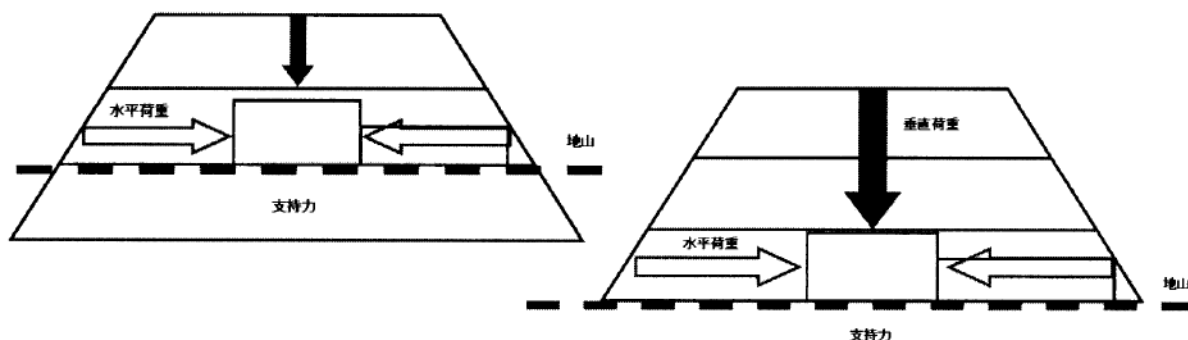


図33 6C中葉～後半、垂直・水平荷重による石室の位置と規模

持つ。地山層は自然層であり、基本的に盛土より土の構成密度が緻密で堅いため、上からの石室の荷重・外力・重力と下からの支持力に耐えられるようになり、崩壊の危険を避けることができた。このため、6世紀前半に石室底面の下で確認された石室基盤補強工法もなくなる。しかし、石室の位置が下向きになったため、逆に石室の上と横におびただしい量の盛土が行われるようになり、土圧（上からの垂直荷重と横からの水平荷重）による崩壊の恐れが新たに生じた。

盛土の荷重に対応するため、石室の石材が大型化し、結果的に石室そのものの規模も大きくなる。また、石材の隙間には城壁の築造方式であ

る「小石はめ込み技法」のように、小石をはめ込むことで壁体構造の安定性を高めた。その中には細長い棒のような石材で墳丘を突くように設置し、墳丘に石室を固定する機能を持つ楔石（深石）も確認されている。一方、小石が集まっている形態を土生田純之は調整区¹⁹⁾と定義したが、氏は調整区の生成原因を複数に分かれた石室の構築範囲を小石で満たすことによって現れる現象と理解している。しかし、この他にも技術的に壁体構造の安定性を高める様々な機能が確認されるため、調整区については今後、機能によって区分する必要がある。このような石室構築の流れは6世紀後半にも続くが、石室と石材の規模が大型化したことを除けば、技術的に大きく変わった点は確認できない。

一方、一例に過ぎないが、五条野丸山古墳は6世紀後半の古墳造営の技術的限界が如実に表れている事例と考えられる。五条野丸山古墳の最大の特徴は、石室の全長が28.4mと日本最大であるにもかかわらず、墳丘が大きすぎるため（約320m）、石室の玄室は墳丘中心から遠く離れている。大部分の古墳の後円部中央には玄室の中央または奥壁が位置するのが一般的であるが、大王墓と推定される五条野丸山古墳の位相を考えると、やや異例であるといえる。ここには古墳築造と関連し、築造技術上の問題点と見る余地があると考えられる。しかし、石室周辺の後円部が宮内庁によって管理されており、詳細な調査が行われていないため、推定の部分があることを予め前提にしておく。

図18を通して調べてみると、石室は1段目テラスの上に位置するが、

19) 調整区は石室の壁体を構築する際、いくつかの単位で構築範囲を区分するが、その際、中間で出会う部分の残余空間は一定ではない。したがって、埋め込む石材の大きさは均一ではなく、入り乱れた形で積み上げられ、その他の部分と構築方法に違いが出る。この部分を調整区と呼ぶ。

地山層に位置しており、支持力に対する問題はないことがわかる。一方、石室の大きさと比べると墳丘の大きさは圧倒的に大きいため（石室が確認された6世紀代の前方後円墳の中で最も大きい）、石室の上と周辺にかかる盛土の圧力が非常に大きい。しかし、この問題を解決できる技術力は前時期とそれほど変わっていないので、やむをえず玄室を墳丘の中央から外して築造するしかなかったと思われる。もし、最初から玄室を墳丘中央から外して構築する計画があったとすれば、羨道を異例的に長く構築する必要はなかっただろう。ところが羨道を長く構築するということは、可能な限り玄室を後円墳の中央に近く位置させようと試みたが、石室が耐えうる土圧の臨界点を超えると判断し、中止したようである。結局、玄室は曖昧な位置に置かれたと思われる。実際、羨道では数回にわたって長さを延ばした痕跡の付加沿道が観察されているが、墳丘の規模に合わせるため、羨道を延ばさなければならなかったことを示す証拠である。

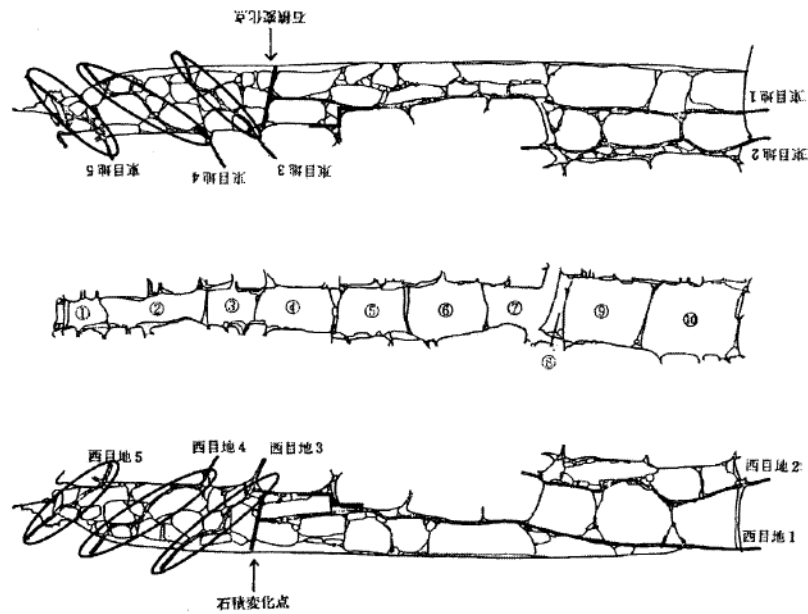


図34 五条野丸山古墳の付加羨道の目地痕（『書陵部紀要』第45号1994から編集引用）

玄室から羨道の入口部までは緩やかな傾斜がある。設計の最初から石室を傾斜があるように設計されたかもしれないが、盛土の垂直荷重により墳丘の中心に近いほど荷重が重くなることに加え、羨道が長すぎるため、構造的安定性は低い。したがって、羨道の天井石を見ると段差があることが確認できる。これは盛土の垂直荷重による沈降があった可能性、または羨道の構造的安定性を高めるためにわざと段差を付けた可能性がある。いずれにしても羨道に段差があることは不自然であるため、古墳の造営上の技術的限界・補強を示していると考えられる。

6世紀前半の石室基盤補強工法の事例でも同様であったが、技術的な限界が発生すれば、次の段階で直ちに改善が行われる。実際に五条野丸山古墳で指摘した技術的な問題は、次の時期の古墳では確認されていない。五条野丸山古墳ほど、垂直・水平荷重に取り囲まれた墳丘を持つ古墳はみられない。最も大きな技術的問題は墳丘の行き過ぎた巨大化だったので、前方後円墳の築造が終了する理由の一つであった可能性がある。

このほか、上述の五条野丸山古墳における技術的限界は、墳丘と石室のバランスにあると考えており、今後の発掘調査により墳丘と石室との関係研究が進展することを期待する。

6世紀末～7世紀初めには前方後円墳造営の終了により墳丘の規模が画期的に小さくなり、7世紀前半には石室が最も巨大化した時期である。特に計画的に石室を構築し始めるとともに、石室の石材に加工が施される。6世紀末～7世紀初には玄室に調整区をもたない石室が出現し、7世紀前半には設計段階から羨道の長さまで計画的に構築されたため、付加羨道がなくなる。また、ほとんどの石室は墳丘の基底面に位置するなど、石室と墳丘の構造的完成度は頂点に達する。このような様相から考えると、横穴式石室の造営原理と埋葬原理にふさわしい築造技術が完成された時期であるといえる。一方、7世紀中頃にはそれまでとは異なり、墳丘と石室の規模が縮小する傾向が見られる。古墳築造技術上の変化・発展はないが、墳丘と石室で精美化が確認される。これは古墳が築造技術的に完成し、安定化が進み、次の段階である精美化の段階に移行したものと理解される。また、石室の位置は7世紀前半と比較して1段目テラス上に造営される事例が多くなる。墳丘と石室の規模が縮小し、精美化の側面でのみ石室を造営した可能性が考えられるが、西宮古墳と峯塚古墳で見たように、地山層が石室の底の下に位置しており、あくまで技術的に安定性は確保された状態で古墳を造営していることが分かる。

7世紀後期（厳密に言えば中葉後期）～8世紀初まで²⁰⁾、埋葬主体部の規模が極端に縮小された横口式石槨が主流墓制として採用され、墳丘では版築が出現する。牽牛子塚古墳と高松塚古墳など、最上位の古墳から

20) 7世紀後半は本章の研究範囲から外れるが、論旨の流れ上、手短にまとめることとする。

主に版築の事例が確認されている。版築は土質の圧密現象を利用した技法であり、土は土粒子とその他の間隙部分で構成されている。土粒子間の隙間は普通、水と空気が詰まっているが、土を固める行為によって土粒子間の水と空気を最大限に排出して、粒子間の隙間を少なくするほど硬くなる。従来、安定的に石室を築造するためには、地山層の上に造営することが必須条件であったが、地山層より版築の圧密強度がさらに大きいので、古墳は墳丘や石室の位置にこだわらず、造営できるようになった。したがって、古墳の造営の最後の段階は版築の出現と見ることができ、環境に影響を受けた受動的造営から能動的造営への転換が行われたといえる。

以上、技術的観点を中心に古墳時代後期と終末期の古墳造営について考察した。6世紀を前後して前方後円墳に出現した横穴式石室は、埋葬原理と造営原理を正確に理解できないまま築造されたため、石室の位置と墳丘の盛土方法において建築工学的な問題が発生した。古墳造営工人たちは重心が高く支持力が弱い問題に対応するため、石室の下に石室基盤補強工法を施設したが、根本的な解決方法ではなかったため、結局、石室は崩壊に至る。こうした技術的欠陥を克服するために、6世紀中葉に石室を地山層に築造し、墳丘の下部に位置させる。しかし、逆に石室の上と周囲から大量の墳丘圧である垂直・水平荷重にさらされ、それを克服するための方法として墳丘の規模が縮小するか、あるいは石室の規模が大型化する。しかし、6世紀後半、墳丘が大型化しすぎた五条野丸山古墳で墳丘と石室のバランスが崩れる。6世紀末に前方後円墳の造営は終了し、7世紀前半に石室と墳丘の構造が完全に安定し、造営原理と埋葬原理が一致した古墳が完成した。7世紀中葉には安定化を超え、古墳の精美化が行われ、7世紀後半頃からは新しい墓制の横口式石槨と盛

土方法である版築が出現し、受動的古墳造営から能動的古墳造営への転換が行われる。

興味深い点は、古墳を造営する時、構造的に技術的な問題が発生すると、次の時期に直ちに問題点の改善が確認される。また、改善に関わる技術だけではなく、社会的ニーズに対応するための造営技術も出現するなど、絶えず石室と墳丘は変化・発展していく。一方、技術面的観点のうち、物理学的な部分に着目して、古墳の変化を把握したが、このほかにも古墳の造営には様々な技術的要素が存在している点も見逃せない。一例として、墳丘の盛土方法も時期ごとに新たな盛土法が出現し、墳丘の面積に対する高さが関連していることを指摘する研究もみられる。ここでは言及することができなかったが、今後さらに補完する必要がある。

第4節：小結

以上、時期ごとに変化する古墳の様相から、各観点（死生観的観点・心性面的観点・技術的観点）について検討した。簡単にまとめると表10のとおりである。

表10 各観点から見た古墳の変化の様相（時期別区分）（筆者作成）

	墳丘と石室の立面	墳丘規模	墳形	石室規模	石室加工度	埴輪
6C前半	墳丘の上段	前時期より小さくなる	前方後円墳	前時期より大きくなる	ほぼ同じ(自然石)	墳丘頂上部・墳丘上・墳丘周辺
6C中葉～後半	墳丘の下段と基底部	6C前半より小さくなる(五条野丸山古墳除外)		6C前半より大きくなる		ほぼ無くなる
6C末～7C初頭	墳丘の下段と基底部(基底部の頻度が高い)	どんどん前時期より小さくなる	円墳・方墳	6C中葉～後半より大きくなる	6C中葉～後半より加工度高い	なし
7C前半				6C末～7C初頭より大きくなる	6C末～7C初頭より加工度高い	
7C中葉	墳丘の下段と基底部(下段の頻度が高い)		円墳・方墳・八角墳	7C前半より小さくなる	7C前半より加工度高い	
7C後半～8C初頭	前時期とほぼ同じ	7C中葉より小さくなる		7C中葉より加工度高い		
死生観的観点	①6C前半～後半:伝統的の死生観と黄泉の国死生観が共存					
	②6C末～7C中葉:黄泉の国死生観					
	③7C後半～8C初頭:仏教死生観					
心性面的観点(墓制・儀礼・在地)	墓制(進歩的)	儀礼(報酬的)	在地化			
	①6C前半～7C中葉:横穴式石室	①6C前半～後半:伝統儀礼痕跡残存	①6C前半:横穴式石室+前方後円墳			
	②7C後半～8C初頭:横口式石槨	②6C末～7C中葉:横穴式石室儀礼	②7C中葉:精美化された横穴式石室+円墳・方墳			
		③7C後半～8C初頭:律令(仏教)儀礼	③7C後半～8C初頭:横口式石槨+八角墳			
技術的観点	①-1 6C前半:墳丘上段石室築造(重心と支持力の問題発生)					
	①-2 6C中葉～後半:墳丘下段と基底部石室築造(垂直・水平荷重の問題発生)					
	②-1 6C末～7C前半:墳丘基底部石室築造(技術の安定化)					
	②-2 7C中葉:墳丘下段と基底部石室築造(技術の精美化)					
	③ 7C後半～8C初頭:横口式石槨と版築(新技術の登場)					

時期ごとに横穴室石室の出現と巨大化、墳丘における石室の位置の変化、前方後円墳と埴輪造営の終了などがどのような意味を持っているか

について、死生観的観点・心性面的観点・技術的観点を通じて、古墳造営をめぐる当時の時代的狀況を合わせて総合的に検討した。「既存」の前方後円墳に「新しい」横穴式石室が出現した後、6世紀末に前方後円墳の造営が終了し、細部の偏差はあるが、「既存」死生観、心性、技術に対する古墳からの影響力が徐々に減り、「新しい」死生観、心性、技術に替わる。そして、横穴式石室が「既存」となった6世紀末～7世紀半ばに「新しい」横口式石槨が出現し、7世紀後半に「既存」横穴式石室に替わる一連の過程でも、前時期の前方後円墳と横穴式石室の關係に類似したパターンを示している。つまり、本章の方法論であった3つの観点が有機的に連動しており、古墳時代後期と終末期の古墳築造に深く関連して、出現-展開-衰退-消滅の過程に関与していることが確認できた。しかし、古墳の造営は、本稿で述べた観点をはじめ、当時の社会・政治・経済・文化・宗教・技術、そしてこれを共有し、どのように活用するかを決定する人々の心など、より多様な側面から捉えることができるため、筆者も今回の検討で完全に理解できたとは考えていない。依然として不足していると考え、上述したように深く検証することも重要であるが、複数の観点を活用して検討対象を様々な側面から把握すれば、今後、より研究が進展するであろう。